

平成28年度

実践集録

第Ⅱ期

卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実

(3年次/3年計画)

高知県立日高養護学校

《目 次》

はじめに	1
I 本年度の教育	2
II 校内研究の取組	3
III 小学部の研究	6
A組：横田奈美、石本理江、田村咲樹	
B組：岩佐ゆかり、井上 潤、門田知佐、山本明子、公文礼賀、宮中芳美	
C組：阪本久世、立間好枝、西岡正夫、谷 拓紀	
IV 中学部の研究	33
1年：橋田喜代美、山口智保美、森山陽介、酒井由美、岡本 肇	
2年：黒木彰子、土居実里、田中裕也、日向晴彦、秋山美幸、太田久栄、隅田晋成	
3年：井上さくら、大原康司、藤田 彰、永野千沙、山口りりか、河路恭太、池内希衣 仲田理恵子	
V 高等部の研究	60
1年：野々宮利恵子、岩川容子、森野知佳、宮中浩充、岡崎幸代、豊永将也、角田 勝	
2年：藤野陽子、清岡真史、渡邊真依子、松田紀美代、平地正幸、前田美奈	
3年：徳田 毅、高橋めぐみ、中川利彦、結城素子、前田朝子、公文菜子、江口正人 吉田 暁、森岡雅子、船井弘子 藤田和佐子、合田和久、藤本信之、石見聡貴、上元孝泰、西村健太	
VI 寄宿舎の研究	87
橋本 章、川口加代、藤岡正子、中野早ゆり、片岡和砂、岡林江里子、松本一孝、河野 紳 竹内由紀、久保田啓介、山中一平、佐藤 証、中村智美、武内啓輔、田中秀典、西野嘉晃 山岡あゆみ、浦岡佳史、櫻木香織、岡本雅代、浅野淳子、勝原真紀、中澤 忍、山本香織 土居甲奈子、松本有美子、矢野絵美梨、堀川廣美、北添純子、高橋亜希子	
VII 本年度の研究のまとめ	105

はじめに

共生社会の実現に向けて社会環境が進化する中、全国の特別支援学校では、子どもたちが「地域で豊かに生きていく力を目指す学校経営の在り方」についての研究や研修が進められています。

本校においても、平成21年度より日々の授業にキャリア教育の視点を取り入れ、子どもたちの障害の状態や発達段階に応じた適切な指導支援について実践研究を進めてきました。平成26年度からは、これまでの取組の成果と課題を踏まえ、キャリア教育の更なる充実を学校教育の重点目標に据え、児童生徒のキャリア発達をどう育てていくか、また、そのための授業改善はどうあるべきか、等について3年計画で研究に取組みました。本年度は「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育」をテーマに、この3年間の研究総括を行いました。各学部や寄宿舎においては、児童生徒の日々の授業や生活場面における指導支援に本校が独自で作成したキャリア発達段階表を活用することにより、授業改善の方向性や具体的な改善点を見出すことができました。また、各学部主事や分掌部長を委員とする「教育課程検討委員会」を設置し、現在の教育課程について検証と評価を行いました。検討委員会では、子どもたちに日々の学習を通して「何ができるようになるか」という観点での育てる資質・能力の整理、「何を学ぶか」という指導内容、「どのように学ぶか」という具体的な学びを考える等、カリキュラムマネジメントの視点で学校全体の構造や取組を評価し、教育課程の改善充実について検討を行いました。

一方、国においても次期学習指導要領の改訂に向け中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において審議が重ねられてきました。この審議のまとめでも、「社会に開かれた教育課程」の実現を通じて子供たちに必要な資質・能力を育成するという、新しい学習指導要領等の理念を踏まえ、教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラムマネジメント」の重要性が示されています。そして、全教職員が「カリキュラムマネジメントの実現」の必要性を理解し、日々の授業等についても教育課程全体の中での位置づけを意識しながら取組む必要がある、と提起されています。

私たち教職員の使命は、子どもたちが将来、周りの人々と共に力を合わせて幸せに暮らし、自分の人生を豊かにしていけるよう、一日一日を「よりよく生きる力」を身につけさせることです。その使命を達成するためには、子どもたちを取り巻く社会環境の変化を敏感に受け止め、学校教育の改善・充実に向けた新たな取組に柔軟に対応する必要があります。

本校教職員は、それぞれが得意とする専門的知識や技能を有しています。それらを一つに結集すれば、チーム学校としての大きなパワーとなり、様々な教育課題にも前向きに取り組んでいけます。子どもたちが「よりよく生きる力」を身につけ「豊かな社会生活」の実現に向けた、ますますの教育実践を期待します。

おわりに、校内研修において貴重なご指導ご助言をいただいた、植草学園大学発達教育学部 田所明房 先生をはじめ関係の皆さまに厚くお礼申し上げますとともに、この実践集録の編集を担当された研修部の先生方のご労苦に深く感謝申し上げます。

平成29年2月

高知県立日高養護学校長 渡辺 豊年

I 本年度の教育

1 校 訓

明るく、正しく、たくましく

2 教育方針

子どもの学ぶ楽しさや、生きる喜びを育てる教育を通じて目標を達成する。

3 教育目標

- (1) 児童生徒一人一人の能力・適性等に応じた教育活動を充実する。
- (2) 児童生徒の自立する力をつけ、社会参加に向けての適応力を高める。
- (3) 家庭や地域、関係機関と連携し、安全で安心できる学校づくりを進める。

4 目指す学校像

- (1) 子どもたちが楽しく学べる学校
- (2) 保護者が安心して子どもを任せられる学校
- (3) 地域の人々が振り返ってくれる学校
- (4) 教職員が意気を感じて仕事ができる学校

5 目指す児童生徒像

- (1) 小学部 自分のことは自分で行き、みんなと一緒に活動する児童
- (2) 中学部 個々の持てる力を高め、生活に必要な力を身につけた生徒
- (3) 高等部 自らの力を発揮することによって自己実現を図り、社会的自立につながる力を身につけた生徒
- (4) 寄宿舎 仲間と生きる喜びを共有し、生活自立や社会自立ができる力を身につけた児童生徒

6 平成 28 年度学校重点目標

柱	項 目	具 体 的 な 取 組 内 容
中期目標Ⅰ	知的障害教育の専門性を高め教育の質を上げる	
	教科等を合わせた指導	・作業学習における作業種の決定
	教材教具の工夫	・タブレット端末を活用した指導及び教材教具の開発（展開） ・外部講師を招聘しての ICT 研修 ・蓄積された教材教具の活用促進
	授業力の向上	・外部講師を招聘（全体への講話・研究授業の参観・助言） ・各学部で年間 1 回以上、年次研修者の代表 1 名が教科等を合わせた指導を中心とした研究授業の実施と上記外部講師による助言（ビデオ撮影）
中期目標Ⅱ	教育課題を整理し「〇〇教育」を生かしながらキャリア教育の充実を図る	
	防災教育	・火災に関する年間計画を作成し、児童生徒の年間指導計画へ位置付け（完了） ・2年間の取組に基づいた計画の見直し
	性に関する教育	・2年間の取組に基づいた計画の見直し
	情報モラル教育	・2年間の取組に基づいた計画の見直し

Ⅱ 校内研究の取組

【平成 28 年度の研究テーマ】

第Ⅱ期

「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実」

(3年次/3年計画)

1 平成 25 年度までの研究成果と課題

本校では、平成 21 年度から学部単位でキャリア教育の視点を取り入れた授業研究に取り組み始め、平成 23 年度からは全校研究テーマにもキャリア教育の視点を取り入れている。平成 23 年 1 月、中央教育審議会答申において、「キャリア教育とは、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」であり、「キャリア発達とは、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程のこと」と定義された。

この新たな定義を受けて、平成 24 年度～25 年度の校内研究では、第Ⅰ期「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実」という研究テーマを設定して 2 年間の取組を行った。その 1 年次には、日々の学習や寄宿舎生活がキャリア教育のどの能力と関連しているのか確認し、系統的なつながりのある指導に活かすことを目的として、高知県立日高養護学校キャリア教育全体計画及びキャリア発達段階表(2012 試案)を作成した。2 年次には、キャリア発達段階表(2012 試案)を活用した授業実践に取り組み、小学部から高等部に至るまで、キャリア教育の概念として示されている 4 領域(①人間関係形成能力②情報活用能力③将来設計能力④意思決定能力)を各学部の指導に位置付けた実践が進み始め、一定の成果があげられた。新たな課題としては、キャリア発達段階表(2012 試案)の意義や活用の仕方を共通理解して実践の中に定着させていくこと、そして、小・中・高の連携のためのよりよいツールになるように本試案の改善を図ることなどがあげられた。

2 平成 26～27 年度の校内研究

平成 26 年度から 28 年度までの 3 年間、キャリア教育を学校教育の中核に据えるという新たな学校重点目標が示された。(2 ページ参照) これを受けて、校内研究では「Ⅰ知的障害教育の専門性を高め教育の質を上げる」「Ⅱ小・中・高・舎における一貫した教育を行うためのシステムを構築する」という点を目指して取り組み始めた。前年度までの成果と課題も踏まえて、研究テーマは、第Ⅱ期「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実」(3年計画)と設定した。

1 年次は、各学部と寄宿舎で ICT 研修会を通じた教材教具の工夫、外部講師を招聘した研究授業による授業力の向上、キャリア発達段階表(2012 試案)の活用促進という 3 つの内容に取り組んだ。2 年次も同様の取組を継続し、タブレット端末を活用した指導の展開やキャリア発達段階表の活用を促進することができた。さらに、キャリア発達段階表が小・中・高の連携のためのよりよいツールになるように各学部で検討を重ね、2015 版として改善したキャリア発達段階表を作成することもできた。

3 平成 28 年度の校内研究方針

本年度は、第Ⅱ期「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実」(3年計画)という研究テーマを設定した最終年度に当たる。これまでの成果を土台に、キャリア教育の視点に立って日常的に授業研究を進め、児童生徒一人一人の卒業後の自立に向けてキャリア発達を支援し続けていきたいと考えて取組を進めた。その目的、具体的な取組内容、年間計画は次の通りであった。

(1) 校内研究の目的

- キャリア教育の視点を取り入れた授業研究を通して、児童生徒のキャリア発達を支援する。
- キャリア発達段階表を活用した実践を進め、小・中・高・寄宿舎の指導の連携を図る。

(2) 取組内容

中期目標Ⅰ
教材教具の工夫

- ・タブレット端末を活用した指導及び教材教具の開発(展開)
- ・外部講師を招聘したICT研修(8月)
- ・蓄積された教材教具の活用促進

中期目標Ⅰ
授業力の向上

- ・各学部で年次研修者が教科等を合わせた指導を中心に、ビデオ録画を活用して研究授業(年1回以上)
- ・外部講師を招聘した校内研において講話・研究授業への助言(2学期)

(3) 年間計画

月	全校研修日の内容	学部研究日の内容
4		各学部の研究内容について協議する。
5		各学部の実践内容について深める。
6	3(金)第1回校内研修会 内容:本年度の研究計画、キャリア発達段階表の周知、タブレット端末を活用した教材教具発表会	各学部の実践内容について深める。 キャリア教育の文献学習等
7		アセスメント① 児童生徒のキャリア発達の確認①
8	15(月)第2回校内研修会 内容:ICT研修会「知的障害教育におけるタブレット端末を活用した指導」 講師:高松 崇(NPO 支援機器普及促進協会理事長)	教材教具の開発 各学部の研究授業の計画等
9		各学部の実践内容について深める。
10		年次研修者のビデオ録画を活用した研究授業等
11	17(木)第3回校内研修会 内容:中学部作業学習の公開授業・研究協議 講師:田所明房(植草学園大学発達教育学部 教授)	年次研修者のビデオ録画を活用した研究授業等
12	26(月)第4回校内研修会 内容:人権教育研修会「虐待防止・いじめ防止」 講師:スクールソーシャルワーカー 片山正仁 スクールカウンセラー 土方美香	実践集録の原稿を作成する。
1		実践集録の原稿を作成する。
2	24(金)第5回校内研修会 内容:各学部・寄宿舎の実践研究発表会	本年度の反省と次年度に向けた検討をする。 共有フォルダ内の教材教具の整理
3	17(金)第6回校内研修会 内容:県外研修等の報告会	アセスメント② 児童生徒のキャリア発達の確認② 学部間の引き継ぎをする。

高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表（2016版）

※活用目的：日々の学習や寄宿舎生活がキャリア教育のどの能力と関連しているのか確認し、系統的なつながりのある指導に活かす。

		小学生		中学生	高校生
キャリア発達の段階		生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期		職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期
能力領域 ※1 ※2	観点	低学年で育てたい力	高学年で育てたい力	中学部で育てたい力	高等部で育てたい力
人間関係形成能力 <small>つなぐ力</small>	人のかかわり	認められたり、褒められたりすることにより自分の良さに気付く。		自分と相手の違いを知る。	現場実習における自分の能力や適性を知る。
	集団参加	友達と仲良く遊ぶ。	集団の中でいろいろな友達とかかわる。	友達と協力して学習に取り組む。	いつでも、どこでも、誰とでもいろいろな活動が行える。
	意思表現	自分の意思を表現する。	日常生活に必要な意思を表現する。	集団の中で自分の意見を述べる。	自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える。
	場に応じた言動	身近な人に挨拶や返事をする。	自分から挨拶をする。	状況に応じた言動をする。	場や状況に応じた言動をする。
情報活用能力 <small>みつづける力</small>	様々な情報への関心	家庭の仕事に興味をもつ。	身近な仕事に興味をもつ。	情報を得るための様々な方法を知る。	図書やインターネットを活用し必要な情報を収集する。
	社会資源の活用とマナー	学校のきまりを守る。	公共施設の利用の仕方を知る。	公共の基本的なきまりを守って行動する。	社会の様々な情報やサービスを知る。
	金銭の扱い	やりとりを通してお金の扱いに慣れる。	お金の大切さに気づく。	お金の役割を知り、使い方がわかる。	生活の中のお金の使い方について理解する。
	働く喜び	大人と一緒に係の仕事をする。	自分の役割を果たす。	社会には様々な仕事があることを知る。	実習や職場見学を通して、働くことの意義を理解する。
課題対応能力 <small>キャリアプランニング能力</small>	習慣形成	家庭や学校生活に必要な基本的な生活習慣を身につける。		職業生活に必要な基本的な習慣を身につける。	職業生活に必要な実践的な習慣を身につける。
	夢や希望		身近な働く人に関心をもつ。	憧れとする仕事や夢をもつ。	自分が力を発揮できる仕事への関心をもつ。
	やりがい	時間いっぱい活動する。	時間やきまり、活動の手順がわかる。	好きな活動をもち、自発的に取り組む。	余暇を含めて卒業後の生きがいを見つける。
	進路計画			将来の進路について考える。	将来の進路希望に基づいて目標を立てて努力する。
意思決定能力 <small>かなえる力</small>	目標設定	自分のことは自分で行うとする。	自分のやりたいことを最後までやり遂げる。	自分で達成可能な目標を立てる。	将来の自分を考えて、卒業までの目標を立てる。
	自己選択	自分の好きな遊びや活動を選ぶ。		自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む。	実習を通して、将来やりたい仕事を選ぶ。
	自己評価	活動や一日の振り返りをする。		よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。	現場実習などでの自分を評価する。
	自己調整		嫌な気分になっても立ち直ることができる。	様々なトラブルに対する対処方法を身につける。	卒業後に想定されるトラブルや対処方法を知る。

※1＝国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」より ※2＝中央教育審議会答申(平成23年1月)より

Ⅲ 小学部の研究

小学部テーマ「キャリア発達を促す生活単元学習(5年次) ～教材教具の工夫を通して～」

1 はじめに

小学部では、平成21年度からキャリア教育の視点を取り入れた以下のテーマを設定し、APDCAサイクル(Assessment:実態把握→Plan:計画→Do:実施→Check:評価→Action:改善のサイクル)に沿って授業研究を進めている。

【小学部テーマの変遷】

平成21年度:個々の実態に即した生きる力を育てる生活単元学習の授業づくり～キャリア教育を取り入れて～
平成22年度:児童個々のキャリア発達を高めるための授業づくり～チャレンジタイムの取組を含めて～
平成23年度:児童個々のキャリア発達を高めるための授業づくり～日常生活の指導の取組～
平成24～27年度:APDCAサイクルによる、キャリア発達を促す生活単元学習

平成26年度からは新しい中期目標の下、タブレット端末等の活用事例の発表会を取り入れて、小学部全体で教材教具の工夫を心がけながら、児童のキャリア発達を促す生活単元学習の授業研究に取り組んできた。また、キャリア発達段階表の活用促進の面から、児童の評価や授業の計画・評価などの際には、キャリア発達段階表の活用を継続している。

授業研究の実際は、各学級がサブテーマを設定して、1学期に「新しい教育課程と学習活動Q&A」(以下はQ&Aとする)とキャリア発達段階表を活用して児童のアセスメントを行った上で、2学期に研究授業を実施した。昨年度は、外部講師を招いた校内研修会で全学級の授業を公開して、発達段階に応じたキャリア発達を促す生活単元学習という視点から得た様々な助言を、それ以降の授業づくりに活かすことができ成果があった。

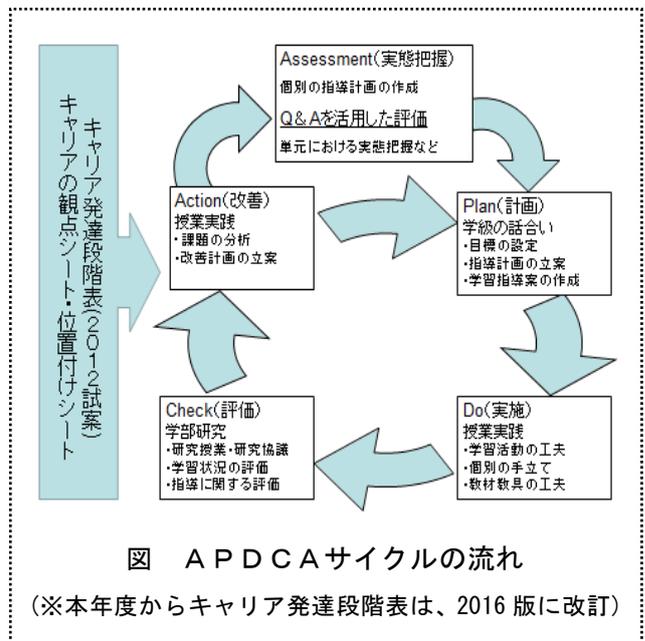
このような教材教具の情報交換会や研究授業を通してAPDCAサイクルによる授業改善を進め、学部全体で授業力の向上に努めることは、継続した課題と考えられる。

そこで、本年度の小学部研究もAPDCAサイクルによる授業づくりを継続して、小学部から高等部までの一貫したキャリア教育という全校研究テーマの達成を目指すため、上記の小学部テーマを設定して5年目の取組を行った。

2 研究経過

年間の研究経過は、以下の表の通りである。前半は、キャリア教育について共通理解を進めるためのミニ学習、校内研修会を活用した教材教具の発表会を中心に行った。

その後、各学級が年間1回の研究授業とビデオ録画を活用した研究協議会を行った。研究授業の学習指導案には、キャリア発達段階表を活用して「単元において育てたい力」をまとめた資料を挿入して、キャリア発達段階表の活用促進も図った。



児童のアセスメントについては、Q&Aを活用して7月と3月に評価をし、課題を整理した。同時に、キャリア発達段階表を活用して児童のキャリア発達を確認した。

各学級の実践は「3 実践事例」で、小学部全体のまとめについては「4 おわりに」で述べる。

期 日	内 容
4/27(水)	第1回学部研 ・研究テーマ・方法・年間計画について協議 ・教材庫の教材教具と共有フォルダの教材データについて周知
6/1(水)	第2回学部研 ・授業研究の進め方について確認 ・アセスメントツールとしてQ&A(2015学級集計版)を配付 ※学部会において学級経営案の周知 ※第1回校内研修会において教材教具の発表会
7/20(水)	第3回学部研 ・小学部の研究授業の期日について ・キャリア教育のミニ学習
夏期休業	クラス研究 ・児童の評価 キャリア発達段階表(2016)を活用した児童のキャリア発達の確認① 「新しい教育課程と学習活動Q&A」を活用した児童の実態把握①
9/6(火)	第4回学部研 ・小学部の研究授業の日程について確認 ・アセスメント結果について ・中学部公開授業の参観態勢について
10/21(金)	第5回学部研 生活単元学習の研究授業・研究協議 A組 単元名「キックゲームをしよう！」
11/11(金)	第6回学部研 生活単元学習の研究授業・研究協議 B組 単元名「一人でできるぞ！挑戦！簡単クッキング！！！」
11/18(金)	第7回学部研 生活単元学習の研究授業・研究協議 C組 単元名「修学旅行の思い出の作品を作ろう」
12/12(月)	第8回学部研 ・実践集録の原稿作成について確認
1/6(金)	第9回学部研 ・実践集録原稿(研修部)の検討
1/16(月)	学部会を活用して、実践集録原稿(A B C組)の検討
1/23(月)	学部会を活用して、実践集録原稿(研修部)の検討
2/7(火)	第10回学部研 ・本年度の反省と来年度の方向性について協議 ・教材データの保存、教材庫の整理
3/7(火)	第11回学部研 ・引き継ぎ資料の作成 キャリア発達段階表(2016)を活用した児童のキャリア発達の確認② 「新しい教育課程と学習活動Q&A」を活用した児童の実態把握②

【キャリア教育のミニ学習で活用した参考資料】

- 1 愛媛大学教育学部附属特別支援学校「研究集録41」p.37～44、平成28年1月

3 実践事例

(1) 小学部A組の取組「教材教具の工夫～自主性の向上をめざして～」

ア 取組にあたって

(ア) 学級の実態

本学級は、小学部1年生の男子1名と小学部2年生の男子3名で構成されている。4名とも自閉症スペクトラム障害である。1学期は、1年生2年生ともに新しい環境で落ち着きが見られなかったが、1学期後半には環境に慣れ、学習に取り組むことができるようになってきた。

コミュニケーション面では、全員がある程度口頭指示を理解し、行動することができる。教師や友だちのすることにも関心をもって、見たり関わったりする様子も見られる。

学校生活の中では、全ての学習活動において、スケジュールを活用することで最後まで授業に取り組むことができている。また、個々の実態としては、作業的な学習を行う児童、ひらがなをなぞったり、読んだりすることができる児童、時計の読みや簡単な計算などを行っている児童など実態はさまざまである。そこで、学習したことを実生活に活かせるよう、係活動や役割を意図的に設定して学習に取り組んでいる。

(イ) 研究方法

研究方法としては、APDCA サイクルに沿って、日々の授業を振り返り、授業改善や教材教具の工夫を行う。また、Q&A (2016) で児童の発達や経験の偏りを抽出し、それらを補う学習内容を設定するよう配慮する。

(ウ) 生活単元学習の年間計画

本学級は、低学年の学級ということもあり生活経験が少なく、また集団活動に慣れていないことが分かった。さらに、全員がスケジュールや手順表の活用ができ、それらの支援があることである程度の活動の自立の可能性があると思われた。このような実態から様々な経験を通して、生活経験を増やすこと、手順表や視覚支援の活用により、自主性の向上を目指すことを目標に年間の単元構成を行った。

	単元名	単元の目標
1 学 期	みんなで遊ぼう	○学校探検を通して、主要な教室を知る。 ○新しい友だちや教師との関わりに慣れる。
	野菜を育てよう（ピーマン、トマト）	○野菜を育て、収穫する喜びを味わうことができる。
	こいのぼりを作ろう	○手順表を見ながら、必要な道具や材料を取ることができる。 ○ハサミで紙を切る、糊で貼る、絵具を塗るなどをして作品をつくること ができる。
	なつまつりでお店を出そう	○「ありがとうございました」「いらっしゃいませ」を言うことができる。 ○働いたお金で、好きなものを買うことができる。 ○見通しをもち、何をするのかを理解して活動することができる。
2 学 期	色水遊びをしよう	○水遊びを通して、友だちと仲良く関わることができる。
	お芋を育てよう	○さつまいもの生長に気づき、収穫の喜びを味わうことができる。 ○手順表を見ながら、自分で作業をすることができる。 ○道具の使い方に慣れる。
	運動あそび	○活動の流れを理解し、一人で時間いっぱいコースを回ることができる。
	手のひら水族館を作ろう	○ローラーやはけの使い方を知る。 ○絵の具の感触に慣れる。 ○友だちと協力して一つの作品を作る。

	クリスマス飾りを作ろう	○見通しをもって、できるだけ少ない支援で、作品を完成させることができる。
	レストラン高知へいこう	○安全に留意しながら、道路を歩く。 ○公共交通や公共施設の利用の仕方やマナーを知る。 ○友だちや教師と一緒に、楽しい思い出をつくる。 ○しおりを活用して、荷物の準備や旅程の確認、振り返りができる。
3 学 期	卒業生を送る会に向けて準備をしよう	○劇の練習やプレゼント作りを通して、6年生が中学部に行くことが分かる。 ○劇遊びを通して、せりふを覚えて言ったり身体表現をしたりすることができる。 ○手順表を活用して、プレゼントを作ることができる。
	いちご狩りへいこう	○安全に留意しながら、道路を歩く。 ○公共交通や公共施設の利用の仕方やマナーを知る。 ○友だちや教師と一緒に、楽しい思い出をつくる。 ○しおりを活用して、荷物の準備や旅程の確認、振り返りができる。
通 年	カレンダーを作ろう	○手順表を活用して、ほぼ一人でカレンダーを作ることができる。 ○スケジュールシールを活用して、休日やイベントに見通しをもつ。
	調理をしよう	○身近な調理器具の名前や使い方を知ることができる。
	買い物にいこう	○交通ルールを守って、歩くことができる。 ○好きなものを選んで、買い物かごへ入れることができる。 ○適切なお金の扱いに慣れる。
	ゲームをしよう	○遊び方の流れを知り、楽しくゲームをすることができる。 ○ゲームの一連の流れの中で準備・片付けを行うことができる。 ○悔しい気持ちを受け入れ、自分なりの方法で折り合いをつけることができる。
	防災学習（年間5回）	○教師と一緒に落ち着いて避難訓練に参加できる。 ○地震や火事、避難についての知識を一つでも増やすことができる。 ○備蓄品を用意したり食べたりできる。

イ 実践事例

(ア) 単元名「キックゲームをしよう！」

(イ) 単元設定の理由

○単元観

本学級では、通年でゲームに取り組んでいる。繰り返しゲームを行う中で、遊び方を覚え、教師の少ない支援でも積極的に活動に参加することができてきた。そして、ゲームで準備や片付けを教師と一緒に行うことで少しずつ準備や片付けに取り組むことが習慣化してきた。しかし、大半の児童は教師の声かけや具体物を見せるなどの支援を必要としているため、ゲームの一連の流れの中で準備や片付けをできるだけ少ない支援で行うことが目標と考えられる。また、ボウリングで勝敗のある形式を取り入れたことで、相手の結果を気にしたり、負けたことで泣いて怒ったりする児童が数名見られた。このようなことから自分の気持ちに折り合いをつけていくことも課題とされる。

1学期のボウリング・的当てでは、積極的にゲームに参加する姿が見られた。その中で、教師と一緒に繰り返し準備・片付けにも取り組み、少しずつ自主性が育ってきているため、本単元でも一連の流れの中で見通しをもち、一人でも準備・片付けを行えるゲームを扱った単元にした。そこで、1学期の的当てやボウリングのように、児童に数や勝敗が視覚的に分かりやすく、見通しがもちやすい単元にしたいと考え、ボールを蹴って箱がいくつ倒れるかを競うキックゲームを設定した。

また、1学期にゲームで負けて悔しい思いをして、気持ちがコントロールできない児童や気持ちを表出できない児童がいたため、このゲームでは、負けることも経験できるよう意図的に設定したいと考えた。箱の積み具合やキックのコントロールで勝敗が左右されるように調節し、できるだけ勝敗が偏らないようにしたい。授業の構成として、まず初めの2時間では、勝敗を決めずにボールを蹴り、箱を倒す練習や片付け・準備・ゲームの流れを知る。ここでは、ゲームの流れやルールを知ることとゲームを楽しむことに重点を置きたい。蹴る経験が少ない児童には、一人で蹴って倒し成功体験を積んで、意欲を高めたい。中盤の8時間では、箱を積み、倒れた個数を競う。箱の積み方を考

えられる児童には箱を自由に積みせ、最終的にはどうやったら倒れやすくなるかなども自分で考えられる機会をつくりたい。最後の3時間は、チーム対抗で行い、“箱を積む人”や“蹴る人”など得意なことをお互いに補い、人との関わりがもてる単元構成にした。児童が意欲的に取り組めるゲームで、教師と一緒に活動から一人でもより主体的に活動できるようになってほしい。

○指導観

この単元では、できるだけ児童がゲームの準備を一人で行えるように、箱を積む、蹴る、採点をするという流れが教室を一周する動線になるよう、教材の配置を考えた。その中で、視覚的な支援をし、児童には自らゲームに取り組んでほしい。たとえば、「～点」という数え方ではなく、箱が倒れた数「～個」という数え方にし、数の概念が分からない児童にも倒れた箱を数字の書かれた一つ一つのかごに入れて数え、それと同じ数の磁石をホワイトボードに貼るという視覚支援を行う。また、箱の数を教師と児童と一緒に数えたり、マグネットを貼ったりする中で、数の意識も高めていきたい。

次に、1学期のゲームで競い合う中で、悔しいと思う気持ちが育ってきている児童もいるため、さまざまな実態に沿った対応が必要である。自分の思い通りの結果にならない場合に、気持ちが抑えきれずに自分や友だちに泣いて怒ってしまう児童に対しては、授業の初めに“負けても怒らない”などの約束が書かれたボードを掲示し伝える。また、悔しいという気持ちを表に出すことができない児童には、「悔しいね。」と教師が代弁し、児童の気持ちの表出モデルを示す。

さらに、負けた人や勝った人がいつも同じなど、蹴る力にも実態差があるため、できるだけ偏った勝敗にならないよう、スタートラインを前後に調整したり、積む個数なども変えたり、2チームに分けたりしながら、できるだけ箱を倒すことが難しい児童にも成功体験を積みませたい。

授業の終わりには、1位の児童に手作りメダルを渡し、表彰する。他の児童に対しては、iPadで撮影した動画を見せながら良かったところを褒める。児童全員を褒め、自己肯定感を高めるよう配慮しつつ、自分からゲームをしたいという意欲を高めていきたい。

(ウ) 単元の目標

○遊び方の流れを知り、楽しくゲームをすることができる。

【人間関係形成能力・情報活用能力】 (A、B、C、D)

○ゲームの一連の流れの中で準備・片付けを行うことができる。

【将来設定能力・意思決定能力】 (A、B、C、D)

○悔しい気持ちを受け入れ、自分なりの方法で折り合いをつけることができる。

【意思決定能力】 (B、C)

(エ) 単元において育てたいキャリア発達の力 (小学生の段階から一部抜粋)

人間関係形成能力	情報活用能力	将来設計能力	意思決定能力
・集団の中でいろいろな友達とかかわる。	・学校のきまりを守る。	・時間いっぱい活動する。 ・時間や決まり、活動の手順が分かる。	・嫌な気分になっても立ち直ることができる。

(オ) 単元指導計画 (全 13 時間 本時 7/13)

- ・キックの練習をしよう！・・・・・・・・・・ 2時間
- ・箱を積んで、キックで箱をたおそう！・・・・ 8時間 (本時 5/8)
- ・ペアで力を合わせて、箱をたおそう！・・・・ 3時間

(カ) 本時の学習（実施日：10月21日（金） 9：55～10：35）

(a) 本時の目標

- ゲームの流れを知り、できるだけ一人で箱を積み、ボールを蹴ることができる。
- ゲームに負けて悔しいときは、辛抱したり、気持ちを表現したりすることができる。

(b) 児童の実態と個別目標

(◎：目標以上、○：目標達成、△：がんばろう)

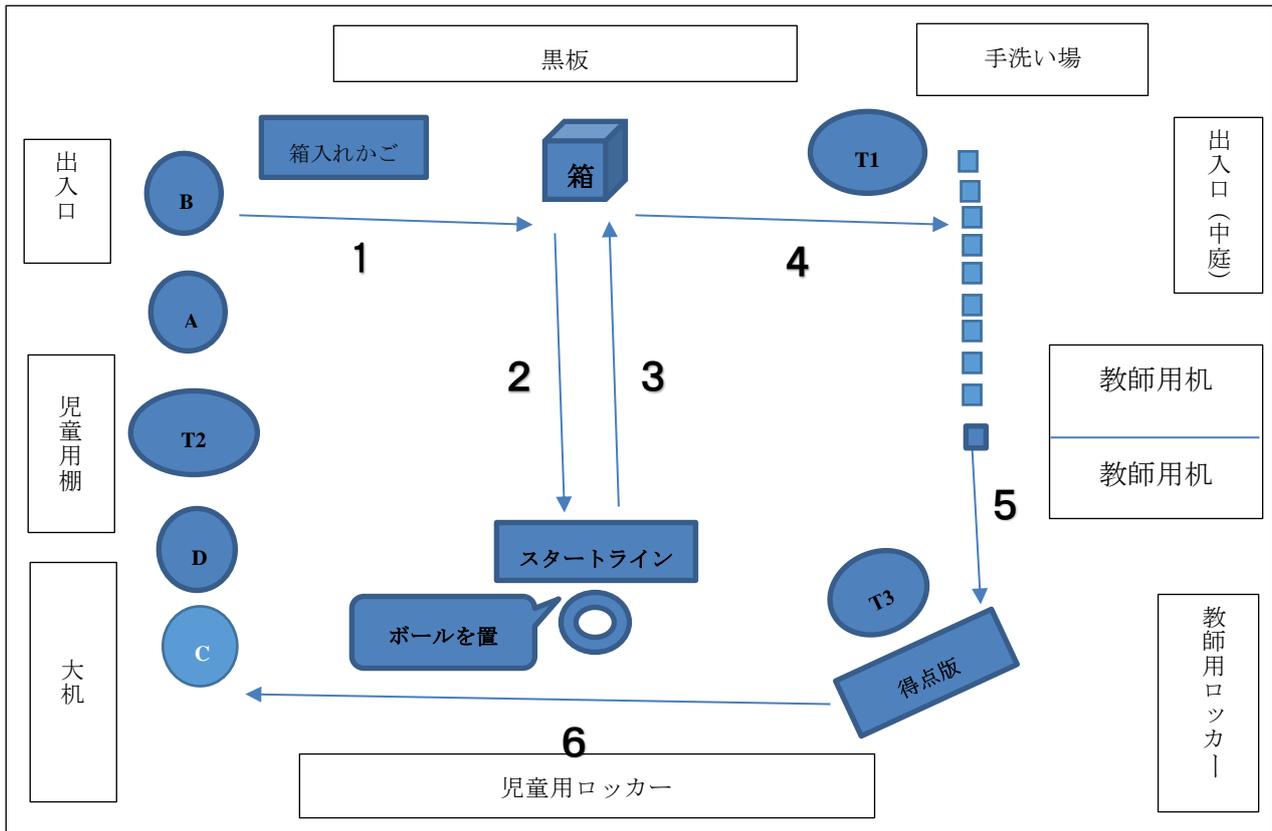
児童	児童の実態	個人目標	手立て	評価規準	本時の様子	評価
A	<ul style="list-style-type: none"> ・休み時間に校内を散歩するなど体を動かすことが好きである。 ・的当てやボウリングなどには、積極的に参加をし、楽しんでいて、投げの力が弱く、的やピンに届かず成功経験が少ない。 ・物が倒れたり、くずれたりすると「おちたね」と楽しそうに反応する。 ・友だちの姿をモデルにして活動内容や手順を覚えることができる。 ・物を口に入れることがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人でスタートラインからボールを勢いよく蹴って、箱を倒すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタートラインの位置を本児の目印として使っている黄色のテープで示し、「笛の音を聞いてから蹴ります。」と事前予告する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人でボールを蹴り、箱を倒すことができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームの流れを理解し、一人でスタートラインに立ち合図を待ってボールを蹴ることはできたが、勢いが足りず、箱には当たったが一個も倒すことはできなかった。そのため、ゲームへの意欲が低下した。 	△
B	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールを蹴ったり、バドミントンの羽を打ったり色々な運動を器用にこなすことができる。 ・勝敗があるゲームなどでは、1位を目指して、自分なりに工夫して勝つ方法を考えることができるが、負けると悔しい気持ちが大きく、言葉遣いが悪くなったり活動に参加できなくなったりすることがある。 ・自分で箱の積み方を考えながら、工夫をして箱を積むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・制限時間を気にしながら箱を積むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3分間のタイマーを見せ、残りの時間が分かるようにする。 ・残り1分のところで声かけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・タイマーや教師の声かけを聞き、時間内に箱を積むことができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・制限時間を気にすることはできたが思うように箱を積めず、気持ちの焦りから教師への八つ当たりが見られた。時間内に箱を積むこともできなかった。 	△
		<ul style="list-style-type: none"> ・負けたときや上手くいかなかったときに、友だちや教師に悔しい気持ちをぶつけずに、我慢することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・悔しい気持ちを上手く表現できていないときには、教師が正しい言葉で言い直す。 ・我慢できている様子が見られたときには褒める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・負けたときや上手くいかなかったときに、大きな声を出したり、友だちや教師にあたったりせずに、気持ちを我慢しようとする様子が見られたか。 		△
C	<ul style="list-style-type: none"> ・積んだ箱を見て蹴ることができるようになってきている。 ・箱を積むときに、自分で積みたい積み方にこだわることもある。 ・コミュニケーションを積極的にとることができる。勝ち負けが分かりはじめているが、負けてしまうと黙って、「悔しい」という気持ちを押し込んでしまうことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師のアドバイスを受け入れて、他のことに気を取られずに、箱を積むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・箱の積み方の手本を児童の目の前で見せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師のアドバイスを受け入れ、見本を見たりして、箱を積むことができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の積みたい積み方にこだわり、教師の声掛けや手本に意識が向いていなかった。積み方にこだわったため、一人で積むことができなかった。 	△
		<ul style="list-style-type: none"> ・負けたときに、教師と一緒に、悔しい気持ちを言葉で表すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が「悔しかったね」などその場に合わせて児童の気持ちを代弁する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・負けたときには、教師と一緒に、気持ちは言葉で表現することができたか。 		○

D	<ul style="list-style-type: none"> ほとんど一人で箱を積むことができ、箱に向かって蹴ることができる。 1つの活動に2つ以上の内容があると混乱し、参加することが難しくなることがある。 ボールを好み、休み時間にボールを投げたり蹴ったりして遊ぶことがある。 積んだ物などを倒したりすることを好み、残った箱を倒しに行くことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師と一緒に待ち、笛の合図の後にボールを蹴ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 笛の合図が鳴るまでは、T2が手をかざし、声掛けをして一緒に待つようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 笛の合図が鳴るまで教師と一緒に待つことができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> T2が手をかざして制止することで、笛の合図があるまで教師と一緒に待つことができた。 	○
		<ul style="list-style-type: none"> ボールを蹴った後に教師の声掛けや指さしを受けて残った箱を倒さずに次の活動に移ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ボールを蹴った後に、T1が倒れていない箱の前に立ち、次の指示を出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ボールを蹴った後に、教師の声掛けや指さしを受けて、残った箱を倒さずに次の活動に移ることができたか。 	<ul style="list-style-type: none"> 蹴った直後に倒しに行った。 	△

(c) 本時の展開

時間	活動内容	指導上の留意点
導入 9:55	<ul style="list-style-type: none"> 着席し、はじめりの挨拶をする。 本時の活動内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 全員が前を向いてから挨拶をする。 本時の活動内容をスケジュールで掲示する。 集中して話が聞けるよう、前の掲示物を最小限にする。 児童が見やすい場所に移動するよう声をかける。
展開 10:00	<ul style="list-style-type: none"> ゲームをする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ol style="list-style-type: none"> 箱を積む (10 個) スタートラインからボールを蹴り、箱を倒す。 箱をかごに入れて、倒れた数を数える。 得点版に磁石を貼る。 得点を B がホワイトボードに書き、発表する。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ゲーム前に蹴る順番を発表する。 蹴るところを iPad で撮影する。(T3) 箱を積み終える時間をタイマーで知らせる。(T1) スタートラインのカラーテープを越えないよう声かけをする。(T1) 笛を鳴らし、蹴る合図をする。(T1) 蹴る児童以外の児童と同じところで座り、蹴る児童に注目できるよう声掛けをする。(T2) 児童が箱を倒したら、倒れていない箱を教師がすばやく別の場所へ置き、倒した箱と倒れていない箱が混乱しないように配慮する。(T1) 数えることが難しい児童には、指さしをしながら児童と一緒に数を数えるようにする。(T3)
まとめ 10:30	<ul style="list-style-type: none"> 表彰式をする。 → 1位の児童は、前に出て、メダルをもらう。 振り返りをする。(今日のゲームの動画をテレビで見る) 後片付けをする。(階段下倉庫前へ持っていく) 着席し、おわりの挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 1位の児童の名前を呼び、「はい」という返事をするまで待つ。 1位以外の児童にも注目させ、達成感を味わえるようにする。 「○○君も上の方の箱を上手に倒したね！」など具体的な言葉かけを児童の目を見て伝える。 何をどこへ片付けたらよいか分かるように片付けの場所を写真やイラストで明示する。 全員が前を向いてから挨拶をする。

(d) 配置図



(e) 本時の様子



写真 1



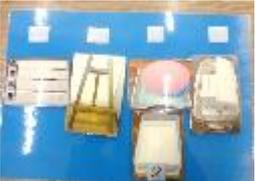
写真 2

写真 1 : 箱を積んでいる場面

写真 2 : ボールを蹴っている場面

(f) 本単元で使用した教材教具

	<p>【ボール置き】 矢印で示されているホースの部分ボール置きである。 蹴る前にボールを安定させる場として設けた。</p>
	<p>【e-ball】 人や物に当たっても危険がないようスポンジボールを使用した。 また、児童の技術面の差が少しでも解消できるよう、軽いボールを選択した。</p>

	<p>【箱】 自分で箱の積み方を考えられるように色々な形の箱を使用した。 (研究協議での助言を受けて、同じ大きさの箱には同じ色のビニールテープを巻いた。)</p>
	<p>【倒れた箱を数えるためのかご】 待っている児童にも何個箱が倒れたのかが分かるように、かごの表側に大きい数字を貼り、箱を数える児童にも数字が分かるようにかごの中に小さい数字を貼っている。</p>
	<p>【片づけ分担表】 空いているマジックテープのところに児童の顔写真を貼り、どの児童が何を片づけるのかを表にしたもの。</p>

(キ) 研究授業を終えて

本時は小学部の研究授業として、授業後、研究協議を行った。以下に、その助言をまとめる。

- ・ゲームの動線がわかりやすく、児童がわかって動いている様子がみてとれる。
- ・箱を積むという活動は、児童がよく集中して取り組んでいてよい。
- ・前の児童が得点を貼っている間に、次の児童が準備をしている流れは、時間を効率よく使えている。
- ・蹴る児童が活動中、待っている児童がその様子をよく見ることができている。
- ・同じ大きさの箱に同じ色のビニールテープを貼り、積みやすい視覚支援が必要。
- ・ボールの大きさを変える、スタート位置を変えるなど、児童の蹴る技術の差を縮める工夫が必要。
- ・箱をかごに入れる際に、投げないための工夫を行った方がよい。
- ・制限時間を過ぎたら失格など決めたルールは徹底するべきである。
- ・蹴ることより積むことの方に重点があるように思う。時間調整の工夫が必要。
- ・思い通りにいかないときに不安定になる児童に対する、心理的な支援は今後の課題である。

(ク) 単元を振り返って

研究授業で得られた課題を改善して授業を行った。ここでは、単元を終えての成果と課題を振り返る。

a 成果

ゲームの流れや後片付けについては、ゲームの回数を重ねるごとに全員が見通しをもって、自主的に取り組むことができていた。

初めはルールが分かっていたいなかった A は、箱を倒せたら良いということが分かりはじめ、箱を狙ってボールを蹴ろうとしたり、箱が倒れると「(箱が)倒れたね!」と嬉しそうに喜んだりする姿が見られた。また、思い通りにいかないときに自分の気持ちをコントロールすることが難しかった B も、最後のゲームでは、クラスの友だちに「負けたね、一緒やね」と言い、自分の気持ちを切り替えようとする様子が見られた。さらに悔しい気持ちを表出できなかった C も、補助の教師と一緒に「残念」など悔しい気持ちを表出できるようになった。

b 課題

ゲームの回数を重ねるごとに、流れは理解できたが、箱を積んだり、ボールを蹴ったりするなどの技術の差は縮まらず、勝敗に偏りが生じた。その結果、児童の意欲が低下し、箱を噛んだり、わざと箱を倒したりする行動が見られた。

そこで、当初は最後に児童同士のペアの対戦を計画していたが、実態として、一人で箱を倒す経験が十分にできず、達成感が味わえていないという状態であったため、急遽、教師とペアで行い、蹴る・積む技術の指導や補助を行った。そうすることによって技術の差を縮めることができ、バランスの良いゲームが成立するようになった。また、教師が対戦に参加することで応援の仕方や励ましの仕方などモデリングの対象にもなり、B にとっても良い影響を与えることができた。このことから、単元の序盤で教師とのペアを取り入れるべきだったと感じた。

ウ 取組の成果と課題

(ア) 成果

本学級の学習では、すべての授業に共通して、授業全体のスケジュールを提示したり、作業に関しては手順表を用いたりした。それによって、準備から片付けに至るまで、授業全体を通して、少ない口頭指示のみで自分で分かって、動くことができるようになってきた。また、自分一人で活動する経験を多く積んだことにより、心理面でも「一人でやりたい」「僕がやりたい」という自立心も育ってきている。友だちのモデリングをする場面も見られるようになり、友だちとの関わりも増えたと感じている。

(イ) 課題

自主性を向上させる手立てを講じたことで、一連の流れに沿って自分で動くことはできるようになったが、一つ一つのスキルの確実性や丁寧さまで、支援ができていない部分が見られた。(道具の使い方、日常生活動作など) 低学年であるからこそ、教師と一緒に取り組み、スキルの基礎を育てる支援が必要であったと思われる。

(ウ) まとめ

一年を通し、自主性を育てる支援を行ったことで、児童全員の自立度は向上してきたと思われる。また、授業の流れや活動内容を分かりやすくし環境を整える中で、自ら動き、自ら考える思考の芽生えもわずかに見られ始めている。低学年の集団である本学級では、今年度は自主性の向上を目指したが、次のステップとして主体性の土台作りに向けて取り組んでいきたい。

(2) 小学部B組の取組「できるだけ一人で活動できる授業づくり」

ア 取組にあたって

(ア) 学級の実態

本学級は、小学部3年生の男子3名と小学部4年生の男子2名、女子2名で構成されている。全員が自閉症スペクトラムを併せもっており、3年生と4年生が同じ学級になったのは今年度が初めてである。日常生活や学習面で常時教師の支援が必要な児童から、日課を理解して自分から取り組むことができる児童まで、実態に大きな差が見られる。また、集団での学習や初めての活動場面が苦手な児童が多く、気持ちの面で不安定になると他害行為が見られる児童もおり、児童によって課題も様々である。今年度は、昨年度までに身につけた生活にかかわる基礎的な力をより定着させることを願い、次のような学級目標のもとに一年間の取組を行った。

- | |
|----------------------------|
| ① 運動を継続し、健康な心と体をつくろう。 |
| ② 自分でできることを増やそう。 |
| ③ いろいろな活動を通して、好きなことを見つけよう。 |
| ④ きまりを守り、自分の役割を果たそう。 |

(イ) 研究方法

生活単元学習の研究については、小学部の研究方法に沿って APDCA サイクルで取り組み、日々の授業を振り返り、授業改善や教材教具の工夫を行った。

(ウ) 生活単元学習の年間計画

生活単元学習では、これまでの学習経験の積み重ねの上に、さらに生活体験を増やして好きなことを見つけるとともに、できるだけ一人で活動できる力を伸ばす取組をしたいと考えた。今年度は、調理学習や買い物学習を中心に単元構成をし、学習意欲をもたせるような工夫（同じ活動を繰り返し行うことで、活動に期待感や楽しみをもって取り組めるようになること）や見通しをもたせるような工夫（個々の児童が活用できる手順書を作ることでやり方がわかり、部分的に一人でも活動できるようになること）、さらには環境設定などにも工夫（活動しやすい教場を準備する）して取組を行った。

	単元名	目 標
1 学 期	レッツ チャレンジ! (買い物に行こう)	<ul style="list-style-type: none"> ・買い物や買い物ごっこの経験を積み、ひとりでできるスキルを増やす。 ・好きなお菓子を選び取ることができる。 ・友達や先生と手をつないで安全に歩く。
	校内たんけんをしよう	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい友達や先生と校内を探検することを楽しむ。 ・校舎内の部屋や教室の名称を知る。 ・普段行く機会の少ない場所に行き、そこにいる先生の顔を知る。
	母の日のプレゼントを作ろう 父の日のプレゼントを作ろう	<ul style="list-style-type: none"> ・母の日や父の日について知る。 ・ありがとうの気持ちを込めてプレゼントを作る。
	さつまいもを植えよう	<ul style="list-style-type: none"> ・イモを植える期待感を持ちながら土を運ぶ。 ・水やりなどでサツマイモの生長に気づくことができる。
2 学 期	レッツ チャレンジ! (調理をしよう)	<ul style="list-style-type: none"> ・活動内容が分かり、参加することができる。 ・料理に必要な材料を知ることができる。 ・手順書を活用し、一人で焼きそばを作ることができる。
	さつまいもの収穫をして 食べよう	<ul style="list-style-type: none"> ・さつまいもを収穫する喜びを味わう。 ・自分の役割を果たす。 ・友達と一緒にバター焼きイモを作り、おいしく食べる。
	作品を作ろう (学習発表会、作品展に向けて)	<ul style="list-style-type: none"> ・水糊の感触を味わいながら紙粘土を作る。 ・手順書を見ながら、顔のパーツを貼り自分の顔を作る。

	作品展を見に行こう	<ul style="list-style-type: none"> ・校外でのマナーや公共交通機関の利用の仕方を知る。 ・交通費や食事代を準備し、自分で支払う経験をする。 ・期待感をもって作品展見学に臨む。
	地震・火事から身を守ろう（前）	<ul style="list-style-type: none"> ・災害時の身の守り方や避難について知る。 ・適切な避難の仕方を身につける。 ・防災食作りを経験する。
	クリスマスの飾り作り	<ul style="list-style-type: none"> ・クリスマスに期待をもつ。 ・活動に最後まで参加する。 ・手順書や見本を手がかりに一人で活動する。
3 学 期	レッツ チャレンジ！ （買い物をして調理をしよう）	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な材料を買うことができる。 ・手順書を見ながら、協力してお好み焼きを作ることができる。
	地震・火事から身を守ろう（後）	<ul style="list-style-type: none"> ・備蓄食について知り、備蓄食を食べる経験をする。 ・災害時の避難について復習をする。
	卒業生を送る会を成功させよう	<ul style="list-style-type: none"> ・劇の取組やプレゼント作りを通して6年生と別れることを知り、感謝の気持ちで送る。
	学年のまとめをしよう	<ul style="list-style-type: none"> ・お別れ遠足やカレーパーティーを通して、思い出を作る。 ・進級することで学級の友達と別れて学習することを知る。
通 年	ゲームをしよう	<ul style="list-style-type: none"> ・順番などの簡単なルールがわかる。 ・同じ学級の友達ということを意識して楽しくゲームをする。 ・負けても悔しい気持ちを我慢することができる。
	カレンダーを作ろう	<ul style="list-style-type: none"> ・はさみや糊などの道具の扱いに慣れる。 ・手順書に沿ってできるだけ一人で活動する。 ・数字や曜日をなぞりや視写で書くことができる。

イ 実践例「テーマ：レッツ チャレンジ！」

ここでは、一連の流れの中で行う調理学習に向けての長期計画として、買い物・調理の実践の中から調理に焦点を当てた取組を取り上げる。

（ア） テーマを設定するにあたって

本学級の児童は、昨年度カレーライスやおにぎり作りなどを経験している。用意された道具、材料を使って教師と一緒に野菜を切ったり混ぜたりして、みんなで協力して一つのものを作った。繰り返すことで簡単な工程であれば、自分の任された活動が分かり落ち着いて取り組むことができる。しかし、手順書などを活用しながら一つ一つの工程を把握して行動したり、できるだけ教師の支援を受けずに一人で何かを作ったりすることには課題があった。将来的に一人で料理をして食事をとることができると考えられる児童もいるため、必要な材料を購入して、料理をするという経験を積んでいく必要もあると考えた。しかし、本学級の児童は食への課題がさまざまであり、共通して食べられるものを設定することが難しかった。食べられるものだけではなく、活動内容が児童に合っているか教師間で相談をしながら選択をしていった。そこで、今回調理するメニューは、三つ設定し、一人一人に合った内容に対して十分な指導をするために二つにグループ分けをして学習することとした。ここからは、Aグループの実践を紹介する。

（イ） テーマ「レッツ チャレンジ」の年間計画

1 学期	2 学期	3 学期
①買い物の練習をしよう ②スーパーへ買い物に行こう	①焼きそばを作ってみよう ②必要な材料を用意して、焼きそばを作ろう	①お好み焼きをつくろう ②材料を買って、お好み焼きを作ろう

(ウ) 授業の概要

a 単元名「一人でできるぞ！挑戦！簡単クッキング！！！」

b 単元設定の理由

1学期の「わくわく！どきどき！ショッピング！」という単元では、買い物の一連の流れを身に付けることを目指して、買い物の練習と実際にスーパーに行く学習を繰り返し行ってきた。全員が共通で“好きなお菓子を買う”ことを通して、興味・関心をもち、意欲的に活動できることを目指して取り組んできた。かごを取ることや、レジで財布を出すことなど一つ一つの行動に教師の声かけや指示が必要な児童が多かったため、実際のスーパーで般化できるように教室での買い物練習を行った。繰り返し練習することで、店に入ったらかごを取ることや、レジにかごを置いたらカバンから財布を出し、お金を出すという一連の流れを一人で行うことができるようになってきた。教師の少ない声掛けに応じたり、一人でできるようになったりしてきた児童が増えたため、3学期に計画している買い物をして調理をすることに向けて、2学期は調理に焦点を当てた単元を設定した。

本単元では、グループの児童全員が共通で好きな焼きそばを作る。野菜が苦手な児童が焼きそばを作ることを通して少しでも野菜を口にしてほしいという願いも込めて設定した。また、調理学習は、活動の中にいくつもの工程があるため、それぞれの児童に合った今一人でできてほしい力を個々に設定することができる。野菜を食べることに課題がある児童もいるが、好きなものを作ることを通して調理学習そのものが楽しいものであると感じてもらいたい。そして、“自分にもできる”“作れた”という経験をたくさん積み、今後のさまざまな活動に対する意欲や挑戦してみる力につなげていけることを願っている。

指導にあたっては、活動中はできる限り教師が手を出さずに行動できるように一人一人に合った手順書を活用し、“一人でできた”という達成感を味わうことができるようにする。そのため、今回の調理には包丁を使わずに手でちぎって活動ができるような材料を使用する。そして、今後家庭で料理をする際に火を使って危険が生じないように、ホットプレートでの調理を行う。やけどには注意が必要であるが、温度調節も自分でしやすく、火事になる心配が少ない。また、1学期に行った買い物学習につながる学習にするために、使用する材料を知ったり、準備をしたりする活動を取り入れながら調理を行い、次の単元で買い物をして調理をするという流れで授業を進めていくことができるようにする。

c 単元の目標

○活動内容が分かり、最後まで参加することができる。【将来設計能力】

○料理に必要な材料を知ることができる。【情報活用能力】

○手順書を活用し、一人で焼きそばを作ることができる。【意思決定能力】

d 本単元において育てたいキャリア発達の力（○をつけた項目）

情報活用能力	将来設計能力	意思決定能力
<ul style="list-style-type: none">・家庭の仕事に興味をもつ。・大人と一緒に係の仕事をする。・自分の役割を果たす。	<ul style="list-style-type: none">・家庭や学校生活に必要な生活習慣を身に付ける。・時間いっぱい活動する。・時間やきまり、活動の手順がわかる。・好きな活動をもち、自発的に取り組む。	<ul style="list-style-type: none">・自分のことは自分で行おうとする。・自分のやりたいことを最後までやり遂げる。・よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。

e 単元の学習指導計画（全 14 時間）

○焼きそばを作ってみよう・・・6時間

○必要な材料を用意して、焼きそばを作ろう・・・8時間（本時 7 / 8）

f 本時の学習（実施日：11月11日 9：55～11：35）

1) 本時の目標

○必要な材料を用意することができる。

○手順書を見ながら、一人で焼きそばを作ることができる。

2) 展開

学習活動		指導上の手立て・留意点
導入 (15分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 始まりの挨拶をする。 ・ 学習内容を知る。 ・ 手洗いをする。 ・ 身支度をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 写真を掲示し、焼きそばを作ることを知らせる。 ○ 焼きそばに必要な材料を確認し、写真を掲示する。 ○ ホワイトボードにスケジュールを貼り、これからすることが分かるようにする。 ○ 手洗いの手順書を流し台に貼り、きれいに洗うことが意識できるようにする。
展開 (30分) (15分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ クッキングをする。 調理道具を用意する。 材料を用意する。 焼きそばを作る。 ・ 焼きそばを食べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 手順書を見ながら、必要な材料や調理道具を用意できるようにする。 ○ 必要なときは適宜声かけをしたり、手順書を指さしたりして確認できるようにする。 ○ 全員がそろってから「いただきます」の号令をかける。
まとめ (25分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 食器、調理道具を洗う。 ・ 掃除をする。 ・ 終わりの挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 食べ終わったら食器を洗い、洗ったものは食器入れに入れるように伝える。 ○ 掃き掃除をし、雑巾がけをするように伝える。

(エ) 授業を終えて

ここでは、小学部研究の中で協議された評価や助言をまとめる。

a 本単元の評価

○グループ分けについて

生活単元学習の目的によって、全体で取り組むか、グループに分かれて取り組むか決めるとよい。今回は“一人でできる”が目的であったので、グループを分けて個々に応じた学習にしたのはよかった。

○教材・教具について

教師がほとんど話さずに、子ども達だけで活動していた。声かけも必要最低限であり、子ども達がやるべき活動を理解して手順書を活用しながら集中して取り組んでいた。道具は、一人一人に合ったものを用意できていた。今回は一人で活動できるように包丁を使わずに材料は手でちぎるように設定されていたが、将来のことも見据えて、手添えしてでも必要な子どもには包丁を使わせたり、それが難しければキッチンバサミを使わせたりするなど、ちぎる以外の手段を知ることも必要

ではないか。

b 児童の実態・目標・評価 【評価：◎十分できた ○ほぼできた △がんばろう】

児童	本時に関わる実態	本時の個人目標	評価規準	評価
A	料理をすることが好き。イラストや写真で示した簡単な手順書を活用して、一人で材料を入れることができる。混ぜること、混ぜ具合を判断することには課題がある。焼きそばは好きであるが、野菜が苦手。少ない量の野菜を使用し、苦手な野菜も一口は食べるようにしている。温度調節をすることは難しい。	・手順書を見て、材料を準備することができる。	・必要な材料を用意することができたか。	◎
		・一人で最後まで作ることができる。	・手順書を見ながら、焼きそばを作ることができたか。	○
B	焼きそばが好きである。動画やイラストで活動内容を理解することはできるが、行動に移るまでに時間がかかる。教師の声かけを待ったり、手伝ってもらおうとしたりすることが多い。混ぜることには課題があるため、声かけが必要である。温度調節をすることは、難しい。	・必要な材料を用意することができる。	・写真を見ながら5つの材料を取ることができたか。	◎
		・手順書を見ながら、材料を入れることができる。	・手順書通りに材料を入れることができたか。	◎
C	初めての活動には不安意識があり、手順書を示しても教師の同意を求めてくる。できないことが少しでもあると、「できない」と言って活動したがないことがある。火や油が怖く、ホットプレートの温度を調節することや野菜を入れること、混ぜることに課題がある。	・必要な分量だけ、材料を用意することができる。	・手順書通りに必要な材料を用意することができたか。	◎
		・手順書を見ながら、最後まで作ることができる。	・教師に声をかけることなく、最後まで作ることができたか。	◎

c 成果

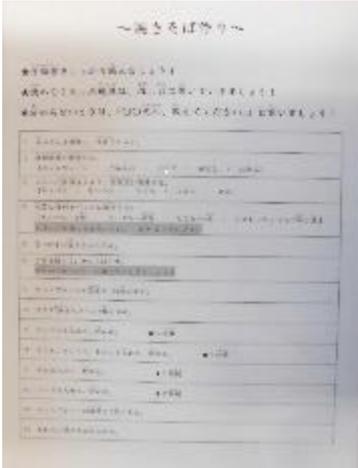
繰り返し同じ学習を行うことで、調理の一連の流れが理解でき、進んで取り組む姿が見られるようになった。また、少しずつ教師の声掛けや手添え支援を行わなくても活動できるようになり、それぞれに合った手順書の活用で、自立した学習を行うことができるようになった。初めは一つ一つの工程に一人で取り組む自信がなく、一つ行うごとに教師に確認や同意を求めていたCも、材料が入ったパッケージの袋を開けられないときに助けを求めてくるくらいで、その他は集中して最後まで取り組むことができるようになった。手順書の活用に加えて、教師の声かけに応じながら活動していたBも、活動内容が分かると教師の声かけや指示がなくても手順書の写真を見て自ら行動に移すことができるようになってきた。今回の焼きそば作りについては、教師の少ない支援で取り組むことができるような活動内容や調理方法を取り入れ、繰り返し学習することにより、取り組む前よりも自立して活動できる場面が多くなった。

d 課題

今回の調理では一人で活動できることと安全を考慮し、材料を切る活動を一般的な調理道具である包丁ではなく手でちぎることとした。しかし、授業の後の研究協議で意見として出されたように、手でちぎるのではなく道具の使用が将来的に課題とされる児童がいることから、キッチンバサミや包丁の使用も今後は視野に入れるべきだと思われる。

また、本単元の成果として焼きそば作りに関しては自立した活動が達成できたが、もう一步踏み込んで、今回ついた力が家庭やほかの場面で般化できるかどうか、また、この工程がほかの調理、たとえば、焼うどんや野菜炒めに応用できるかどうか、ということところまでの取組や確認はできていない。生活経験の広がりということを考えても、これらは今後の課題である。また、一人で最後まで作ることを目的に取り組んできたため、友達と協力することや、楽しい雰囲気の中で学習する設定ができなかった。学習の目的に応じながら、協力する場面を設定した学習も行っていく必要があるのではないかと感じた。

(オ) 本単元で活用した教材教具の例

材料の準備		<p>必要な材料は全て1枚のトレーに乗せて準備するようにした。作業台の上が乱雑になることなく、構造化された環境の中で取り組むことができた。(A、B使用)</p>
手順書1		<p>一覧式の手順書が活用できない児童に使用した、めくり式の手順書。一つ一つの動きを一枚に示すことで、今やるべき活動が分かり、自立して動くことができた。(A、B使用)</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p><例1></p> </div> <div style="text-align: center;">  <p><例2></p> </div> <div style="text-align: center;">  <p><例3></p> </div> </div>
手順書2		<p>Cが3回目以降の授業で使用した一覧式の手順書。写真やイラストがあると、それを手掛かりにして動こうとするため、細かい手順を示した文章の読み抜かりが多かった。文字だけにすることで、文章をよく読もうとしていた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p><1回目></p> </div> <div style="text-align: center;">  <p><2回目></p> </div> </div>

ウ 取組の成果と課題

(ア) 成果

本学級の本年度の生活単元学習における目標のキーワードとして、「生活経験や興味関心の拡大」と、「より自立して活動できる」の二つを挙げた。そして、より自立して活動するための具体的方策

として、①各児童が活用できる手順書作りの工夫、②スキル習得に向けて支援を段階的に減らすこと、③「わかってできる」活動にするために繰り返し同じ学習を行う、ことに取り組んだ。また、取組の題材は季節感・季節の伝統行事などを感じられることを考慮した。

年間の取組としては、先に実践事例として書いた調理活動とそれに関連する買い物学習をメインに据え、ほかにカレンダーや作品展に向けての制作活動、学級農園活動、社会性を身につけることに特化したゲームなどを行った。不定期的に行事に向けての事前事後学習や防災学習も行った。

その中で各児童はそれぞれに経験の拡大が図れ、自分ひとりでできることが増えた。たとえば、校外学習で初めてバイキングでの食事や汽車に乗る経験をした児童もいた。自分で材料を選び、一人で焼きそばを作ることも初めての経験であった。これは将来に役立つ力をつけるとともに、自分一人でできた達成感や自信にもつながったと思われる。ある児童は単元取組当初は活動がわからずに混乱し、担当教師に怒る場面も見られたが、繰り返しの学習により単元後半では意欲的に1人で活動できるように変化した。また、児童それぞれに差があるもののハサミや糊などの工作用具、バターナイフなどの調理用具などの道具を使うスキルと、手順書の活用スキルにも向上がみられた。

(イ) 課題

上記のような成果が挙げられると同時に、いくつかの課題も残った。

一つは、活動の手順を示す際のよりよい視覚支援について学級できちんと話し合えなかったことである。各児童の「わかり方」を実態把握し、そのためには画像を一人称視点で撮るのか三人称視点で撮るのか、また手元をどの程度まで焦点化して撮るのか、などの詳細について、検討したうえでの教材作りに至らなかった。手順書や事前学習のプレゼンテーションが、本当に児童にとってわかる教材になっていたかどうかを精査できなかった。

また、今年度生活単元学習でメインに据えた取組が季節感や行事と関係なく、系統性はあるものの繰り返しの中で力をつける、ということに焦点化した取組であったため、みんなで何か大きなものを作り上げるとか大きな行事を成功させるとかいったことが弱かったと感じている。学級で協力して何かを成し遂げる達成感などを得られる取組の強化は次年度の課題である。

もう一つ、学級児童の実態からみて繰り返し学習して力をつけることに重点を置いたため、話し合い活動の機会が少なく、集団の中で自分の意見を述べる力などはあまり伸ばすことができなかった。これらも次年度は取り組みたいことである。

エ まとめ

一年を通し、二つのキーワードを意識して、生活単元学習の取組を行った。毎日行った学級のミーティングでは、各児童の学習の様子を報告し合い、次時に向けて教材の工夫や提示の仕方、支援の仕方などについて授業の改善も図ってきた。その中で児童一人一人が単元の中で変化してきたことを感じることができた。

今後も児童がいままでの積み重ねの中で培った力を土台にし、課題として挙げたことも改善しつつ、一人で活動できる授業作りに取り組んでいきたい。

(3) 小学部C組の取組「中学部への進学を見通して、生活経験や集団参加の力を伸ばす生活単元学習の取組」

ア 取組にあたって

(ア)学級の実態

本学級の児童は、5年生2名(A、B)と6年生3名(C～E)の計5名で構成されている。児童は全員が自閉症スペクトラムを併せもっており、学習指導要領の各教科の段階との関連ではI段階が1名、II段階が3名、III段階が1名という実態である。各児童の実態は、表1に示す通りである。

このような幅広い実態差のある児童たちが、昨年度までに身につけた生活にかかわる基礎的な力をより定着させることを願い、次のような学級目標の下で一年間の取組を行った。

学 級 目 標	①健康な身体をつくる。運動の習慣をつけ、体力を高める。 ②基本的な生活習慣を身につける。 ③生活経験を増やし、自分の役割を果たしていく。 ④友だちとかかわりあい、集団でとりくむ力を高める。
------------------	---

表1 1学期前半の児童の実態とキャリア発達の課題

児童	1学期前半の実態 ①人間関係形成能力②情報活用能力③将来設計能力④意思決定能力	キャリア発達の課題
A	①発語はないが、日常使う簡単な声かけは理解できる。絵カードを使って、欲しい物や行きたい場所等の要求を伝えることができる。集団学習や式典が苦手であり、ふざけて声を出したり離席したりすることがある。 ②チャイムと声かけで休み時間の終わりが分かり、帰ってくることができつつある。 ③片付け、着替え、排泄など身の回りのことは雑な部分もあるが程度できる。日程表や手順書である程度見通しをもって行動できるが、順番通りにできないことがある。 ④食事に対するこだわりが強く、好みのものや、その場面で決めているものでなければ食べようとしない。意にそぐわないものを勧められると怒って声を出したり泣いたりすることがある。	・日常生活に必要な意思を表現する。 ・学校のきまりを守る。 ・やりとりを通してお金の扱いに慣れる。 ・家庭や学校生活に必要な基本的な生活習慣を身につける。 ・自分の好きな遊びや活動を選ぶ。
B	①学級の友達の名前や特性を理解しつつある。大きな集団では、初めての活動・急な音刺激・展開の変更・人の言動などで情緒不安定になりやすい。 ②公共施設やお金を利用する時は教師と一緒に行動し、お金の出し入れには促しを要する。 ③日課を理解し、自分のことがほぼ一人でできる。簡単な手順書を活用でき始めている。 ④言語理解に課題があり、慣れない場面での自己選択や自己表現が難しく興奮する時がある。	・日常生活に必要な意思を表現する。 ・買い物のやりとりを通してお金の扱いに慣れる。 ・自分の役割を果たす。 ・活動の手順に沿って、落ち着いて行動できる場面を増やす。
C	①学級の友達と箱車に乗って遊んだり、身近な友達の簡単な声かけに応じたりできる。甲高い声や大きい音が苦手で不安定になりやすい。 ②チャイムを守ることや説明などの話を聞く態度に課題がある。 ③まわりの状況や写真カードを見ることにより、日課の活動にとりかかるが、少しのことで気持ちが向かなくなり、切り替えに時間がかかることがある。 ④継続した取組は、大体の手順を覚えて活動できる。上履き洗いや洗濯は簡単に済まそうとすることがある。	・日常生活に必要な意思を表現する。 ・学校のきまりを守る。 ・自分の役割を果たす。 ・時間やきまり、活動の手順がわかり、最後までやり遂げる。

D	①学級の友達と箱車や池で遊んだり、友達を呼んだり、励ますなどのかわりがある。いやな気持ちや困ったことを伝えられないことがある。 ②行き慣れた公共施設では、挨拶や簡単なお金のやりとりができる。 ③日課や自分の係りを理解して自分から取り組むことができる。掃除や制作などは丁寧に取り組むという課題がある。 ④内容がパターン化しているが、一日の出来事を教師と一緒に振り返ると、様子も含めて日記を書くことができだしている。	・日常生活に必要な意思を表現する。 ・公共施設の利用の仕方を知る。 ・時間やきまり、活動の手順がわかり、最後までやり遂げる。 ・活動や一日の振り返りをする。
E	①一人で新聞紙や電話帳をめくって紙の感触で遊ぶことが多い。学級のみんで歩いて買い物や貯金に行くことが苦手である。 ②教師と一緒に給食のお盆運びや保健室への出席表届けに取り組んでいるが、途中で投げ出してしまうことがある。 ③集中力が続かず離席が多い。調理の材料を途中で食べずに参加したり給食の配膳終了まで席で待ったりすることが課題である。 ④体力的な伸びを図っていくことが必須であるが、簡単な衣服の着脱や靴の脱ぎ履きなどの自分のことが部分的にできる。	・排泄や食事、着替えを中心とした基本的な生活習慣を身につける。 ・自分のことは自分で行おうとする。 ・自分の好きな遊びや活動を選ぶ。

(イ) 研究方法 (APDCAサイクルによる授業改善)

本年度の教育課程では、週当たりの生活単元学習の時間数が昨年度より2時間増えて週6時間となった。そこで、まとまりのある生活単元学習をするために時間割の工夫に着手し、水曜日から金曜日まで一日2時間ずつ継続した時間を設定することが可能となるような時間割を作成した。日常生活の指導の時間についても、運動の習慣が身につくように1時間目と4時間目に運動の時間を帯状で設定した。(表2)

生活単元学習の研究は、小学部の研究方法に沿ってAPDCAサイクルで取り組み、日々の授業後には毎日5分間ミーティングを設けて打合せと反省を繰り返した。

表2 時間割

	月	火	水	木	金
	朝の活動				
1	全校集会 朝の会	朝の運動～朝の会			
2	朝の会 個別	体育	生活単元 学習	音楽	生活単元 学習
3	個別	学部集会	音楽	体育	生活単元 学習
4	自転車	洗濯	自転車	洗濯	上履き洗い
	給食				
5	個別 帰りの会	そうじ 個別	そうじ	生活単元 学習	そうじ 個別
6		帰りの会	個別	生活単元 学習	帰りの会
		帰りの会	帰りの会		

(ウ) 生活単元学習の年間計画

生活単元学習では、これまでの学習経験の積み重ねの上に、さらに生活体験を増やし興味や関心を広げるとともに、中学部への進学を視野に入れて集団参加する力を伸ばしたり公共施設の利用マナーを身につけたりする取組を多くしたいと考えた。(学級目標の③④と関連)

そこで、本年度は「中学部への進学を見通して、生活経験や集団参加の力を伸ばす生活単元学習の取組」を研究テーマに設定して、表3のような単元を計画した。

表3 小学部C組の生活単元学習の年間計画(実践例に取上げた単元は網かけで示す)

1学期				2学期				3学期		
4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
仲良くなろう	宿泊学習をしよう	夏まつりのお店をしよう	育てた野菜を食べよう①	作って遊ぼう	修学旅行に行こう	思い出の作品を作ろう	育てた野菜を食べよう②	冬の遊びをしよう	もうすぐ6年生	もうすぐ中学生
(年間) カレンダーを作ろう、貯金をしよう、学級園を作ろう(夏野菜・さつまいも・秋冬野菜)										
交流相手に手紙を書こう、ゲームをしよう、防災学習										

イ 実践事例

(ア)生活経験を増やし、集団参加の力を伸ばす取組例：共同作品作り

a 単元名 「修学旅行の思い出の作品を作ろう」

b 単元設定の理由

修学旅行に続く活動として、本単元では修学旅行の楽しかった思い出の中から教師と一緒に作りたい物を選び、身近にある木の実や今まであまり扱ったことのない紙粘土を使って共同作品を作ることを計画した。本学級のほとんどの児童は、声かけの支援があれば見本や簡単な手順書を活用してカレンダーや簡単なおもちゃ作りができるようになっており、興味のある簡単な制作活動も集中して取り組むことができる。そこで、本単元では、見学したり体験したりした物を作品にすることで、活動への意欲を高めることができると考えた。また、ちぎる、丸める、くっつけるなど、手指を使って変化させることができる紙粘土に親しむ経験ができ、自分たちで拾ってきた木の実などの材料と合わせて、簡単な立体の作品作りに取り組むことができると考えた。キャリア発達の視点からは、友達と一緒に活動すること、最後まで時間いっぱい活動すること、集団参加の力をねらうことができる。また、見本や手順書を見て作る、色々な材料を使って工夫して作るなど児童の実態に応じてねらうこともできると考えた。

単元の導入では、作品展に出展して沢山の人の見てもらうことを伝え、修学旅行の写真を提示して、作品作りへの意欲や興味をもたせたい。作品を作る場面では、見本と写真付きの手順書を提示し、児童が工程を理解してできるだけ少ない支援で取り組めるような手立てをとる。また、いろいろな材料から使いたい物を選んだり、木の実の付け方を工夫したりすることもできるように、児童に応じた支援をする。友達とのかかわりを広げるためには、友達と一緒に道具の準備や作品を運ぶ活動を設定する、友達と一緒に一つの作品を作るなど、友達と一緒に行動する場面を設定したい。そして、作品作りの取組を通して、児童に達成感を味わわせ集団参加の力を伸ばしたい。

c 単元の目標【関連するキャリア発達の力】

- ・修学旅行の思い出の中から、先生と一緒に作りたい物を選択することができる。【意思決定能力】
- ・見本や手順書を見て、木の実や粘土を使い、修学旅行の作品を作ることができる。
【将来設計能力、情報活用能力】
- ・友達と一緒に活動して、共同作品を仕上げることができる。【人間関係形成能力】

d 単元において育てたいキャリア発達の力（小学生の段階から一部抜粋）

人間関係形成能力	情報活用能力	将来設計能力	意思決定能力
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意思を表現する。 ・集団の中でいろいろな友達とかかわる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校のきまりを守る。 ・自分の役割を果たす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間いっぱい活動する。 ・時間やきまり、活動の手順がわかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きな遊びや活動を選ぶ。 ・自分のやりたいことを最後までやり遂げる。

e 単元の学習指導計画（全 11 時間）

- 第1次 作る物を決めよう・・・1時間
- 第2次 木の実を採りに行こう・・・1時間
- 第3次 とべ動物園を作ろう・・・3時間
- 第4次 こどもの城の乗り物と科学館の恐竜を作ろう・・・3時間（本時は3／3）
- 第5次 作品の看板を作ろう・・・3時間

f 本時の学習（実施日：11月18日（金）9:55～10:40）

1) 本時の目標

- ・見本や写真を活用して、木の実や粘土を材料にして乗り物や恐竜を作ることができる。
- ・友達と一緒に時間いっぱい活動することができる。

2) 展開

時間	学 習 活 動	指導上の留意点
導入 10分	1 始まりの挨拶をする。 2 本時の学習内容を知る。 ① じゅんぴ ② さくひんをつくる ③ かんそう ④ かたづけ 3 作品のベニヤ板と準備物を運び、作品を作る場所（後ろの長机）に移動する。	<ul style="list-style-type: none"> ・日直が号令をかけるように促す。 ・本時の活動の流れと絵カードを提示して確認する。昨日のiPadの写真を見せ、担当する児童で、てんとう虫モノレールを仕上げ、恐竜を1つ作ることを確認する。 ・ベニヤ板は、CとDで協力して教室まで運び、全員で各自の準備物を運ぶように声をかける。 ・前の机に題材ごとに材料を置いておく。 ・作品作りをする長机に見本を置き、作り方の写真と児童の写真を提示しておく。
展開 25分	4 てんとう虫モノレールと恐竜と木を作る。 ・簡単に作り方を確認する。 【てんとう虫モノレール】CとD ・てんとう虫の体のまわりに木の実をくっつける。 ・色塗りをする。 ・芯に粘土をくっつけて、てんとう虫に乗っている人を作る。 【恐竜】AとB ・骨格の芯に粘土をくっつける。 ・体や顔に木の実や枝を埋め込む。 【木】E ・木の容器の中に粘土や木の実を入れる。	<ul style="list-style-type: none"> ・iPadで活動の写真を撮影する。 ・恐竜は、分担して作る所がわかるように骨格の部分に目印をつけておく。 ・Aは見本と作り方の写真を見ながら教師と一緒に作ることを促す。 ・Cは見本と作り方の写真を見て作ることを促し、必要な場面のみ声かけや指さしなどの支援をする。 ・BとDには、木の実などのくっつけ方が見本にとらわれ過ぎず、いろいろな材料を使って工夫できるように、様子を見て材料を紹介したり、見本に手を加えるところを見せたりする。 ・Eには、指さしや声かけの支援をして、木の実や粘土を容器の中に入れる動きを引き出す。 ・モノレールが完成してまだ時間に余裕があれば、土台の部分に人を作ってもよいことを伝える。
まとめ 10分	5 道具などを片づける。 6 本時の振り返りをする。 ・感想を発表する。 ・次回の学習について知る。 7 終わりの挨拶をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・使った筆や絵皿は各自で洗い、材料の入ったかごは前の机に片づけるように促す。 ・iPadの写真と作品を見せながら、一人一人の頑張ったところが振り返れるようにする。 ・次回は作品の看板を作ることを伝える。 ・日直が号令をかけるようにする。

g 研究授業を終えて（評価や課題について）

今回は、これまであまり扱ったことがない紙粘土と木の実を使って、立体作品に取り組んだ。立体作品を作る経験もあまりなかったため、この時間で完成できるように作品の骨格に肉付けをしておいたことや、前日に恐竜づくりをして今回は2回目ということもあり、AとBは見通しをもって楽しみながら作品作りに取り組むことができた。恐竜は大きい作品だったので、十分な活動量があって友達とも一緒に作ることができ、時間いっぱい活動できていい学習になった。てんとう虫モノレールを作ったCとDは、最後まで集中して取り組み、Dは自分をイメージして人形の髪を長く工夫して作ることができた。Eは、活動に集中できているときは、教師の指さしや声かけで、紙粘土や木の実を木に見立てた容器の中に入れることができた。教師が容器を持って支援をすることが難しい場面があったため、教具を改善する課題があったが、どの児童も目標を達成することができた。また、振り返りでは、児童一人一人が頑張ったところをことばや指さしなどで発表できるように、十分引き出すことができなかったため、支援の仕方を改善したい。

研究協議では、以下のような意見が出された。（抜粋）

- ・恐竜作りの2人がとても集中して作業していた。モノレール組の2人が見本と手順書を活用して、人の形や髪型を考えながら作っていた。Eの支援に、道具を固定することが必要だったので、工夫が必要だと思った。容器の固定とか、木の容器の入れ口が小さくて中身が出にくい物にするとか。
- ・子どもが好きな題材を選べているから、主体的に取り組んでいた。作品の土台がしっかりしていて失敗経験がないように準備されていた。恐竜の骨格が本物らしく作られていた。
- ・修学旅行の楽しかったことから本単元につながっていることが、意欲的な取組につながっていると思った。
- ・個人目標はほぼ達成できていると思った。教師が作った見本などの環境設定で、子どもが活動に移れていてびっくりした。導入の話も簡単だったが、活動時間がたっぷりあり、子どもたちが動けていたので高学年らしい授業だった。
- ・子どもの感性を引き出した作品ができていた。AとBがパニックにならず、始めと終わりがわかって活動していて成長を感じた。Cも合同学習とは違った態度で活動できていてよかった。
- ・粘土で恐竜の歯を作るところなど、子どもが考えて工夫できる場所があり、クオリティーの高い作品が仕上がっていた。Eの活動への参加が工夫できるとよい。

下線部分の課題をうけて、クリスマスの飾り作りでは、ろうとと穴をあけた箱を使って、紙粘土やどんぐりを入れて作品を作るように取り組んだ。箱の様子が気になってしまったところはあったが、ろうとから箱に粘土を入れることができ、支援の仕方が改善された。



木の容器にどんぐりを入れていく様子



てんとう虫コースターの形作りをしている様子



人形に色付けをしている様子



恐竜の土台に粘土をくっつけている様子

h 本単元を振り返って成果と課題

本単元では、修学旅行で思い出に残った動物園の動物や科学館の恐竜などを題材に取り上げ、児童が見通しをもって活動できるように手順書や教材を工夫したことで、意欲や主体的な活動につながったと考える。材料で使った紙粘土は、初めに団子作りで慣れるようにし、次に簡単な動物を作り、最後に乗り物や大型の恐竜を作るようにすることで、扱ったことがなかった紙粘土の感触に慣れて、作品作りにスムーズに取り組むことができた。また、これまで作品は個々に作るが多かったが、恐竜を2人の児童で分担して作り、土台部分にみんなで木の実を貼りつけるなど、友達と一緒に共同作品を作ることができた。恐竜作りでは、途中で分担箇所友達に紙粘土をくっつける場面があっても怒ることなく、落ち着いて友達と一緒に活動することができた。また、最後まで時間いっぱい活動することができ、集団参加の力を伸ばすことができた。そして、作品を「かるぽーと」で開催される作品展に出展したことで、沢山の人が鑑賞してもらい、子どもたちも公共交通機関を利用して見学に行くことができ、生活経験を増やすことにつながった。今後も、児童の興味関心を広げ生活経験を増やし、集団参加の力につながる単元の設定をしていきたい。また、児童が見通しをもって活動できるように、わかりやすい手順書や教材の工夫を行い、学習環境を整えることが継続課題である。

(イ)公共施設の利用マナーを身につける取組例：調理材料の買い物を中心に

小学部高学年の児童で構成されている本学級では、中学部への進学を視野に入れた時に、身近な公共施設の利用マナーを身につけることは、キャリア発達の上で重要であると考えた。公共施設を利用する最も大きな機会として修学旅行があるが、そのような特別な行事だけでなく、児童にとって身近なスーパーや郵便局が利用できるように、年間を通じて取り組んでいける教材はないかと考えて、時間割の工夫とあわせて検討を重ねた。その結果ここでは、本学級が年間を通じて学級園で野菜を栽培し、収穫した野菜を中心にしたメニューを調理するという長期間の取組の中で行った買い物について取り上げた。

a 単元名 「育てた野菜を食べよう（7月）（12月）」

b 単元設定の理由

本学級には偏食傾向の強い児童がおり、学級園活動や調理活動の積み重ねを通して、食べられる食材を増やすことは大きな課題であった。学級の半分の児童は、昨年度サツマイモやカブなど季節ごとに野菜を作り、材料を買い物に行き、カレーライス調理して食べるという一連の流れの全部を子どもたちの力で行う活動に数回取り組んだ。その大きな成果は、今まで食べられなかった野菜をカレーの具として食べることができたことであった。また、「友達の調理の様子を見る」「担当した具材を順番に鍋に入れていく」「順番に混ぜる」等の活動を通して、協力して作る経験を繰り返し積むこともできた。その反面、買い物の場面では「財布からお金を出す」「財布にお金を入れる」といった段階から経験の少なさを感じる児童が多く、お金の扱いに慣れるまでには至らなかったことが課題として残った。本学級には、集団で目的地まで歩きとおすことが難しく、長距離を歩くとといった基本的な生活習慣を課題としている児童もいるため、公共施設の利用場面を活用してできるだけ校外を実際に歩く機会を設定することも必要であった。

そこで、まず時間割の工夫を試み、木曜日の午後はスーパーに買い物に行き、買った材料と収穫した野菜を使って金曜日に調理・会食をするという一連の活動が可能となるように改善した。育てる野菜と調理するメニューは、昨年度の経験を参考にして児童全員が食べられる物を中心に選び、手順書を活用して繰り返し調理活動をすることで、野菜の生長を楽しみにし、調理の手順が分かって行動できるようになることがねらえる。さらに、買い物の仕方を身につけ、お金の扱いに慣れてほしいという願いから本単元を設定した。本単元の時期は7月と12月を中心に計画したが、野菜の育ち具合に応じて単発の調理も組み込み、年間を通じてできるだけ多く買い物の体験をしたいと考えた。

c 単元の目標【関連するキャリア発達の力】

・野菜の生長に気付き、収穫を楽しみにする。【情報活用能力】【将来設計能力】

・自分たちで調理して食べる喜びを味わう。（食べられる食材を増やす）

【人間関係形成能力】【情報活用能力】【将来設計能力】【意思決定能力】

・お金の扱いに慣れ、買い物の仕方やマナーを身につける。【人間関係形成能力】【情報活用能力】

d 買い物活動の展開例（実施日：12月15日（木）「カレー鍋の材料を買いに行こう」）

①本時のめあてを確認する

②買う品物を選ぶ（白菜、人参、肉団子、豆腐、カレールウ、玉子、ウィンナーから選択）

③財布・買い物カード・お金を準備する

④買い物のマナーと買い物の手順を確認する

⑤スーパーに歩いていく（買い物をした学校に帰る）

⑥買った品物とおつり・レシートを確かめる



e 年間指導計画（「利用した施設」には、本單元以外で利用した施設も含む）

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
栽培した野菜	玉ねぎ収穫 じゃがいも収穫	じゃがいもスティック(3)	さつまいも		小松菜	さつまいもスティック 白和え	玉ねぎ	植付け		水菜	収穫
調理名(回数)	ミニトマト ピーマン かぼちゃ 植付け	ポテトサラダ カレー(3)	ピーマン炒め ポテトサラダ カレー(2)	収穫	植付け かぼちゃサラダ 焼きそば(3)	収穫	収穫	ハンバーグ(2) 焼き芋 カレー鍋(2)	植付け	七草鍋 鍋パーティー(2)	ポテトサラダ カレー(1)
利用した施設(回数)	スーパー(1) 郵便局 中村公園	スーパー(2) 郵便局	スーパー(3) 郵便局	スーパー(2) 郵便局(2)	スーパー(2) 郵便局	スーパー(1) 郵便局 自動販売機 (修学旅行)	郵便局	スーパー(1) JR、電車 かるぽーと コンビニ	スーパー(1) 郵便局	スーパー(2) 郵便局 JR 運動公園 コンビニ	スーパー(2) 郵便局 図書館

f 本単元を振り返って成果と課題

小学部の高学年ということ考えると、生活にかかわる基礎的な能力だけでなく、身近な地域社会にある公共施設の利用の仕方を知ることは重要な課題となる。その点で、本單元においてほぼ毎月スーパーに出かけて買い物の経験をしたことで、児童によって違いはあるものの、買い物の仕方を知り、お金の扱いにも慣れることができたことは第一の成果であった。これは、昨年度のスーパー利用回数と比べてはるかに多くの経験ができるような時間割を工夫したことによる効果が大きかった。第二に、野菜を育てて収穫・調理することの見通しがもてるようになり、自分たちで調理したものはおいしく味わうことができたことも大きな成果であった。

児童一人一人については、次のような変容があげられる。AとBは、年度当初は100円玉を財布に入れたり出したりすることさえ支援が必要であったが、「お金は財布に入れておくもの」ということはわかってきたようである。さらに、「100円をいくつ払う」、「おつりをもらって財布に入れる」というようなことも身につくにつれ、今後につながることを考える。Cは、担当した品物を選ぶことができるようになり、買い物における自分の役割を果たすことにつながった。当初からおつりのある簡単な買い物ができていたDは、「500円で買える量の肉のパックを探すこと」、値段に応じた丁度のお金を払うことなどもできるようになった。教師と手をつないで買い物に行くことを目標にしているEは、途中でしゃがむことなくみんなと一緒に目的地のスーパーまで歩いて往復することができるようになって、歩行力が大きく伸びた。調理材料の買い物の他にも、コンビニで自分が食べたい昼食を買った時には、どの児童も好きな食べ物や飲み物を選び、順番にレジに並ぶことができていた。これらのことは、【公共施設の利用の仕方を知る】【やりとりを通してお金の扱いに慣れる】【自分の好きな物を選ぶ】などのキャリア発達を促すことにつながったと考える。

お金を扱うことは、卒業後の生活で自分が買いたいものを決め【意思決定能力】、余暇を楽しむに【将来設計能力】こととも密接に関連し、生活の根幹とも言える夢や希望がある生き方につながることであり、今後も継続することが課題であると考えている。また、調理活動も将来につながる大切な家事労働の一つであり、児童の生活と結びつけて継続して取り組んでいくことが大切であると考えている。

ウ 取組の成果と課題、まとめ

(ア) 成果

本学級では、「中学部への進学を見通して、生活経験や集団参加の力を伸ばす生活単元学習の取組」というテーマで授業づくりを進めた。実践例に挙げた共同作品作りや買い物などの取組は、表1に示したような児童一人一人の課題を達成することを目指した取組であったと考えている。幅広い実態差がある本学級において公共施設の利用や生活経験を増やし集団参加の力を伸ばす取組を通して、児童のキャリア発達を促すことができたことは大きな成果であったと考える。

Q&A（一部抜粋）を活用すると、児童には次のような変容があった。

Q&Aの項目		児童		A		B		C		D		E	
		初	終	初	終	初	終	初	終	初	終	初	終
日課 予定	教師と一緒に、日課に沿って行動し、学校生活に簡単な見通しをもつ。	△	△	○	○	△	○	○	○	○	○	×	×
金 銭	教師と一緒に、お店の人にお金を渡したり、お金を財布に入れたりする。	×	△	△	○	△	○	○	○	○	○	×	×
	教師と一緒に品物を選んでレジまで持っていく、店の人にお金を渡し、品物を袋に入れる。	×	△	△	○	△	○	○	○	○	○	×	△
きまり	授業の始まりと終わりの時刻を知り、守る。	×	△	×	○	×	△	△	△	○	○	×	×
公共 施設	順番を待ち、安全に遊ぶ。	×	△	△	△	×	△	△	△	○	○	×	×
初:年度初め 終:年度終わり ○:ほぼできる △:時々できる ×:できない													

また、学校での変容が家庭生活にもよい影響をもたらしていることがわかるエピソードの一端を紹介しておきたい。Aは、家庭でも食べられる食品が増え、学校で調理した物を家族と一緒に作るようになった。Bは、カレンダーを活用して予定の見通しがもてるようになり、出かけた先でも文字からの情報を得て落ち着いた行動が増えている。保護者はBが修学旅行で公共施設の利用ができたことも喜び、家族でも出かける場所の選択肢が広がった。Cは、地域のマラソン大会に積極的に参加するなど余暇の充実につながっている。Dは、家庭でも貯金をしたり調理をしたりして学校の経験を活かしている。Eは、放課後児童デイサービスでも学級の友達と進んでかかわるようになった。保護者は、本児の小さな変化を認めて体力が高まっていることには大変喜んでいる。

(イ) 課題

日々の授業後に教師間で振り返りを重ね、継続することや改善することの確認に努めたが、児童の実態差が大きい学級において個々に応じた支援を充実させることは難しいと感じることもあった。児童一人一人のキャリア発達を促すという視点から、生活単元学習においては、個々に応じた手順表や教材の準備、学習環境の調整、国語・算数・日常生活の指導などの学習活動と関連させた単元設定等に配慮した支援を行い、授業改善を重ねることが重要であると感じる。

(ウ) まとめ

本年度の実践を通して確認できたことは次のようなことであった。まず、中学部への移行という視点から時間割を見直し、生活習慣や体験的な学習の機会を増やすことは有効である。また、公共施設の利用や金銭の扱いについては、実際の場面で学習を重ねることが大切である。そして、学校での学びは家庭と連携して生活につなげていくことで確かな学びにつながると感じている。

4 おわりに

(1) APDCAサイクルに沿って、教材教具を工夫した授業研究による授業力の向上

本年度の小学部は、APDCAサイクルによる授業づくりを継続して、「キャリア発達を促す生活単元学習～教材教具の工夫を通して～」というテーマで5年目の取組を終えた。

授業研究の方法は、1学期にQ&Aとキャリア発達段階表を活用して児童のアセスメントを行い、2学期に各学級が生活単元学習の研究授業に取り組んだ。小学部の児童は、入学したばかりの低学年、集団での学習経験を積んだ中学年、中学部への移行を視野に入れた高学年までの6年間を含み、幅広い実態や目標の違いがある。そのことを踏まえてアセスメントに基づいたAPDCAサイクルによる授業づくりを継続できたことは大きな成果と考えている。

全項までの各学級の取組の中には、授業全体のスケジュールの提示や、作業場面で児童に応じた手順表を準備した実践が共通して紹介されている。このことから、本年度のテーマであった教材教具の工夫による授業を通して児童のキャリア発達を促す授業は展開できたと考えられる。

ビデオ録画を活用した研究協議会では、発達段階に応じたキャリア発達を促すという視点から小学部の教師全員が意見を出し合った。協議の中では学習内容・教材教具・学習環境の工夫に関する意見が多く出され、それ以降の授業改善につなげて、研究成果を挙げられたことがうかがえる。

今後もこのような教材教具の工夫に関する情報交換や研究授業などを継続しながら、APDCAサイクルによる授業改善を進めていき、学部全体で授業力の向上に努めたい。

(2) 児童のキャリア発達を促す生活単元学習の授業づくり

小学部は小・中・高12年間の中で、キャリア発達の土台作りとなる重要な時期に位置付いている。6年間を低学年・中学年・高学年に分けて、それぞれの段階に応じたキャリア発達を促すために、授業研究は各学級でサブテーマを設定して取り組んだ。A組は「教材教具の工夫～自主性の向上をめざして～」、B組は「できるだけ一人で活動できる授業づくり」、C組は「中学部への進学を見通して、生活経験や集団参加の力を伸ばす生活単元学習の取組」であった。

各学級が取り上げた生活単元学習の実践例において、関連があるとされたキャリア発達の項目をまとめてみると、次の表のようになった。どの学級でも共通して関連付けされていた項目は、学年に応じて系統的な授業が展開されやすかった観点ということがうかがわれる。その半面、関連付けがされなかった項目も多数見受けられるので、今後の生活単元学習において単元を見直すことも必要であろう。また、質の高い生活単元学習を目指す上では、習得した知識や技能を生活場面で実際に役立てるという視点も大切にしなければならないと考える。

生活単元学習の充実とともに、日常生活の指導や個別の国語・算数、合同学習などの時間の中で、児童のキャリア発達を促す視点からの授業改善も必要となる。本年度の成果の上に、児童や学級の実態に応じて育てたい力を明確にした授業づくりを追求し続けることが今後の私たちの課題と考える。

キャリア発達段階表を共通のツールとすることで、卒業後の自立に向けた小・中・高の一貫したキャリア発達を促す授業を今後も展開していきたい。

【参考文献】

○菊地一文編著「特別支援教育充実のためのキャリア教育ケースブック」ジエース教育新社、平成24年

		小学生		中学生
キャリア発達の段階		生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期		職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期
能力領域 ※1 ※2	観点	低学年で育てたい力	高学年で育てたい力	中学部で育てたい力
人間関係形成能力 (つながる力)	人とかかわり	認められたり、褒められたりすることにより自分の良さに気付く。		自分と相手の違いを知る。
	集団参加	友達と仲良く遊ぶ。	集団の中でいろいろな友達とかかわる。	友達と協力して学習に取り組む。
	意思表示	自分の意思を表現する。	日常生活に必要な意思を表現する。	集団の中で自分の意見を述べる。
	場に応じた言動	身近な人に挨拶や返事をする。	自分から挨拶をする。	状況に応じた言動をする。
情報活用能力 (みつめる力)	様々な情報への関心	家庭の仕事に興味をもつ。	身近な仕事に興味をもつ。	情報を得るための様々な方法を知る。
	社会資源の活用とマナー	学校のきまりを守る。	公共施設の利用の仕方を知る。	公共の基本的なきまりを守って行動する。
	金銭の扱い	やりとりを通してお金の扱いに慣れる。	お金の大切さに気づく。	お金の役割を知り、使い方がわかる。
	働く喜び	大人と一緒に係の仕事をする。	自分の役割を果たす。	社会には様々な仕事があることを知る。
将来設計能力 (憧れてめざす力)	習慣形成	家庭や学校生活に必要な基本的な生活習慣を身につける。		職業生活に必要な基本的な習慣を身につける。
	夢や希望		身近な働く人に関心をもつ。	憧れとする仕事や夢をもつ。
	やりがい	時間いっぱい活動する。	時間やきまり、活動の手順がわかる。	好きな活動をもち、自発的に取り組む。
	進路計画			将来の進路について考える。
意思決定能力 (かなえる力)	目標設定	自分のことは自分で行おうとする。	自分のやりたいことを最後までやり遂げる。	自分で達成可能な目標を立てる。
	自己選択	自分の好きな遊びや活動を選ぶ。		自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む。
	自己評価	活動や一日の振り返りをする。		よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。
	自己調整		嫌な気分になっても立ち直ることができる。	様々なトラブルに対しての対処方法を身につける。

※生活単元学習の関連付けをした学級数が 0 1 2 3

IV 中学部の研究

中学部テーマ「キャリア発達段階表を活用した授業改善」

1 はじめに

中学部では平成 25 年度から昨年度まで、全校テーマ「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実」のもと、本校のキャリア発達段階表（2012 試案）を実効性のあるものにするねらいに合わせて研究を行い、一定の成果を上げてきた。昨年度は、「キャリア発達段階表を活用した授業づくり」を中学部の研究テーマとして設定し、研究を進めてきた。本年度より本校のキャリア発達段階表（2012 試案）が見直され、「キャリア発達段階表（2016）」（以下、キャリア発達段階表と表記する）が作成された。

そこで、本年度中学部では、「キャリア発達段階表を活用した授業改善」を研究テーマとし、作業学習に焦点を当てて研究を行うこととした。作業学習では、年度始めに「作業学習申し合わせ事項」の確認を行い、作業学習での支援の統一性を図るようにしている。その中で、作業重点目標の確認として、毎時間、生徒たちが復唱することやスケジュールの提示の仕方、振り返りシートの様式の統一など、教師間で共通理解をもって取り組んでいる。また、本年度当初より作業日誌を作成し、どの生徒がどのような作業内容を担当したか、どのような支援方法が有効であったかを記録するようにした。それにより次の支援へ生かすことと作業学習の充実、教師間での情報共有につながると考えた。また、植草学園大学発達教育学部の田所明房教授（以下、田所氏とする）を招いて研究協議を行い、作業学習のさらなる充実を図った。

2 研究内容および方法

（1） 研究内容

- ア 本校のキャリア発達段階表を活用した実践をより具体的にすすめる。
- イ 実践から改善点や課題を明らかにする。

（2） 研究方法

- ア 各作業で実践研究に取り組む。
- イ それぞれの実践例について研究を重ねる。
- ウ 学部全体での研究授業、研究協議を行う。
- エ 実践の成果と課題を実践集録にまとめる。

（3） 研究経過

- ア 学部研究日を月に 1 回設定する他、各作業での研究日を随時定める。
- イ 研究テーマに沿った研修会等に参加し、研究を深める。
- ウ 研究の経過

月 日	研 修 内 容
4 月 27 日	本年度の研究テーマ、研究体制、年間研修計画等の提案及び確認
5 月 17 日	本年度の研究テーマの決定、研究内容、研究方法等の検討
6 月 1 日	本年度の研究内容、研究方法等の決定

7月 5日	各作業での実践研究の推進 ○各生徒のキャリア発達の確認
8月 ※日	各作業での実践研究の推進 ※各作業で設定
9月 6日	各グループ研修
10月 5日	研究授業 及び 研究協議
11月 1日	各グループ研修
11月 17日	校内研（植草学園大学発達教育学部 田所 明房 教授来校） 全作業が研究授業実施
12月 6日	各作業での実践研究の推進
1月 6日	実践集録の原稿作成
2月 7日	研究授業及び協議 中学部全体 体育（4年経験者）
3月 7日	各グループにおける実践研究の報告 本年度の反省と来年度の方向性について
3月末までに	各生徒のキャリア発達の確認

3 実践事例

（1） 食品加工の取組

ア はじめに

（ア） 概要

食品加工作業は、ほぼ毎年生徒8名、担当教師4名で行っている。作業場としては、中学部の調理室を使っている。コンロとシンクのついた調理台が3台あり、テーブルを含めて計4つのグループで作業を行っている。冷蔵庫は食品加工作業専用のものを設置し、作業環境が変化しないよう配慮している。（図1）今年度の加工品は、甘い系の蒸しパン、おかず系の蒸しパン、ゼリー、ババロア、杏仁豆腐などである。どの品も蒸しパンミックスなどの素を使って簡単に作れるものとなっており、作業が効率よく進むようにしている。加工品は最低でも1袋で6個は作れるような素を利用しており、1回1袋で習得するための適度な量と考える。1サイクルを連続したり、同時に2袋作ったりすることによって、課題がクリアできた生徒から、少しずつステップアップできるようにしている。

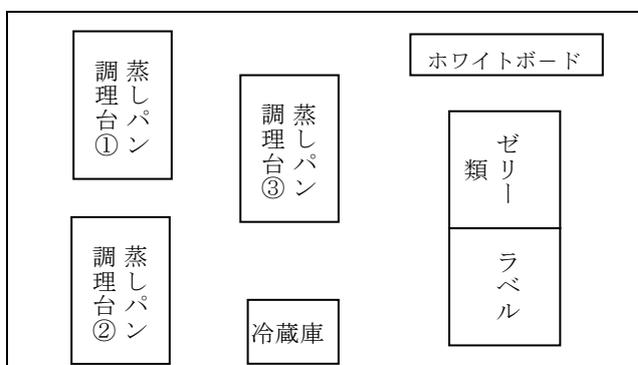


図1 教室配置図

（イ） 授業の流れ

授業では、開始のチャイムが鳴るまでに身支度を整えて着席する。その後、教師前時に立てた本時の目標の確認を行うとすぐに作業に入る。

作業は主に、各グループの生徒2名と教師1名で進める。生徒によっては、レシピを一工程ずつめくりながら行ったり、最初は見るが徐々に覚えていったり、レシピの中に報告の仕方を明記してその通りに適切に報告ができるようにするなど、生徒個々の課題に応じた支援を各グループの教師が工夫している。加工作業が終わると、販売や配達の前準備として、パック詰めやラベル貼りなどを行っている。

販売は寄宿舍や事務室、職員室などの指導員や教師に手売りする。口上は決まっており、それらを書いたカードを読んで販売すること、慣れると覚えて言えるようになること、一人で対応できるようになることなどを目指して練習を繰り返している。配達では、予約販売をしておいた職員室の教師の机に置くようにしている。名札を探して品を置くこと、ラベルの向きをそろえること、入退室の際のあいさつなどの学習を行っている。

販売が終わると調理室に戻り、販売した金額の計算をした後に次時の道具の準備を行う。ここまで終了してから休憩となる。

休憩後は本時の反省と次時の目標決めを行い、終わりの会で発表する。授業終了後は、洗濯しておいた布巾やエプロンを干してから終了となる。こういった一連の流れが毎時間続くため、見通しを持ちやすく、定着が早いと言える。

イ 昨年度までの作業検討の経過

(ア) 食品加工の歴史

作業のスタイルは、ここ 10 年以内で現在の形に確立されてきた。過去においては、教師によっては専門性を生かしてプリンや漬物などのレシピを作り、生徒ができるようにアレンジすることによって手作りのものを製品化していた時期もあった。しかしながら、“専門性のない教師が担当することになった時にでも行える”という中学部の作業の授業の原則から、5 年ほど前から、簡単にでき、失敗の少ない、技術をあまり必要としないものを製品として作るようになってきた経緯がある。さらに、4 つの作業における目標の共通化を図ってきたことによって、技術ではなく、その心構えを学ぶ場としての食品加工作業とはという観点から、現在のような製品に移り変わってきた。

注文に関しても、安価なものをその時期に店に出向いて仕入れるというスタイルであったが、その時間の確保等にも課題があり、現在は可能な品物は、給食の業者に一括して注文し、学校に配達してもらっている。昨今、教師の仕事は多様化し多忙を極める中で、できるだけ効率化を図り、授業の充実のために時間を割く必要もあると思われたためであった。

授業の流れや指導については、学期毎の反省を踏まえて少しずつバージョンアップしている。授業前の身支度や授業後の洗濯物干し、販売の口上など、初めは個別の支援で行っていたものもあるが、それらを共有化し、作業全体の目標の“準備片づけをすすんでする”や“挨拶返事質問報告をする”などの達成に向けて活動に取り入れるようになってきている。

(イ) 食品加工の検討課題

平成 26 年度の作業の見直しから検討してきたことは、過去の反省や研修会での意見を受けて様々あるが、主に、3 つあげられる。①継続した指導ができるための研修や準備、②購買意欲をそそる新製品の開発、③よりよい学習形態（単元化）である。

①継続した指導ができるための研修や準備とは、作業日誌のほかにも、購入履歴表や教師の分担表を作成したり、レシピなどの資料の整理をしたりすることである。どの教師が担当しても行えるような作業であるための工夫は、現在の担当者にとっても課題解決の手がかりになると思われる。また、長年の積み重ねによるレシピは、価格高騰等の影響でグラム数などが変更となっており、間違っても利用しないとも限らない。今年度のみならず、整理しておくことは大切であると思われる。

②購買意欲をそそる新製品の開発については、学期毎の反省でも話されており、余裕がある場合に季節の果物や野菜を取り入れたものを考えている。校内販売のため、購入者の多くは毎回決まった人

の場合が多く、味に飽きて購買意欲がそがれる可能性が高いため、今後も継続して開発をしていきたい。

③昨年度より、外部講師を招いて研修を続けてきた。その講師の助言を受けて、本年度後期より新たな試みとして単元化を図ることとした。その単元化では、「できるようになろう」、「声を聞こう」、「よくしよう」という3期に分けて取り組むことに挑戦する。「できるようになろう」は学期の最初の時期で、作業内容を理解し、できるようになることを目標とする時期である。「声を聞こう」とは、購入者の声を聞くことである。商品の味や包装、販売態度や商品のネーミング等を項目としてアンケートをとり、自分たちを振り返ることとなる。「よくしよう」とは、アンケートの結果を受けて改善したりより良くしたりするという活動となる。この取り組みにより、一定の流れを持って活動がより良い内容になっていくことが期待できると思われる。

その他、衛生面については、専用のスリッパを用意すること等はコスト面や場所の関係で難しいため、月に1回掃除の日を決めて取り組むこととした。また食品加工の教師の立場としては、安全に取り組みでこそその部分も大きいと、見守る場面も必要であるとの結論に達した。

ウ 平成28年度の取組

(ア) 年度始めの準備

a 年度始めの打ち合わせ

今年度は、前年度までに、本作業を経験したことのある教師が、4名中3名いる体制で取り組むこととなった。まずは、本年度取り扱う加工品について、前年度までの反省から今年度も継続して同じ題材とすることを決めた。蒸しパンのフィリングの種類についても、シューマイ（カレー味含む）、チョコ、ホワイトチョコ、キャラメルチョコ、ドライフルーツ（抹茶味、黒糖味含む）という例年のものから始めることにした。他にゼリー、ババロア、杏仁豆腐とした。また、主な作業の流れ、初回のオリエンテーションの流れを確認し、各生徒の作業内容と各担当教師、作業台を決めた。

b 作業準備前の点検と準備

各加工品の材料の在庫数、手順書、ラベル、名札、おつり、注文票、調理道具の確認、試食分の加工品の準備を確認し、不足分の作成と追加をした。さらに、作業準備日を別日に設定し、教師自身が手順書を見ながら担当する加工品を実際に作り、教師間で加工方法の引き継ぎと確認を行った。他に、生徒の実態に合わせた支援具を準備するようにした。

c 作業日誌の活用

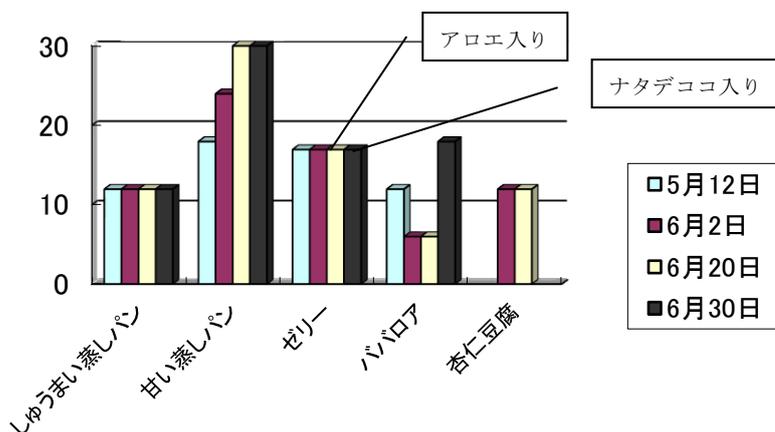
各生徒が何を何個加工し、どこへ販売・配達したか等を記録していくこととした。また、加工する過程での注意事項や留意事項も記入することとした。

(イ) 前期の取組

a 前期作業内容

作業内容は、蒸しパン5名、ゼリー1名、ババロア1名と、杏仁豆腐又はババロア1名とした。ラベル作りは適宜行うが、出張等で教師が不在の場合や体調がすぐれない生徒の作業として準備した。生徒の課題に応じて、配達は3名、販売は5名とした。

図2 前期の加工状況
(作業日誌より5月と6月の一部抜粋)



b 前期作業の様子

4月の作業開始時は、作業の流れについて、どの生徒も教師と一つ一つ確認していくことから進めた。同じ加工品や流れで回数を重ねていくことで、徐々に自分自身で考えながらできることが増えていくようになった。個々に合わせた支援具を活用していくことで、自分でできる工程が増えた生徒もいた。前期の後半に近づくと、流れを覚えてスピードアップし、工程を2回繰り返すことや1回の分量を増やすことができるようになり、加工量が増えた生徒もいた。また、ゼリーに果物を入れる工程を新たに加えることができるようになる等、作業内容のステップアップができるようになっていった。そうした加工品が増えることで道具の量も増え、必然的に片付けの時間も延びるため、作業全体がややあわただしくなりながらも、教師の支援を加えることで調整しながら時間内に作業工程が完結していくようにした。生徒たちは作業工程のレベルが上がったことを自身で実感することができ、作業への意欲がもてるようになっていた。また、毎時間の終わりの会では、自分の言葉で作業内容を報告するようにし、結果的に自身で振り返りができる場となった。

(ウ) 後期の取組

a 後期作業内容

作業内容は、蒸しパン6名、ババロア又は杏仁豆腐2名、ラベル作りは前期と同様、配達は2名、販売は6名とした。

b 単元計画

- 第1次 「できるようになろう」・・・ 10時間 (後期開始～11月中旬)
- 第2次 「声を聞こう」・・・・・・・ 4時間 (11月中旬～12月)
- 第3次 「よくしよう」・・・・・・・ 12時間 (3学期)

c 「声を聞こう」学習計画 全4時間について (11/24～12/15)

月日	活動内容	準備物ほか
11/24	アンケートの項目を考える	・提示用の加工品を用意する
12/1	アンケートの配布	・アンケート依頼の口上の用意 ・アンケート用紙作成 (70枚) ・回収の箱3個 (職員室一舎・中高、事務室)
12/8	アンケートの回収	・アンケート回収の口上の用意
12/15	アンケートの内容の整理 ⇒表にシールを貼る 改善点の確認	・アンケート集計用の表 ・シール

表1 アンケート用紙

図4 加工品

食品加工アンケート用紙

○現在の商品についてご意見をお聞かせください

	甘い蒸しパン	シューマイ 蒸しパン	ババロア	あんじん豆腐	ゼリー
買ったことがあるものに○を→					
3つのうちどれかに○を→	おいしかった ふつう おいしくなかつた	おいしかった ふつう おいしくなかつた	おいしかった ふつう おいしくなかつた	おいしかった ふつう おいしくなかつた	おいしかった ふつう おいしくなかつた
好きな味は何でしたか？					

○商品や販売態度などはいかがでしたか（気付いたことを何でもお書きください）

良いところ	
良くないところ	

○今後食べたい具や、メニューを書いてください

図3 アンケートの集計結果①



表2 アンケートの集計結果②

商品や販売態度について気づいたこと		
商品のこと	販売態度	その他
<ul style="list-style-type: none"> ・おいしい6 ・カレー2個入りのリクエストにこたえた ・甘いのが良い ・しゅんのもが使われている ・ラベルがいてない <p>△時々かたい2 △時々粉っぽい △水がついてべちゃっとなっている △1年中同じ商品はよくない5 △ゼリーや杏仁豆腐には具を入れてほしい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ていねいなことばづかい7 ・あいさつがよくきこえる5 ・販売態度が良い5 ・声大きい3 ・説明がわかりやすい2 ・元気がよくて買ってあげたくなる ・うりこみも自分からできている ・集中してできている ・いろいろな人が販売にきてくれる ・「今いいですか?」ときくところ ・計算が速い ・品物がなくなったら他のをすすめる <p>△えがお3 △もうすこし大きな声2 △はやくち △はずかしがってはっきり言わない △目を見て言ってほしい △気になるところをのぞく</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・安い3 ・娘もよろこんで食べている <p>△ゼリーなどは冷蔵庫に入れてほしい △おつりを持ってきてほしい2 △ババロアをもっとたくさん作ってほしい</p> <p>△校内だけでなく校外にも売る。日高ブランドの菓子の開発。伝統のものや地元・学校産のものを利用したら。</p>

d 後期作業の様子

「できるようになろう」のテーマの元に自分の目標を立て、10時間の学習の間にどの生徒も加工の仕方や作業全体の流れをほぼ理解することができた。「声を聞こう」では、アンケート用紙を配布することは初めての試みであったが、アンケートをする意味を知り、口上を練習してお客さんに渡すことができた。アンケートの集計作業では、生徒たち自身で加工品を記した用紙に色別のシール（おいしかった→赤、ふつう→黄色、おいしくなかった→白）を貼り、視覚的にわかりやすく整理した。どの加工品も赤のシールが多く、生徒たちはお客さんたちがおいしく食べてくれたことを理解することができた。また、販売態度については、改善できる内容を確認し、3学期に向けてもっとよくしようという意識づけができたと思われる。

(エ) 取組の実際

食品を扱う作業であるため、衛生的に作業を行うための工夫や、それぞれ個別の課題に応じて対応するための手順書や準備物カードを作成するなどの取組を行っている。

衛生面に関しては、作業前に互いに身支度のチェック（帽子から髪の毛が出ていないか、マスクは正しく着けられているか、爪は伸びていないか等）を行い、丁寧に手洗した後は、自身のハンカチを使わず、使い捨てのペーパータオルで手を拭いてから作業を開始している。

加工品については、スプーンや tong、ビニール手袋をした手で扱い、素手では触れないということを徹底し、食器や用具の洗い残しなどが少しでもあれば、やり直しを行っている。さらに、洗う際の注意点として、ヘラなど一部を取り外せる用具は、取り外しをして接合部分をよく洗い、外したまま食器乾燥機に入れるなど、しっかり洗い、しっかり乾燥させて衛生的な道具の取り扱いをするよう細かい指導を行っている。（写真1）



写真1 乾燥の様子

手順書や準備物カードに関しては、1枚で全てが分かるように示した方がわかりやすい生徒には、

1枚の手順書（写真2）を使用するが、1つの作業をクリアするごとにカードを1枚ずつめくっていく方が、理解しやすい生徒のためには、暗記カードのような1枚ずつめくっていくタイプの手順書（写真3）を使用している。準備物を用意するためのカードについても同様である。（写真4）また、必要に応じて、授業の流れまでも含めた手順書にしたり、報告の言葉等を追加した手順書なども使用したりするなど個に応じたものに改善を繰り返すようにしている。



写真2 基本の手順書



写真3 めくり式で授業の流れも含めた手順書



写真4 準備物を用意するためのめくり式カード

生徒Aは、1枚の手順書で蒸しパン作りに取り組んでいたが、コンロの火を消し忘れることがあった。そのため、手順書にコンロの火を消すなどの注意書きを付け加えることで、ミスがなくなり、安全に作業を行えるようになった。（写真5）

手順書については、個々の生徒の課題に応じて形を変えたり、必要に応じて言葉や授業の流れなどを追加したりしてその都度改良を図っている。また、ゼリーカップの置き場所を示すためのカード（写真6）をバットに敷くなど、必要と思われる支援具やカード類を利用している。



写真5 注意書きを含めた手順書



写真6 ゼリーの置き場所を示したバット

生徒Bは場面緘黙の状態が続き、学校での発話は無いものの徐々に学校生活にも慣れ、教師との関わりがもてるようになってきた。

作業場面でも、蒸しパン作りの工程は理解して取り組めるが、自発的な行動がほとんどなく全て教師からの促しで行動する指示待ちの状態であったため、少しでも主体的な活動ができるように支援機器を活用するようにした。iPod touchのアプリ（ドロップトーク）で、蒸しパン作りの工程の中で報告する時に使う「できました」のアイコンと、分からない事や困った時に使う「教えてください」のアイコンを、音声を入れて設定し作業の中で活用できるようにした。（写真7）

最初はどの場面で使えば良いのか分からない様子だったので、ひとつの工程が終わるたびに「できました」のアイコンをタップして意思表示をするように知らせた。その後少しずつ慣れてくると自ら「できました」のアイコンをタップして報告することができ、それに対する教師の「次お願いします」の合図に、すぐに次の工程に取り掛かることもできるようになってきた。その結果、合図を待つ時間が減り自ら取り掛かること

写真7



iPod touch

への自信になりつつある。

自ら発信することの難しい生徒にとっては、支援機器を活用することで意思表示ができたり次への取り掛かりになったりして作業意欲にも繋がると思われる。

エ 成果と課題

今年度は新たな取組として、後期作業において、単元を3期に分けて設定した。まず、「できるようになろう」という言葉を作業前の目標発表や作業後の目標反省の際に取り上げた。長期目標のような位置づけで「できるようになろう」と呼びかけたことに対し、「できるようになってきました」と評価していくことで、各自の目標に向けて頑張る気持ちを促し、できたことを自信につなげていくことができた。「声を聞こう」「よくしよう」も同様に、自分の力をステップアップさせることに喜び、自主的に取り組む姿勢を促すことへつながったと考える。この3期の単元設定は教師側にとっても、指導目標をより意識できるものとなり、成果のある取組であったと言える。来年度からは、前期後期ともにこの単元設定を行い、目的をもったよりよい活動になるように取組を進めたい。

作業日誌を活用し生徒の作業内容を記録したことで、毎時間の加工内容及び作業量が明確になった。指導面の具体的な内容や留意事項を記録してからは、教師間の引き継ぎに役立てることができた。作業日誌より一部抜粋すると、「5月9日：○君がすすんでごみ捨てをすることができた。」「5月19日：○さんのババロアの加工量を6個から12個へ増やす」「5月23日：粉がついた袋は燃えるごみと周知。次回から○君は加工量を増量する予定」「6月30日：ババロアを冷凍室で冷やすと、15分でちょうどよく固まっていた」等、このような記載からの情報は、次年度の指導計画に役立つものでもある。また、今年度は昨年度から取り組んでいる夏期休業中の作業勉強会の様子をビデオ録画した。今後、映像を交えた具体的な引き継ぎも期待できる。

反省としては、前期には調理器具の扱い方に関して、教師間で細かい部分の確認と情報交換ができていない箇所があった。生徒により分かりやすく伝わる方法や簡単に行える手法を適宜、教師間で確認をすることが必要である。同様に、調理器具の衛生面についても常に意識しておくことが必要である。

課題としては、(イ)で述べたように、今後も①継続した指導ができるための研修及び引き継ぎの在り方、②現商品の質の向上、新商品の開発、③よりよい学習形態(作業の単元化)の研究が挙げられる。また他に、④安全面と衛生面への配慮(調理室の管理や衛生管理者の設置の必要性はどこまで求められるか)、⑤生徒の多様な実態に合わせた作業内容の工夫、などの内容も過年度より課題として話し合いを続けてきた。③については、本年度新たな取組に一步踏み出したばかりではあるが、先に述べたように単元を設定したことは意義のある取組であったと担当教師間では評価した。その他の様々な課題については、現時点までの取組を振り返ると、作業内容の精選と改善が進んできていると思われる。今後も、試行錯誤しながら改善ができた点は継承し、課題については検討する姿勢を引き継ぐことが大切と考える。

加えて、キャリア教育の視点から考えると、食品加工作業は本来の作業学習が示す通り、将来設計能力と、情報活用能力の2領域に重点をおいた学習である。特に、本作業の特性である衛生面に関して気をつけなければならない事を学ぶことは、中学部を卒業し、次の高等部段階での食品加工作業へつながる力となると思われ、ひいては、将来の食品加工関係の職業に関わる場合の基礎知識となるであろう。本作業学習を経験し、将来の職業に興味・関心をもつことができるよう、これからも作業に求められる力および生徒の将来につながる食品加工作業学習を展開していきたい。

補足資料 作業展開例「できるようになるう」

	学習活動	学習する上での留意点、配慮事項
導入 9:55	○集合（調理室） ・入室時「おはようございます」と言う ・入口の椅子を運び、身支度を済ませて所定の位置に着席する ○はじめの会（司会：班長） ・作業の目標を全員で復唱する（副班長） ・個人目標を一人一人発表する ・本時の学習内容を確認する	・名札を見て、席に着くよう伝える。 ・身支度は、順番表を確認しながら開始までに済ませるように伝える。 ・班長、副班長用の進行の手順書を用いる。 ・作業内容と時間設定は、ホワイトボードに明記しておく。
展開 10:05	○加工作業 ・準備（手洗い、用具の準備） ・生産、加工、片付け、洗濯	・必要に応じて手順書の提示を行う。 ・実態に応じて教師が手伝う。 ・火、熱湯の扱いでは安全面に十分配慮する。
11:00	○販売配達の準備と確認 ・パック詰め ・口上の練習 ○販売、配達	・パック詰めは販売時刻に間に合わせるよう、協力して行う。 ・丁寧な言葉づかい、挨拶、返事、質問、報告ができるように実態に応じて支援する。
11:25	○次回の道具の準備 (休み時間)	
まとめ 11:45	○ふりかえりシートを書く	・目標の反省と次時の目標は、担当教師が生徒と話し合いながら行う。シートに本時の評価を記入する。
12:00	○おわりの会（司会：班長） ・一人一人が目標の反省と次時の目標を発表する ・教師の講評を聞く	
12:15	○洗濯物（布巾、白衣等）を干す ・退室時「おつかれさまでした」と言う	・洗濯物を協力してきれいに干せるように知らせる。

（２） 縫工作業の取組

ア はじめに

今年度は、前期・後期とも、生徒9、担当教師4名であった。4名の教師のうち昨年から引き続いて縫工作業を担当するものが1名、他3名についても少なくとも過去に1度は縫工作業の担当を経験したことがあるという体制で取り組むこととなった。使用教室は、縫製室及び生活訓練室である。作業内容は、前期は、「花ふきん作り」を9名全員行った。後期は、6名が小物作り（刺し子）、2名が花ふきん、1名が、さをり織りであった。

販売は、前期は「なつまつり」で、後期は「校内販売」を行った。

イ 昨年度までの作業検討の経過

（ア） 作業内容の変遷

中学部の縫工作業は、平成20年度頃は週に4種類の作業Bと言われる作業の中の一つの作業で、

1日2時間、主に手指の操作性、目と手の協応動作を必要とした内容の中で、意欲・態度・知識・技能を身に付けることを狙いとして行われていた。

その後、教育課程の見直しにより、作業を5種類とし、作業A・Bの区別をなくし、縫工作業も週2日の6時間とした。その後も作業学習の見直しが行われ、作業種が4種類になった今でも作業の一つとして取り組まれている作業種である。

作業の内容としては、毛糸のポンポンやビーズを使ったアクセサリ作り、のれん作り、ミシンを使っての小物・バッグ作り、4年前からさをり織り等に取り組んできた。「さをり織り」は、比較的刺し子が難しい生徒から、取り組むことができる内容である。現在も行っている「刺し子」を活かした「花ふきん」や小物作りは作業Bとして行われていた10年以上前から継続している作業内容である。特に、刺し子の刺繍をした「がま口の小物入れ」や、「トレイ型の小物入れ」は、なつまつりや校内の販売などで人気の高い製品であった。

(イ) 作業内容の検討課題と改善点

昨年度の課題は、刺し子製品としては花ふきんのみであったので応用化を図りたいということであった。また、作業にふさわしい服装（バンダナ、エプロン）の検討を行うことや、単元として取り組んでいくことなどであった。

今年度は、前期の作業の単元を「なつまつりで販売しよう」後期は、「学習発表会で展示・販売をしよう」と単元化設定することや、刺し子利用の「がま口の小物入れ」の作製、バンダナを着用することで取り組んだ。

ウ 実践事例

(ア) 前期の取組

前期に取り組む学習内容として、各個人のスキルがわかりやすく、個々の進度や技術に合わせた作業がしやすいことを理由に、前年度から継続して刺し子の花ふきんを行うこととなった。また、刺し子をしていく中で、作業内容が少し難しい生徒については、途中でさをり織りやビーズで作る小物等の、他の作業内容に変えることも可能であることを確認した。また、生徒の実態と相性などを考えた席の配置や、担当教師も決めた。



作業の準備では、刺し子に使うさらしを裁断すること、針や糸切ばさみ、針山、糸通しなどの道具類の数の確認と確保をした。また、それぞれの不足分の追加も行った。さらに糸通し、玉止め、玉結び、波縫いのやり方を視覚的に示した手順書を作成し、各個人に配付するための用意を行った。

初回のオリエンテーションではまず、各個人が作業で使う道具箱に、道具類を一つ一つ使い方や名称を確認しながら入れて完成させることを行った。それが完成すると、手順書や手本を見ながら糸通し、玉結び、波縫い、玉止めに教師と一緒に確認しながら行っていった。最初はそれぞれの生徒に道具の使い方や各工程でのつまずきが見られたが、何度も手順書を確認して練習したり、やり方を手を取りながら一緒に行って伝えたりするうちに、少しずつ身につけていった。印がわかりやすく、薄くて針を刺しやすいさらしを用いて練習に取り組んでいたが、取り組むうちに、針を刺す位置の目印として点線を書いた方がわかりやすい生徒と、点を打った方がわかりやすい生徒がいることがわかってきた。また、布を張りながら持つことが難しく、針を刺しにく



い場合には、刺繍枠を付けることでスムーズに針を刺すことができるようになっていった。このように取り組みを進める中で出てくる課題に対応していくうちに、個々の生徒に応じた支援の仕方をより工夫することができるようになっていった。慣れてくると運針の幅を小さくしたり、直線から曲線にしたりするなど、刺し子のデザインを複雑にすることでステップアップさせていった。一人一人の生徒が、花ふきんの仕上げにはミシンをかけたり、アイロンをかけたりすることも経験することができた。

前期の作業の単元を「なつまつりで販売しよう」として取り組んできた。最初は縫うことに慣れずに、自分たちの作った花ふきんを販売するということまで意識が向かない生徒が多かったが、少しずつ技術が上がり、それに伴いなつまつりまでの作業日の日数を知らせていくことで、販売への意欲づけをしていくようにした。生徒の意識も変わっていき、自分がよければいいという考え方ではなく、お客様に買っていただけるような製品を作らなくてはならない、という考え方ができるようになっていった。

前期の課題として、さらして作る刺し子の花ふきんのみの取組となってしまうため、商品のバリエーションが少ないことが挙げられた。



(イ) 後期の取組

後期は前期の取組をベースにしながら、昨年度より課題になっていた「作業にふさわしい服装」、「刺し子を活かした小物等の製品化」、「作業の単元化」に取り組んだ。

まず、「作業にふさわしい服装」ということで、昨年度の校内研の講師よりエプロンやバンダナの着用の提案があった。現在の作業内容からエプロンの着用は必要ないということになったが、製品に髪の毛が付いたりすることを防ぐことや、ミシンなどの機械類に長い髪の毛を巻き込む事故などを防ぐために、全員おそろいのバンダナを着用することとした。おそろいのバンダナを着用することで作業着らしく、一体感や作業の一員としての責任感を感じることができるのではないかと考えた。バンダナ着用の意味を生徒たちに伝えると、綺麗な製品を販売するために必要な心構えや、事故を防ぐという気持ちをほぼ全員が理解し、作業の始まりの時間に自分で着用することがすぐに定着した。買ってくれる人の立場に立ち、製品を丁寧に扱い、綺麗に仕上げるといった意識の高まりも一部の生徒には見られるようになった。

「刺し子を活かした小物等の製品化」については、年度当初から課題として意識をしていたが、今年度、作業担当教師4名のうち3名が久しぶりの中学部担当や縫工作業担当ということもあり、前期の作業ではなかなか取り組めずにいた。そこで夏季休業中に話し合いをもち、実際に製作しながら製品開発をすることとした。以前に縫工作業で取り組んでいて人気が高く実績があり、材料も以前からの在庫があって、近年手芸をする人の中でも人気が高まってきている「がま口」の製品を作ることとした。さらに、手芸の本を参考に、刺し子の刺繍が中央に入った額縁仕上げのコースターや巾着袋、ランチョンマット、手提げ袋やさりを織りの生地をワンポイントにした手提げ袋などの製品にも取り組むこととした。



「花ふきん」では、生地が柔らかくて厚すぎず、針の通りがよい、糸の色目が際立つ「白のさらし」を利用していたが、小物等の製品を作る上では「白のさらし」では透け感があり、生地も薄すぎて型崩れが心配される、汚れが目立つ、高級感が無い等、購買意欲を刺激することが難しいということで、手芸メーカーが刺し子用として販売している生地で、既に伝統模様が印刷してある生地と、和風の少し厚めの綿の無地の生地を使用することとした。無地の生地は、模様が印刷されていないので、一つ一つ手描きで模様を書き込まなくてはならず、チャコペンが刺している間に消えてしまい、目の細かな模様は難しいと心配された。しかし、生徒一人一人の刺し子の技術に合わせて模様や針目の大きさを決めることができ、印刷されている生地よりも全員が応用して使うことができた。



「がま口の小物入れ」は刺し子を刺すグループと、ミシンを使って縫製をするグループとに分かれて作業分担を行った。ミシンでの縫製には今年度から生徒にも「工業用ミシン」を使用してもらうことにした。今までは、いろいろな縫い目が1台でできるということや、縫うスピードを生徒に合わせて設定できる、手元の操作だけで扱いやすい、と言う利点があり「家庭用ミシン」を利用していたが、パワー不足で縫い目がそろいにくいという難点があった。練習を積めば生徒でも「工業用ミシン」の方が簡単に綺麗に縫うことができ、縫い直しなどによるロスタイムが少ないことがわかった。「がま口の小物入れ」は12月の学習発表会で展示発表する事ができた。出来上がった物はどれも手の込んだ、世界に一つだけのオリジナルの製品で、保護者や手芸の好きな人たちから「温かみのあるものですね」と好評であった。学習発表会で展示したものはそれぞれが持ち帰ることとしたが、この高評価を受けて3学期には校内で販売をすることが決まった。

エ 成果と課題

成果としては、小物入れの他にも、手提げ袋、コースターなどに刺し子を刺す製品を考え、ミシンでの縫製が直線縫いだけでできる、製作は簡単だけれど需要の高い物を作る事ができた。また、「作業の単元化」については、前期の作業の単元を「なつまつりで販売しよう」後期は「学習発表会で展示・販売をしよう」と「校内販売をしよう」という単元を柱に作業に取り組んだ。単元化することで、これまで中学部が各作業で統一して生徒に学んでもらいたい目標としてきたものに加え、年間の作業計画も一定の流れが生まれ、生徒たちにもイメージしやすく、作業学習の目標や何のために行うのかということが授業の中で見通しのもちやすいものになったと思われる。作業をする中で、「日常的に使ってもらえて誰かの役に立つもの、誰かが買ってくれる物、いいねと言ってもらえる喜び」等を意識しながら作業をすることが今まで以上にできたように思う。



課題としては、細かい作業のため、ある程度の手先の器用さが必要であることや、技能が定着するためには、時間が必要であること、作業量のノルマがない（個々の目標は設定してい

るが)、個人での作業であることなどである。

今後も、よりよい作業内容にすることなど実践を深めていきたい。

資料① 指導案抜粋 「学習の展開」

時 間	学 習 活 動	指導上の留意点
休み時間	作業室及び作業の準備を行う。 ・窓を開ける。 ・道具をとってすわる。 ・振り返りシートを閉じる。	・作業に集中できる環境づくりに配慮する。 ・すすんで準備ができるような言葉かけを必要な時に行う。
9 : 5 5 ～ 1 0 : 0 5	* 班長が進行 1 始まりのあいさつ 2 出席調べ 3 個人目標の発表 4 先生の話 5 作業内容の確認	・作業に取り組む気持ちが高まるような支援を心がける。声のトーン、言葉のかけ方、発表の順番など配慮する。 ・目標は具体的なものにし、一人一人本時の目標を意識出来るように支援する。 ・学部の作業目標のうち本日の重点目標を1つあげてより意識して作業に取り組めるようにする。 ・目標の発表後、個々の生徒の意欲を引き出すことを配慮しながら、肯定的、簡潔に言葉を添えていく。
1 0 : 0 5 ～ 1 0 : 5 0	6 作業①	・作業①の終了時間を明確に伝えて開始する。このとき視覚支援を併用する。 ・作業環境や安全面に配慮する。
1 0 : 5 0 ～ 1 1 : 0 0	7 休み時間	・トイレや水分補給、休憩の言葉かけなどは、個々に応じた促し方を心がける。
1 1 : 0 0 ～ 1 1 : 4 5	8 作業②	・気持ちの切りかえが主体的に行いやすいように、見通しを示す言葉を添える。 ・作業環境や安全面に配慮する。
1 1 : 4 5 ～ 1 2 : 1 5	* 班長が進行 9 かたづけ・そうじ ・道具等を片付ける。 ・作業室のそうじをする。 10 振り返りシートの記入 11 振り返りの発表 12 先生の話 13 閉じまりの確認 14 終わりのあいさつ	・担当箇所を個々が責任をもって掃除ができるように支援する。 ・個々に応じた方法で振り返りシートに記入できるように支援する。 ・振り返りの発表後、良かった点と課題をわかりやすく伝える。次回の意欲につながる言葉を添える。 ・友だちの良い点に関心がもてるような支援や雰囲気づくりを心がける。
	・窓を閉める。	・担当学年が行う。

(3) 農産・園芸の取組

ア はじめに

「農産・園芸」作業は、従来「農耕」という名称で行ってきたが一昨年の作業見直しを通じて、作業を高等部と同じ名称にして連携を図った。また、「農耕」という指導内容では自閉症やその他、重度の障害を持った生徒への指導の組み立てが困難であるとの理由から、視覚支援と構造化を強化する事を目標に新たに「園芸」を立ち上げ、日高村役場の花壇の整備を行うなど、地域とのつながり等も目指し取り組んできた。

野菜や花は、土づくりから始まり、種をまいて、水やりや除草、追肥など、たくさんの世話をしてやっと実がなるものである。すぐに結果として現れる作業ではないが、季節を問わず、暑くても寒くても、世話をし、花が咲いたり、収穫できたりした時の喜びを大きく感じることができる活動でもある。

作業時の活動形態として、農産班と園芸班の2班に分かれて取り組んでいる。農産班は、従来行ってきた野菜作りを主とし、自らが育てた野菜の収穫や販売活動を通して達成感や成就感を感じることが出来ると考えられる。

園芸班は、年間を通して校内美化や地域美化を目指してプランターでの花づくりや花壇への植栽を行っている。校内や地域での花壇の手入れでは教職員や地域の方からの感謝の言葉や花の生育を目の当たりにすることで達成感を得ることが出来る活動である。

また、昨年度は雨天時に行う内容として、「紙工作業」のエコバック作りに部分的に取り組んでいた。

年間活動表		
時期	農産	園芸
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・前期作業オリエンテーション ・きゅうりの苗植え ・畑管理（草引き、追肥、土寄せ等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・前期作業オリエンテーション ・事務室前の花壇整備（草引き） ・ひまわり、百日草種まき
5月 ～ 6月	<ul style="list-style-type: none"> ・たまねぎ、にんにくの収穫 ・畑管理（草引き、追肥、土寄せ等） ・きゅうりの収穫 ・販売 	<ul style="list-style-type: none"> ・プランター片付け（パンジー） プランター洗い ・土ふるい ・ひまわり苗植え
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・きゅうりの収穫 ・畑管理（草引き、追肥、土寄せ等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・日高村役場の花壇整備（草引き） ・ひまわり、百日草の苗植え
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・後期作業オリエンテーション 	
10月 ～ 12月	<ul style="list-style-type: none"> ・後期作業オリエンテーション ・大根の種植え ・たまねぎの苗植え ・ポップコーンづくり ・畑管理（草引き、追肥、土寄せ等） ・大根収穫 	<ul style="list-style-type: none"> ・日高村役場の花壇整備（草引き、耕し、植栽、水やり） ・事務室前花壇、食堂前花壇整備（草引き、植栽、水やり） ・プランターづくり（パンジー） ・花いっぱい活動（11/28） ・人権の花運動（12/13）
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・じゃがいもの種植え 	<ul style="list-style-type: none"> ・日高村役場の花壇整備

～ 2月	・畑管理（草引き、追肥、土寄せ等）	（草引き、水やり、鑑賞） ・事務室前花壇、プランター（植栽） ・ボカシづくり
---------	-------------------	--

「農産・園芸」作業例

	農産作業	園芸作業
共通	1、はじめのあいさつ 2、出欠調べ（体調確認） 3、目標の確認・・・全体の4つの目標と個人の目標	
作業①	<ul style="list-style-type: none"> ・移動の準備 ・本日の作業内容の確認 （ポップコーンの販売・畑の管理） ・販売用の試食を作る ・販売の練習をする ・チャイムで休憩（15分間） 	<ul style="list-style-type: none"> ・移動の準備 ・本日の作業内容の確認 （土づくり、プランターに土入れ） A、B班に分かれて、それぞれの作業場所へ移動する。 A、B班・・・各自自分の道具をとる。 I プラ船の中に土と肥料を入れる。 II スコップを使ってプラ船の中を混ぜ合わせる。 III 混ぜた土をプランターに入れる。 ※土がなくなったら I に戻って作業を続ける。 ・チャイムで休憩（15分間）
作業②	作業② <ul style="list-style-type: none"> ・販売に行く ・畑の管理をする ※追肥（ニンニク）、黄変した大根葉の除去 ・11時30分をめぐりに、片づけを始める。 	作業② ～作業①を繰り返す～ <ul style="list-style-type: none"> ・11時30分 A、B班とも片づけを始める。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・ふりかえりノートを書く ・ふりかえりノートの発表 ・先生の話 ・おわりのあいさつ 	

イ 昨年度からの取組や作業改善事項について

「農産・園芸」では昨年度（H27）の反省（田所先生の研修を受けて）として、今までの農産では数種類の野菜を育てたが、収穫、収入へのつながりの弱さが指摘された。そこで夏の野菜（きゅうり）、冬の野菜（大根）の二つを栽培の柱と決めて取り組み、それらの野菜を直接販売するだけでなく、漬け物に加工して販売することで収入の強化を図った。また、今年度は農業を専門とする教師が中学部の「農産」に配置されたことにより、夏の野菜（きゅうり）、冬の野菜（大根）の二つの野菜が安定

して生産することができた。それにより、収入は強化することができた。その他の具体的な改善内容として、きゅうりの収穫から大根の植え付けの間を埋める野菜も固定化し、一年のサイクルを単純化して取り組むようにすればいいのではという点が挙げられた。今年度は前述の検討内容を踏まえて、様々な取組を試験的に行っている。

「園芸」における地域（日高村役場）の花壇美化の取組では、昨年度、数種類の花を試験的に植栽したことで、育てやすい花を選定することができた。来年度も日高村役場の花壇整備を継続して取り組める目途もついている。

また、昨年度からは後期の作業の中で、「花いっぱい活動」、「人権の花運動」に参加し、パンジー、葉牡丹、ペチュニア、アリッサム、等の花を受贈した。「花いっぱい活動」少年健全育成活動では、いの地区の少年補導員、地域安全推進委員、警察職員の方々から、また「人権の花運動」では日高村人権擁護委員と教育委員会職員の方から受贈した苗を、校内への植栽や卒業式に使用するプランター用として植栽を行った。

今年度新たに取り組んだ内容として、公益財団法人日本教育公務員弘済会のビューティースクール事業に応募し、チューリップの球根を受贈し作業を充実させることができた。さらに、雨天時の作業としてボカシ作りに取り組むことにした。農産は雨天時に合羽を着て作業したり、園芸は屋根の下で作業をしたり雨天時でも農産園芸に関係のある内容が一定、展開できるようになってきた。そのため、後期からは雨天時に行う作業としての「紙工作业」エコバック作りを行わなくなった。



きゅうりの蔓上げ



ポップコーン販売準備



ポップコーン販売



花いっぱい活動



人権の花活動



日高村役場の花壇整備

ウ 次年度に向けての検討課題

現在の作業場所として農産班は中学部の作業用畑、園芸班は晴れている場合は中庭、雨天時は中学部の教室や今年度は渡り廊下の下などで作業を行っており、雨天時の作業場所の確保が課題になっている。昨年度も田所先生から雨天時の作業場所の確保を指摘され、ビニールハウスを建ててみたらどうかとアドバイスを受けたが、現状では設置場所や予算の関係から設置することが難しいと思われる。

農産班においては、今年度初めてとうもろこしの栽培に取り組み、生徒の活動として種取やポップコーン作り、販売と、意欲をもって取り組むことができる活動ができたと思われる。そして、田所先生の話でもあったが、雨の日の作業としても、成り立つ作業であるため、新たな取組として進めていくことができると考えられる。また、ポップコーンの販売においては、生徒がお客さんの話を聞いて、味を変えたり、販売の方法を変えたりと考えて行うことができたため、今後も続けていきたいと考えている。しかし、とうもろこしを育てるにあたって、害虫駆除や生徒が夏休みの間の作業など、生徒ができない作業も多くあるため、内容を検討していく必要もある。

きゅうりと大根を漬け物に加工する作業を生徒が行えるようにしたいが、中学部の作業日が月曜日と木曜日に固定されており、調理室は食品加工が使用し、調理設備のある生活訓練室は、今年度、縫工作業が使用しているなど、漬物を加工するための施設整備も次年度に向けて検討する必要がある。また、夏はきゅうり、冬は大根といった毎年同じ野菜を育てていくことは、継続して行うが、生徒にとってより作業がしやすく、実感できるような作物があるかどうか、実践しながら検討していきたいと考えている。

園芸班では昨年度から視覚支援と構造化を意識し、作業確認の時にホワイトボードに簡単な写真を貼って、本時の作業内容を視覚からもわかるようにしたことで、生徒が見通しを持ち比較的主体的に準備、作業、片付けまでを行うことができるようになった。

また、昨年度の反省から今年度は活動内容を精選し、支援の方法も検討したことで教師の支援を受けずに生徒が活動する場面が見られるようになった。

次年度に向けての検討課題として、引き続き今年度の作業反省を活かし、よりよい支援方法の研究をすることとともに、今年プリンターの土を振るって再利用していたが、上手く消毒が出来ずに良い土を作る事が出来なかったため、処理の方法を工夫し、土のリサイクルができるように考える必要がある。

また地域の美化活動として、昨年度から日高村役場の花壇整備に継続して取り組んでいるが、来年度は新たに作業場所の拡大も検討している。



園芸作業確認ボード



ボカシづくり

(4) 紙工作業の取組

ア はじめに

紙工作業の生徒は、男子9名、女子生徒1名で、そのうち6名が自閉症を併せ有しており支援度の低い生徒から高い生徒まで発達段階に幅がある。聴覚過敏の生徒や言葉による意思疎通が困難な生徒や情緒が不安定で危険認知の面に支援を要する生徒など、実態は多様であり、個々の支援や配慮が必要である。1、2年生の6名は、初めての紙工作業であるが、3年生の3名については、2回目の紙工作業である。回を重ねることで、大半の生徒がエコバッグ作りの作業工程を捉えることができているが、理解の度合いに差が見られる。中学部の各作業の共通目標は、「あいさつ、返事、質問、報告ができる力をつける。」「時間を意識して行動できる力をつける。」「一定時間、集中して作業に取り組める力をつける。」「準備や片づけ・作業に積極的に取り組む態度を育てる。」である。中学部の3年間で、職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力の獲得を目指している。

昨年度より作業の見直しの取組が行われ、今年度は、昨年度までの課題を明確にして「キャリア発達段階表」に示された「中学部で育てたい力」を目指して具体的な手立てを行い、授業改善に取り組むこととした。そこで、紙工作業では、支援度の高い生徒に焦点を充てて、支援を最小限にすることでキャリア発達を促したいと考えた。

イ エコバッグ作りについて

本校での新聞紙を再利用したエコバッグ作りは、平成23年度、中学部の一部の学年生単の取組から始まった。各工程を分業して製作することで友達との関わりが増え、生徒の協働性を高めることができる。また、前述したとおり搬入活動での地域とのつながりや労働への意欲を高めることができるため、この活動を継続的に取り組めるように紙工作業でエコバッグの生産をすることとなった経緯がある。エコバッグの素材となる新聞紙を検討した結果は以下のとおりである。

- ・高知新聞…購読している本校在籍者が多く大量に入手することができるが、紙質が弱い。
- ・朝日新聞…購読している在籍者が数名おり入手することが可能であり、紙質が他社の新聞紙よりしっかりしていて扱いやすい。
- ・英字新聞…購読している在籍者がほとんどおらず、入手することが困難である。外枠罫線がほとんどないため、エコバッグ製作の難易度が高い。
- ・その他の新聞…また、新聞紙の大きさにばらつきがありエコバッグ製作難易度が高い。

以上の結果からエコバッグに利用している新聞紙は、ほとんどが朝日新聞である。入手方法は本校教師からの寄付がほとんどであり、人事移動に伴い継続的に入手することが困難になる可能性があるため課題の一つになっている。



エコバッグ



エコバッグ (リメイク)

ウ 今年度の取組

[課題] ○改善した内容	関連するキャリア発達
[私語があり、作業に集中できない] ○クラシック音楽を流しながら作業を行う。	[人間関係形成能力] (つながる力) 場に応じた言動
[作業への気持ちの切り替えを促す] ○アームカバーを着用して作業を行う。	[将来設計能力] (憧れてめざす力) やりがい
[自己評価と相互評価の場面が少ない] ○村の駅ひだかへ搬入するエコバッグの検品を生徒自身が行う。	[意思決定能力] (かなえる力) 自己評価
[製品の仕上がりを一定化する] ○米糊に液体糊を混ぜることで、粘着力の安定を図る。	[将来設計能力] (憧れてめざす力) やりがい
[生徒が一人で取り組むことができる作業内容の開発] ○リメイク製品の開発を行う。 ○キーホルダー作りを行い、エコバックに取り付ける。	[意思決定能力] (かなえる力) 目標設定 自己選択 自己評価
[単元化を行う] ○作業学習を単元化する。「作品展に向けて」という単元のもとに、全員で作業に取り組む。 ○作品展までの作業回数を提示する。(あと○回と示すことで見通しをもたせる。) ○毎回、作業学習の目標を視覚的に提示することで、生徒自身が意識できるようにする。また、生徒が理解しやすいように個人の目標を数値化する。 [生徒にわかりやすい目的や目標の提示] ○学習発表会や作品展でエコバッグの販売を行う。 [学習で何を学んだのかを生徒自身が実感できていない] ○エコバッグ 200 個を製作し、村の駅ひだかへ搬入する。	[情報活用能力] (みつける力) 金銭の扱い 働く喜び

エ 実際の取組

(ア) 単元名「エコバックを販売しよう！」

(イ) 単元設定の理由

エコバッグの材料である新聞紙は、無料で入手でき、扱いやすい素材である。エコバッグ作りは、生徒の実態に対応できるように建設的な作業内容に工夫することができる。また、継続して取り組むことで手指の巧緻性を高め、達成感を得ることができる。紙工作業では、エコバッグの生産に分業で取り組んでいる。エコバッグ作りの各工程は、比較的簡単な作業から難易度の高い作業まで組み入れることができ、生徒の実態にあった作業内容を割り振ることができる。各工程は、それぞれの生徒に理解しやすい手順書を用意することで、作業内容を理解し、主体的に取り組めるように配慮している。どの工程でも短時間で自分の作業を完結し、仕上がり具合が目で見分り、各工程の作業量も確認することができる。また、正確な作り方をマスターすると、効率のよい作業の仕方を工夫することもでき、作業の持続性の向上をめざして、生徒個々に応じた目標設定をすることも可能である。しかも、

エコバッグを完成するまでの工程表を提示することで、生徒たちが生産の流れを理解し、見通しをもつことができ、紙工作業班として協力態勢を整えることもできる。

こうした実態を踏まえ、後期作業では、生徒たちが理解しやすい目標や目的を提示することで主体的に、かつ意欲をもてるように学期ごとに単元化を行った。2学期は、「学習発表会での販売」に向けて、3学期には、「村の駅ひだかへの搬入」に向けて取り組むこととした。搬入については、完成したエコバッグを地域の「村の駅」へ提供して、訪れたお客さんに買った商品を入れて持ち帰ってもらう。生徒たちが、半期に1度「村の駅」への搬入活動を体験することで、地域の人たちとふれあい、エコバッグを使ってもらうことで人の役に立っている製品であることを知り、労働への意欲を高めることにつながると考えた。

このように、エコバッグの生産は、作業量を確認でき、見通しのもてる作業内容であるため、生徒たちがどの工程でも達成感を得られやすく、障害の多様な生徒が取り組むことが可能な作業活動であると考えられる。

(ウ) 単元の目標

- 1) あいさつ、返事、質問、報告ができる力をつける。
- 2) 間を意識して行動できる力をつける。
- 3) 一定時間、集中して作業に取り組める力をつける。
- 4) 準備や片づけ・作業に積極的に取り組む態度を育てる。

(エ) 単元の計画

第1次「ていねいに作ろう」・・・・・・・・・・12時間（本時 11/12）

第2次「販売の準備をしよう」・・・・・・・・・・5時間

第3次「村の駅ひだかに届けよう」・・・・・・・・3学期

(オ) 本時の学習

a 本時の目標

- ・ 作業に集中して取り組む。
- ・ ていねいな作り方ができる。
- ・ 準備や片付けを進んでする。

b 生徒の実態と個人目標

生徒	単元に関する実態	本時の目標	評価基準
A 1年	作業の工程や内容を理解して、一人で集中して取り組むことができる。新聞紙2枚を貼り合わす時に、糊の付け過ぎやしわになってしまふことがある。	<ul style="list-style-type: none"> ・糊を適量付けることができる。 ・しわにならないように、丁寧に新聞紙を貼り合わすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・糊を適量付けることができたか。 ・しわにならないように、丁寧に新聞紙を貼り合わすことができたか。

B 1年	作業の流れ等を理解することは難しいが、簡単な作業内容であれば、教師の行っている作業を見ながら、自分も同じように行ってみようとする様子が見られる。集中できる時間はまだ短い、徐々に長くなってきている。	<ul style="list-style-type: none"> ・型抜き作業を自分で行うことができる。 ・型抜き紙を貼る作業を教師と一緒にすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・型抜き作業を自分で行うことができたか。 ・型抜き紙を貼る作業を教師と一緒にすることができたか。
C 1年	繰り返し学習することにより、作業工程や内容を理解することができる。細かい作業を嫌がる傾向にあるが、称賛することにより、あきらめずに作業を継続させることができるようになってきている。	<ul style="list-style-type: none"> ・時間いっぱい取り組むことができる。 ・糊を適量付け、しっかり貼ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間いっぱい取り組むことができたか。 ・糊を適量付け、しっかり貼ることができたか。
D 2年	現在、情緒面から個別対応となっている。作業の流れを理解し、教師の手本を見ながら同じように作製することができる。継続して作業する時間は短い。	<ul style="list-style-type: none"> ・型抜き紙を重ねて貼ることができる。 ・エコバックの取手を作ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・型抜き紙を重ねて貼ることができたか。 ・エコバックの取手を作ることができたか。
E 2年	周囲の様子に気を取られ、集中が途切れやすいが、手順を覚えて一人で作業をすることができる。道具の整理が難しく、作業が止まってしまうことがあるため、道具の置き場を決める必要がある。丁寧に作ることを伝えることで、早さばかりを意識しすぎず、きれいに作ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・決まった場所に道具を置くことができる。 ・適切な場面で報告することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・決まった場所に道具を置くことができたか。 ・適切な場面で報告することができたか。
F 2年	新聞の両端の糊付けと、半分に折る作業に取り組み、集中して活動することができる。たくさん作ろうとする意識は強いが、折り目が不十分な時がある。	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい位置に糊を付けることができる。 ・新聞紙に丁寧に折り目をつけることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい位置に糊を付けることができたか。 ・新聞紙に丁寧に折り目をつけることができたか。
G 2年	バッグの底の糊付けに取り組み、集中して活動することができる。作業に必要な糊の量を多めにとってしまいがちである。	<ul style="list-style-type: none"> ・糊の量を自分で調節することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・糊の量を自分で調節することができたか。
H 3年	エコバッグの底折りの手順を覚えて、自分から新聞を折ることができる。しかし、強く擦りすぎて新聞紙が破れてしまうことがある。ま	<ul style="list-style-type: none"> ・適度な力で折り目をつけることができる。 ・上下を見て、底部を折ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・適度な力で折り目をつけることができたか。 ・上下を見て、底部を折ることができたか。

	た、上下を見ずに底を折ってしまうことがある。視覚的に示すことが効果的である。		
I 3年	気温や給食のメニューなど、小さなことでも気持ちが左右されやすいが、落ち着いていると丁寧に作ることができる。集中力の持続は難しいが、手順を覚えると一人で作ることができる。途中で注意されると受け入れられないことがあるため、注意事項ははじめに伝える必要がある。	<ul style="list-style-type: none"> ・手順を覚え、一人でエコバッグの取手を作ることができる。 ・新聞の端と端を合わせて、丁寧に折ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手順を覚え、一人でエコバッグの取手を作ることができたか。 ・新聞の端と端を合わせて、丁寧に折ることができたか。
J 3年	多動な傾向があるが、型抜きを使って、新聞紙の型を抜くことができる。できた量や賞賛を喜び、教師と一緒に自分のペースで取り組むことができる。気持ちが高揚することがあるが、静かな場所で、一定時間過ごすことで気持ちを切り替えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞紙の型抜きをすることができる。 ・型ぬきした紙を箱に入れることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞紙の型抜きをすることができたか。 ・型抜きした紙を箱に入れることができたか。

c 展開

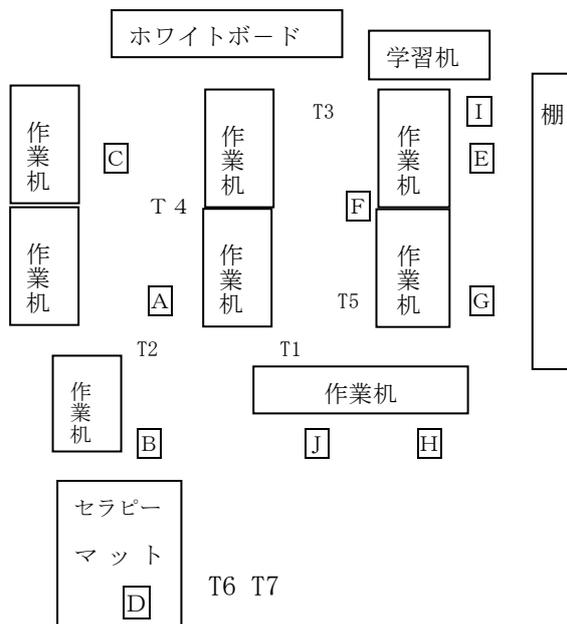
	学習活動	学習する上での留意点、配慮事項
導入 9:55	<ul style="list-style-type: none"> ○各自、道具の準備をして着席する。 ・入室時「おはようございます」とあいさつをする。 ・身支度を済ませて所定の位置に着席する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身支度、道具準備は、開始までに済ませるように伝える。
展開 10:05	<ul style="list-style-type: none"> ○はじめの会（司会：班長） ・作業の目標を全員で復唱する。 ・個人目標を一人ずつ発表する。 ・本時の学習内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の個人目標を発表し、意識できるようにする。
10:40	○作業①開始 (休み時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を流すことで、作業への集中を促す。
10:50	○作業②開始 (休み時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて、手順表の提示を行う。
11:20	○作業③開始	<ul style="list-style-type: none"> ・実態に応じて、困難な部分は教師が手伝う。
11:50	○片付け (休み時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧な言葉づかい、あいさつ・返事、報告ができるように実態に応じて支援する。 ・自分からすすんで片付けられるように、声かけは最小限にする。

	○そうじをする	・イスを机の上に載せ、掃きそうじに全員で取り組めるようにする。
まとめ	○振り返りシート書く	・そうじの終わったものから振り返りシートを書き、担当教師がチェックを行う。
12:10	○終わりの会（司会：班長） ・一人ずつ目標の反省と次時の目標を発表する。	・目標の反省と次時の目標は、担当教師が生徒と話し合いながら行う。ノートに本時の評価を記入する。
12:20	・作業量の評価 ・先生の講評を聞く。 ○終わりのあいさつ	・本時の個人目標の自己評価と次回の個人目標を発表し、仕上げた枚数を評価する。
12:30	・退室時「お疲れ様でした。お先に失礼します」とあいさつをする。	・大きな声であいさつをして、作業終了の切り替えを図る。

d 準備物

- ・学習のスケジュールカード
- ・タイマー
- ・新聞紙
- ・道具箱
- ・完成品入れ
- ・液体のり
- ・米のり
- ・のり入れ用器
- ・刷毛
- ・下敷き（牛乳パック）
- ・ペーパー
- ・ペーパーウエイト
- ・クリップ
- ・クラフトパンチ

e 教室の配置図



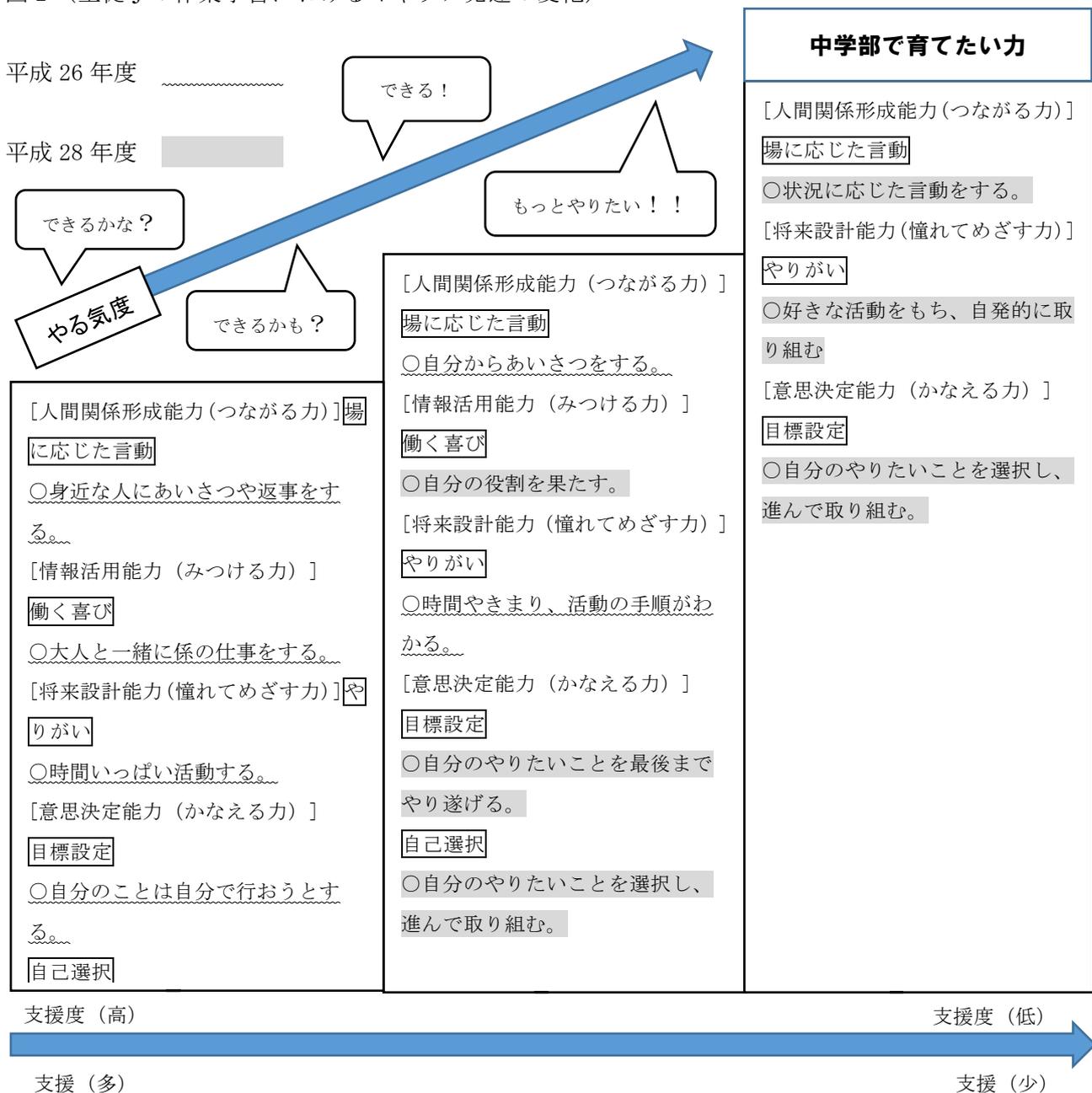
f 学習活動の評価

- ・作業に集中して取り組むことができたか。
- ・ていねいな作り方ができたか。
- ・準備や片付けを進んですることができたか。

オ 生徒Jの作業学習におけるキャリア発達の変化

作業学習では、製品のクオリティを高めることも大切である。しかし、中学部段階の生徒たちにとっては、難易度の高い目標であり、欠品を作ってしまうようにすることで、過度な支援になってしまうことがある。また、聴覚過敏のある生徒や情緒が安定しない時など、場合によっては支援が刺激になることも考えられた。支援を減らし、一人でも行える作業内容を設定することで「できた！」「できる！」「もっとやってみたい！」という気持ちを促せると考えた。また、中学部3年間を通して、作業種共通の目標に取り組んだこともキャリア発達の促しに大きく影響したと考えられる。最初の頃は、教師に作業手順の確認を求め、不安でその都度教師に確認し、自分から行動できない様子がみられた。しかし、作業の流れや手順を覚えてくるにつれ、次第に主体的な行動ができはじめた。作業の手順を覚えると活動全体に見通しをもって、時間いっぱい作業ができるようになった。その結果、中学1年生時に紙工作業を行っていた時よりも以下の点（図1）で大きく成長が見られた。

図1（生徒Jの作業学習におけるキャリア発達の変化）



カ 成果と課題

中学部の各作業が共通目標をもつことで、中学部3年間で4種の作業を経験すると共に職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力の獲得を目指した。紙工作業では、「あいさつ、返事、質問、報告ができる力をつける」については、入室や退室の際に、ほとんどの生徒が自分から明るくあいさつできるようになった。一人があいさつをすると他の生徒もあいさつをするという学び合う雰囲気を作ることができた。「時間を意識して行動できる力をつける」については、班長の声掛け後に音楽を流すことで、話すことが好きな生徒も私語をやめ、作業に向かうことができた。「一定時間、集中して作業に取り組める力をつける」については、タイムタイマーの活用やスケジュール提示で視覚的に時間に見通しがもてるように支援を行った。また、新たな試みとしては、生徒が一人でも行える作業内容を開発した。その結果、支援や指導による刺激が減り、周囲への注意の散漫が減少し、自分の作業に集中することができるようになった。特にキャリア発達の成果があったのは、これまで支援度が高かった生徒であった。自分のペースで作業を行い、称賛される機会が増えたことにより、自信や意欲をもって積極的に取り組むことができ始めた。作業学習においては、教師の過度の支援や指導により生徒が能動的になる可能性もあるため、教材を生徒の実態に合わせて、年度当初に準備しておく必要がある。その際、生徒の実態は常に変化していくことも考慮しておき、支援はスモールステップで徐々に外していくことも考慮しておく必要がある。また、自己評価の場面は設定していたが、集中して作業ができるように環境設定をした結果、相互評価の場面が少なく、作業を行う者同士の関係性が希薄になったことが今後の課題である。今年度、作業学習の研究授業を実施し、外部講師から「作業学習では、教師も生徒と一緒に働くというスタイルが良い。教師の働く背中で学ぶこともある」という助言を頂いた。今後は、教師が働く姿勢を見せると共に同じ作業を行う生徒が互いに協力できる場面を多く設定し、共に達成感を感じられるように仲間づくりを行っていくことや学び合える環境を設定していきたい。



リサイクル封筒の型抜き



キーホルダーの紐通し



搬入の様子



キーホルダー

4 おわりに

中学部では、平成 25 年度より「キャリア発達段階表を活用した授業づくり」をテーマに取り組んできた。本年度はキャリア発達段階表が新たに見直されたことで、中学部の研究テーマを新たに「キャリア発達段階表を活用した授業改善」とし、生徒のキャリア発達の確認と課題の設定、支援の在り方を検討し、授業実践の研究をすすめてきた。

本年度は、27 年度に行われた作業学習改善検討委員会や田所氏による作業学習研修会を受けて、各作業での取組について研究を行い、作業内容についての協議を重ねてきた。その結果、各作業の日々の活動の記録をとること（作業日誌の導入）等、作業内容の充実に向けてこれまでの課題や改善点を踏まえた取組を行うことができた。また、学部内で共通認識を図るために、本年度も取組の内容や成果について報告会を行った。それにより、「中学部で目指したい力」について再認識する機会となり、次年度への授業改善へ繋げることができたと考える。

食品加工では、田所氏の助言を受けて、本年度後期より新たな試みとして単元化を図り、「できるようになろう」、「声を聞こう」、「よくしよう」という 3 期に分けて取り組んだ。「できるようになろう」では作業内容を理解してできるようになることを目指し、「声を聞こう」で購入者の声を聞いて「よくしよう」で改善することに取り組んだ。この 3 期の単元設定は教師側にとっても、指導目標をより意識できるものとなった。縫工でも、個の実態に応じた作業内容の見直しと単元化を図った。単元化をすることで、年間の作業計画にも一定の流れが生まれ、生徒たちにもイメージしやすく、何のために行うのかという作業学習の目標が明確になり授業の中で見通しのもちやすいものになった。

農産・園芸では、作業内容と支援方法の見直しを行った。農産では、とうもろこしの栽培に取り組み、これまでの課題であった雨天時の作業内容を改善することができた。園芸では、作業学習の構造化を目指し視覚支援の方法を重点的に検討したことで、生徒が見通しをもって主体的に準備から片付けまでを行うことができるようになった。

紙工では、作業学習の単元化と作業内容の見直しを図った。単元化を図ったことにより、目標や目的を生徒が理解しやすくなり、意欲をもって主体的に作業に取り組むことができるようになった。また、生徒の実態に応じて作業内容を改善したことによって、これまで支援度が高かった生徒も一人でできることが増えた。自分のペースで作業を行い称賛される機会が増えたことで、自信や意欲をもって積極的に取り組むことができるようになった。

中学部の研究計画としては、各作業の取組と並行して年次研修者による実践報告会、第 3 回校内研修と連携して全学部を対象として作業学習の研究授業及び、研究協議も行った。また、夏季休業中には、どの教師がどの作業の担当になっても支援や指導ができるように、教師間の指導体制を整えるための研修会を行うことで、各作業の内容の共通理解を図ることができた。さらに、本校のキャリア発達段階表が改善され、生徒一人一人の目標や作業で目指す力を具体化し、手立てや支援、今後の課題を考察することができた。今後も小・中・高が連携して、卒業後の自立に向けたキャリア発達を促す視点を取り入れた授業づくりに取り組むうえで、キャリア発達段階表を共通の「授業づくりのツール」として積極的に活用することが重要であると考えます。

V 高等部の研究

高等部テーマ「進路につながるキャリア教育の実践とまとめ」

1 はじめに

今年度は第Ⅱ期「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実」というテーマを設定した最終年度に当たる。これまでそれぞれの学部で課題に沿った取組が行われ、その成果を土台に高等部でも、卒業後の生活を見通したキャリア教育を意識して取組を進めた。3年目の本年度はキャリア教育のまとめの年として、生徒一人一人の能力・適性等に応じた教育活動を充実し、生徒の自立する力をつけ、社会参加に向けての適応力を高めることを目標に取り組んだ。また、自己実現を図り社会自立につながる力を育てることをキャリア教育の到達点であると考え、教育活動をキャリア教育の視点で再構築し、めざす生徒像を「自らの力を発揮することによって自己実現を図り、社会的自立につながる力を身につけた生徒」として取組を進めた。

実践方法は今年度も学年ごとにテーマを決めて進めることとした。その際、教職員間が共通理解を図るためのツールとして、発達段階表（2016版）を活用した。日々の一つ一つの授業をキャリア教育の観点から分析することにより、学習内容がキャリア教育のどの能力と関連しているのか確認し、系統的な指導の在り方についてより具体的に検討を進めるツールとして、また評価のツールとしても活用していくこととした。

高等部1年テーマ「進路につながる仲間づくり」

高等部2年テーマ「就労と自立にむけた取組～キャリア発達の視点から～」

高等部3年テーマ「生活単元学習における仲間と協力し合い、お互いの頑張りを認め合う授業づくり～行事に向けた取組を通して～」

2 研究内容および方法

(1) 研究内容

- ア 卒業後の進路に向けて、生徒一人一人に応じた支援や指導のあり方を検討する。
- イ 将来の生活(家庭や社会生活、職業生活)に必要な知識、技能、態度を習得させるための指導や支援の充実を図る。
- ウ 実践から問題点や課題を明らかにする。(キャリア教育の視点より)

(2) 研究方法

- ア 各学年で実践研究に取り組む。 イ それぞれの実践例について研究を重ねる。
- ウ 学部全体での研究発表を行う。 エ 実践の成果と課題を実践集録にまとめる。

(3) 研修計画

- ア 学部研究日を月に一回設定する他、学年での研究日を随時定める。
- イ 研究テーマに沿った研修会に参加し、研究を深める。
- ウ 研究の成果を発表する。

月	日(曜日)	研修内容
4月	27日(水)	研究テーマ・方法についての協議
5月	11日(水)	各学年の研究テーマ、研究内容、研究方法についての検討
6月	1日(水)	各学年での実践研究推進、アセスメント・発達段階表による推進計画
7月	5日(火)	各学年での実践研究の推進
8月	2日(火)	各学年での実践研究の推進
9月	6日(火)	各学年での実践研究の推進
10月	5日(水)	各学年での実践研究の推進
11月	1日(火)	各学年での実践研究の推進
12月	6日(火)	各学年での実践研究の推進
1月	20日(金)	各学年で原稿の最終チェック

3 実践事例

(1) 高等部1年生における取組

「進路につながる仲間づくり」

ア はじめに

高等部1年生は、16名(男子14名、女子2名)である。

男子が多く、2学級の内、男子だけのクラスも1クラス構成している。16名の内、本校の中学部から入学した生徒は9名で、外部の中学校から入学した生徒は7名である。

外部からの入学生は比較的静かな生徒が多く、入学前に不登校であった生徒や、集団生活の経験の少ない生徒が多い。学年全体としては、発達段階の高い生徒が多く身辺自立はできている。しかし、情緒面で安定性に欠ける生徒や、対人面において繊細な気持ちの生徒もいる。そのために集団の構成としては、クラスなどの小さな集団から徐々に学年全体での取組ができるように、個々の生徒の気持ちの安定や生徒間のつながりをはかりながら慎重に学年全体学習に取り組んできた。

不登校であった生徒や気持ちの不安定な生徒達に対しては、まず、学校が安心していただけることのできる居場所づくりからはじまり、他の教師との連携をはかり、保健室での休養も入れながら無理をせず、少しずつ環境を整え、同時に本人の自主性を促すようにした。その成果もあり親しい友人も少しずつでき、登校も安定してきた。

ADHD等の障害をもつ生徒に対しては、状況を見ながら教師が見守ったり、1対1で生徒の話や不満を聞くなどの対応を行った。クラスでの対応としては、進路を意識してソーシャルスキルを高めるための対人関係やより良い言葉づかいなどについての授業を興味や関心をもたせながら行った。また、生徒一人一人に対して個別に話を聞く、または、話をするなど個別の対応の時間をもち、気持ちの開放をすることも行った。SSWやSCへの相談や本人のカウンセリングへの参加等もとても役立つことが多かった。それらのクラスの取組も並行しながら、学年全体として取り組んだ行事の取組から、生徒達の自主性やまとまりなどが見られてきた実践の内容である。まとめかたとして、人間関係形成能力に視点をおいた。各行事のようすと評価を交えながら、集団としての活動の在り方を振り返った。また、各クラス3名の生徒の実態と評価で個別の成果を確認することとした。

イ キャリア教育の視点よりとらえたつきたい力

キャリア教育の発達段階表を基に、生徒の実態を話し合った。ここには、例として各クラスより3名の生徒の実態を挙げている。

生徒	実態 (現段階での進路希望)	進路を考えた時に今後つきたい力 (領域)
A	作業能力も高く体力もあるが、反面自信がなかったり、その時の気分によって態度が変わることがある。生活面ではほぼ自立している。(一般就労希望)	・場や状況に応じた言動をする。(人間関係形成能力) ・卒業後の自立した生活。(将来設計) ・余暇活動の充実。(意志決定)
B	大人しいがいつも朗らかで、困っている友達を気遣う優しい性格である。ダンス部では人前で堂々と踊る等、積極的な一面も見られる。(B型希望)	・基本的な生活習慣の確立。(将来決定) ・公共交通機関の利用の仕方や、携帯電話の活用の仕方の習得。(情報活用) ・基本的なお金の扱い方。(情報活用)

C	弱視のため、視覚的な配慮や細かい作業での補助が必要である。体力面での自信のなさがあるが、作業など自分のペースで最後まで頑張る姿勢が見られる（B型希望）。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的な生活習慣の確立。（将来決定） ・ 基本的小金のお金の扱い方。（情報活用） ・ 体力の向上。（将来決定） ・ 人見知りをなくす（人間関係形成）
D	明るい性格である。作業能力は高い。活動をよく理解して見通しがもてたことは、自分で全部行おうとする。気持ちを調整することが弱く、初めての場所などでは不安感を訴えることがある。（一般就労またはA型希望）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達と協力、共同して物事をやりとげる気持ちをもつ。（人間関係形成） ・ 気持ちの切り替えや安定感をもつ。（人間関係形成）
E	性格は穏やかで優しいが、初対面や関わりが薄い相手に対しては固まってしまうことがある。手先が器用で、細かい作業を几帳面に行うことができる。（A型希望）	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーション能力を高める。（人間関係形成） ・ その場に応じた言動をとる。（人間関係形成） ・ 自信を高める。（人間関係形成）
F	声かけの指示で活動することができ、見通しをもって行動することができる。自分に納得の行かない時に時折興奮した状態になることがある。（入所希望）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 余暇活動の充実（意思決定） ・ 集団活動の中でいろいろな友達と関わる。（人間関係形成） ・ 体力の向上。（将来設計）

ウ クラスでの取組

（ア）学習事例

適切な言葉づかいが使えるようになるう 10月27日（木）③④ 総合的な学習の時間

【題材設定のねらい】

クラスでは、人間関係や集団行動の苦手な生徒が多く、そのためにトラブルになることもある。言葉づかいは人間関係を円滑にするために大切であり、次学年では、現場実習なども経験するので、基本的な挨拶や会話の言葉等を学びたい。また、乱暴な言葉づかいになる生徒もいるので、適切な話し方を皆で学習していきたい。理解力は高い生徒が多いので、基本的なことをくり返し学ぶことで汎化できることもあると思われる。劇中の役割を簡単に設定して、自分達も演じることで興味をもたせたい。

【題材設定の目標】

状況や場に応じた言動をする・・・人間関係形成能力

将来に向けて挨拶や返事ができるようになるう・・・人間関係形成能力

【学習の展開】

学習活動	留意点	準備物
<p><生活の一日の流れを想定し、場面設定した劇を通して、適切な言葉かけや相手に返す言葉を考える></p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝の挨拶をする 「おはよう」 教師が戸を開けて、挨拶しながら入ってくる。 それに対して返す言葉を考える。 ・借りていたCDを返す。「ありがとう」 生徒役教師が代表生徒に渡す。 ・まちがって友達のを踏んでしまった。 「ごめんなさい」 ・友達同士でボール遊びをしていると別の友達がくる。 「遊びにいらしてね」「いいよ」「ごめんね また今度ね」 ・本を渡される。「どうぞ」「ありがとう」 ・テープカッターを使っている。 「これかしてね」「どうぞ」 ・友達が突然具合が悪くなる。 「大丈夫？」 ・帰りの言葉。 「さようなら」 	<ul style="list-style-type: none"> ・苦手な人に対しても、挨拶はすることの大切さを言う。(できれば声の大きさにも注意を払う) ・お礼の言葉を考える。 (できれば受けとった方も黙って受け取らずに何か言葉をそえると良い等考える) ・間違った時はあやまることの大切さや、場面に応じて他の言葉を加える等。 ・誰とでも遊べるようになるとよい。 どうしても断りたい時は、相手の気持ちを考えて断る。 ・「どうぞ」「ありがとう」等、物をやりとりする時に、黙ってやりとりするのではなく、どんな言葉がいいか考える。 ・他にどんな言葉かけがあるか考える。 ・自分から声をかけると良い等。 	<ul style="list-style-type: none"> 代表の生徒と生徒役教師 代表の生徒と生徒役教師 代表の生徒と生徒役教師 教師と本やテープカッター

(イ) 学習を通じた生徒の様子

クラスで行ったため、役割で前に出てくる生徒も多く、ざわつく場面も多かったが、概ね、楽しみながら学習ができた。内容の理解はよくできて、他にどんな言葉が良いかという設問に対しては、活発に発言できた生徒も数人いた。発言のない生徒も、それぞれに考えていたと思われる。基本的な挨拶や返事の学習が多いが、普段から返事の少ない生徒もいて、対人関係について考えるきっかけとしたいと思う。

エ なつまつり（行事）での取組

(ア) なつまつり概要

本校に入学して初めて1年生全体での取組みとなるなつまつりでは、生徒同士の関係づくりや学年・

学部を越えての交流をねらいとし、生徒達が達成感や満足感、互いの連帯意識を育む機会となる行事と捉えている。今回は、お化け屋敷班5名・木工班5名・小物づくり班6名と3つの班に分かれて取組をした。

本校でのなつまつりは初めての生徒もいるため、事前学習の際に教師から昨年度の様子や今回の取組みの提案の話聞いたあと、自分達がやってみたい内容を話し合った。当初、小物づくり・木工・ゲームの3つをしようと決まったが、メンバーが決まり具体的な活動の話になると、生徒からお化け屋敷をしてみたいとの声があがり、インターネットで作り方や道具等を色々と検索してゲームをお化け屋敷に変更した。

また、生徒から商業的なビデオを作りたいとの提案があり、タブレットの録画機能を活用して、生徒が演技したプロモーションビデオを作り集客用に廊下で流した。

なつまつり当日はそれぞれの販売場所で時間によって担当を決め、店番をしたりお化け役をしたりして全員が参加できた。

(イ) 【お化け屋敷づくり】

なつまつりでの取組としてお化け屋敷づくりを行った。まず始めにインターネットを活用し、どうすれば怖くておもしろいお化け屋敷ができるかを自分たちで調べた。そして調べたことを皆で話し合い、お化け屋敷の名前とルール、当日のそれぞれの役割を決めた。話し合いでは、皆が意見を言い合い協力して行うことができた。

製作するにあたって会場設営班と小物準備班の2つのグループに分かれた。会場設営班の2名は製作に必要な竹を自分たちで切りに行き、製作に取り組んだ。お化け屋敷のルートには竹とダンボールで作った壁を何枚も作り、それを並べることによって作製した。難しい作業であったが、二人で声を掛け合いながら協力し製作することができた。小物準備班の3名はインターネットでお化けの画像を調べ会場に貼り付けたり、会場設営班が作った壁に色を塗る作業を行った。生徒の実態として1名作業工程が難しい生徒が居たが、他の2名と一緒に作業をしてもらえることによって製作活動に参加することができた。

最後は全員で会場設営を行い、お互いが協力し助け合いながら怖くておもしろいお化け屋敷を完成させることができた。



(ウ) 【木工】

美術の授業として木工作品の製作に取り組んだ。生徒4人は比較的手先が器用で、興味を持って取り組むことができた。またペアで製作に取り組み、お互いに助け合ったり協力する場面をできるだけ多く設定した。

なつまつりや学習発表会に向けて、以下の作品を製作した。

- ・ノートパソコン台
- ・まな板
- ・カッティングボード
- ・食器棚
- ・ファッションチェア

木工作品の製作は作業工程がはっきりしており、プラモデルのような感覚で取り組むことができる授業内容である。生徒たちも作品の完成に向けて見通しが立ち、自分で作業の到達点を設定できるなどのメリットがある。また、ペアで協力した方が作業効率が上がるため、自分たちで声を掛け合いながら、自然と協力して作業する場面が多く見られた。ファッションチェアはまだ未完成だが、年度末に向けてペンキの仕上げ塗りを行う予定である。



(エ) 【小物づくり・プラ板製作】

小物づくり班のうち4名は、プラ板を使って磁石やアクセサリ等の小物を製作し、販売した。

なつまつりにプラ板の小物販売をすることが決定した後、5月30日(月)の美術の時間を利用して全員でプラ板の作品を作り、ストラップに仕上げる製作を体験した。小物づくり班のメンバーだけでなく、全員で製作手順を一緒に確認し、実際に体験をすることで、なつまつりへ向けた準備が高等部1年生全体としての取組であるという意識を持つことに繋がり、学年としての連帯感が増したのではないと思われる。お互いに作品を見合い、声をかけ合いながら和やかな雰囲気の中で授業を終えること

ができた。

その後の各グループに分かれた製作においては、4人の生徒はまず自分が作りたい下図のデザインを選び、各自で印刷を行った。そして一人一人にプラ板製作の手順書を配付し、それを見ながら生徒がそれぞれのペースで製作を進めることができるようにした。そうすることで、生徒は自分で手順を確認しながら落ち着いて活動することができたようである。下図のデザインや色の配色等で迷った時には自分から教師に相談しアドバイスを求めることができた。作りたいデザインを自分で選ぶことが、自主的な作品作りに繋がったと考える。

プラ板製作では、色の塗り方が作品の仕上がりを左右する大きなポイントとなる。今回は油性マジック、水性サインペン、色鉛筆の3種類を用意した。油性マジックは、焼成前は色ムラがあるように見えるが、焼きあがると色ムラは目立たず透明感のある仕上がりとなる。水性サインペンは発色がよくマットな仕上がりが美しいが、インクを塗る分量が多すぎると焼成後にひび割れができる原因となるため、注意が必要である。色鉛筆は温かみのある優しい発色が特徴であり、プラ板の表面をサンドペーパーで磨き傷をつけることにより、色鉛筆の粉の定着を良くすることができる。

着彩後、はさみで絵の輪郭の外側を大きく切り取り、オーブントースターで焼成する。焼成後は大きさと色合いに合わせてマグネットや髪飾り用のピンをグルーガンで接着し、商品として仕上げた後に全員で協力してラッピングをし、値札をつけた。

プラ板製作は簡単な工程で完成度の高い作品を作ることができるため、仕上がりの満足感や達成感を得られやすい。一生懸命作った商品がなつまつりでお客さんに購入されたことが生徒の大きな喜びとなり、自分への自信へと繋げることができた。



(オ) 【小物づくり・ミサンガ制作】

小物づくり班のうち2名はミサンガを作ることにした。2名共、静かな生徒で手先も器用である。色糸のおり方が複雑なのでアイパットで動画を見せて糸の織り方を教えたり、紙テープで拡大して織りかたを手本として見せる等の支援を行った。初めはすぐに飽きたりしていたが、コツを覚え上手にできるようになると、完成を楽しみにしながら根気よく取り組むことができていた。糸の組み合わせにより、美しい作品ができるので色の合わせ方を二人で話し合ったり、時々それぞれの作品を批評しあうなど静かだが穏やかなコミュニケーションがとれていた。

オ 学習発表会の取組

(ア) 学習発表会

様々な行事を体験し、徐々に関係性ができてきた生徒集団となりつつある中での学習発表会ということで、11月の校内実習終了後より取組を始めた。生徒同士の人間関係をより深めることや、積極的に活動に参加することをねらいとした。なつまつりのプロモーションビデオ撮影の時に、生徒たちから色々な案が出されたことと、積極的に参加する姿勢が見られたことから、当日何かを披露するのではなく、事前に準備したものを当日披露するやり方がベストではないかとの教師の案もあり、全員参加型のストーリー性のある映像を撮ることに決まった。

それぞれの活動内容が以下のように行われた。

活動内容	生徒の様子
シナリオ・台本づくり	クラスの生徒を中心に、習熟度の高いグループの生徒が国語の時間を利用してストーリーを考えた。パソコンを利用してそれぞれのセリフも入力し、他のグループの生徒に原案として提案した。それを受けてその他のグループの生徒達が自分のセリフの部分を言いやすい言葉に手直ししたり、友達の設定を考えたりと全員が関わることができた。
キャストの配役	ストーリー作りの際に、適役を教師と一緒に考えて配役した。配役された友達が言いそうなセリフを話し合っ、パソコンで入力することができた。
ビデオ撮り	複数の生徒が iPad を使い、交代で監督役をし撮影した。演技する生徒も、監督役の生徒のアドバイスを受けて、声の出し方や仕草を気にする等、どの生徒も積極的に参加できた。生徒同士で試行錯誤しながらアイデアを出し合う、活発な活動となった。また、発語の難しい生徒も友達と一緒に遊具で遊ぶ様子や、手を取って走るシーンの撮影で参加できた。

(イ) 題名「ひだかにきたか」について

ストーリー：日高養護学校に地域の中学校から入学してきた生徒達の中で、本校に対する不満が噴出した。それに対して中学部から入学してきた生徒達は、対立しながらも楽しい所や良い所を説明するも、腹を立てた先の生徒達が居なくなってしまう。対立していた生徒達が、みんなで自分達を一生懸命探す様子を見て、「この学校でがんばってみようかな」と徐々に気持ちを改める。一つになった生徒達は「仲間」となり共にこの学校での活躍を誓いあう。

最後に願いをこめて飛ばしたみんなの紙飛行機は・・・。

キャスト：高等部1年生 16名

演出：高等部1年生



カ 人間関係形成能力に関する評価（なつまつりと学習発表会を通して）

（イで示した各クラス3名の生徒）

生徒	なつまつり の担当	学習発表会 の担当	評価
A	お化け屋敷	シナリオ作り	シナリオ作りでは、日高に入学した4月からの出来事を思い返しなが、友達と一緒に考え、パソコンで文章を入力することができた。自分なりのアイデアやストーリーを提案し、みんなで協力してつくりあげることができた。
B	小物作り	キャスト	小物作りでのプラバン製作は、下図を見本から選び好きな色味で着色し、たくさん製作できた。友達と、互いの作品を見せ合う様子も見られた。学習発表会では、与えられたセリフを自分なりの言い回しを考えて演技できた。友達の撮影の様子や出来上がった作品を、笑顔で楽しそうに見ていた。
C	お化け屋敷	キャスト	お化け屋敷作りでは、友達と一緒に看板作りをしたり、お化けのイラストを切ったりする中で、友達同士の会話も多くなった。また、活動回数が進むにつれ、友達との活動が楽しみになってきた。学習発表会に向けてビデオ撮りでは、戸惑うこともあったが、仲良くなった友達と意欲的に参加することができた。
D	小物作り	キャスト	小物作りでは、同じグループの生徒と必要な連携以外に、作品についての会話ができる。学習発表会では、キャストとして、出演したが、他のクラスの生徒が撮影することも嫌がらずにできた。他の生徒が演技するのを嫌がらずに楽しそうに見る等交流ができた。
E	小物作り	ビデオ撮り	小物づくりでは、自分の作品が販売されることや、ほめてくれることで、自信をもつことができていた。物づくりに対して、意欲ももっていた。一緒に作っている友達とは、作品を通して、会話が増えて、親しくなった。ビデオ撮りでは、教室の友達に対して、積極的にではないが、動画をとる場面もあり、友達同志のフランクな会話に参加するようすも見られた。
F	お化け屋敷	キャスト	お化け屋敷作りでは、色塗りや、印刷した画像を壁に貼る作業を友達と一緒にいき、最後まで協力してできた。学習発表会では友達と一緒に出演し、楽しく活動に参加することができた。

キ おわりに

集団活動を形成する上で、大事なものは人間関係形成能力である。人とつながり、協力や共同して何かを作りあげたり完成することで自分の存在感を高めたり、チームの一員としての安心感を得ることができると思う。また、社会にでるためには、必要なことである。しかし、様々な個性や障害の特性をもった生徒が一度に同じ方向を向くことは難しい。特に、高1は初めての大きな学部への所属である。戸惑いや不安感を感じる生徒もいる。そのために、クラスや小さな集団から、少しずつ輪を広げて時間をかけることで安心感を得ることができるのではないかと考えた。

クラスでは、生徒の実態や障害の特性に合わせて、言葉づかい等社会生活におけるマナーについて学ぶ学習を進めた。

なつまつりでは、数名や小さな集団での物づくり等の活動を基本として交流しながら、大きな学年

全体の活動になるように進めてきた。学習発表会では、役割を決めて集団構成をして、生徒同士の交流が活動の軸となり、個性に合わせたコミュニケーションのとりかたを学び合いながら、一つの形となるものを作りあげた。

これらの活動を振り返ると、全体の活動に対して消極的だった生徒が自主的に少しずつ活動に参加ができるようになったり、クラスを超えて親しくなったりする様子が多くみられた。来年度は更にまとまりのある学年集団として成長することと思われる。

(2) 高等部2年生における取組

「就労と自立に向けた取組～キャリア発達の視点から～」

ア 取組にあたって

高等部2年生は、本校中学部より進学してきた8名、地域の中学校から入学してきた5名の13名の生徒で構成されている。

本校中学部から進学してきた生徒たちは、中学部において作業学習を経験しており、その経験上、高等部の作業学習への見通しをもてることから、昨年度の校内実習を、将来の職場等を想像しながら自分を高める機会としてとらえやすいと考えていた。しかしながら、昨年度においては、中学部から進学してきた生徒の一人に焦点を当てて、キャリア発達段階表での評価を通して見たとき、目標をもって校内実習に取り組み、将来にむけてなりたい自分をイメージすることができたか、という疑問が残った。

一方高等部から本校に入学してきた生徒たちは、中学校では経験しなかった作業学習と校内実習を経て、将来の自分を見つめる機会を得た。高等部から本校に入学してきた生徒の一人を焦点化し、キャリア発達の視点からとらえたとき、生徒の課題自体、基本的なことから取り組んだせいもあるが、一定の成果を見た結果となった。

これらの取組を本年度につなげ、キャリア発達段階表を評価規準としながら、将来の余暇活動のイメージづくりや基礎体力の向上を目指す体育の学習活動における体づくり運動や、将来の生活につながる学習である現場実習を通して、生徒のキャリア発達を分析し、課題を教師間で共有する機会としたいと考えた。対象生徒は福祉サービスの利用を考えている生徒と一般就労を目指す生徒に焦点をあてて分析することとしたい。

イ 進路学習の取組

進路学習については、年度当初に1年次にたてた3年計画を引き続き取り組んでいくことを確認し進めてきた。その中で、2年次において必要なつけない力等も含めて確認して進めてきた。(表1)

1年次では、「自己理解・他己理解」から始めて段階を追って進め、「働くこと」についてのイメージがもてる所まで取り組んできた。また、現場実習の目的や先輩の実習先を紹介するなどの学習を行ったことで1年次の終了時点で、生徒たちは、自分の将来への意識が高まりはじめた。

2年生になり早速進路学習が始まった時には、ほとんどの生徒が進路に対する意識を継続して保つことができていた。初めて臨む現場実習の事前学習には、真剣に取り組む姿が多く見られた。

実習先を決めるにあたっては、個々の能力等から事業所をピックアップし、生活拠点や通勤の方法、準備物の確認、時間の設定等、様々なことを事前学習の中で確かめていった。生徒たちは、初めて社会に出ることへの緊張や不安で、精神的に不安定になったり、体調を崩しそうになったりと、気持ち面への支援も必要な状況であった。そんな中、バスやJRを一人で利用できるか、徒歩通勤ができるか、など一つひとつ確かめていくことで、安心したり一人でできたことが自信になるなど、少しずつ自立に向けて力をつけてきたと思われる。

2学期の現場実習を終え、今年度現場実習を2回経験したことで、生徒の大半は自分の将来の仕事について真剣に考える姿勢が見られだした。実習を通して、自分にあった仕事や自分がしたい仕事、苦手な仕事などが少しずつわかるようになってきた。また、将来のことについて家庭で話す機会も増えてきており、関心度の高まりも伺える一方で、失敗や忘れ物を指摘されることで作業に集中できなかったり、気持ちが不安定になり作業が難しかった場面もみられた。このような数々の困難があっ

た時に、その原因を考えることや、自ら「やってみよう」という気持ちを高めていき、困難を克服し、自信をつけていくことが今後の課題となってくる。

また、中には、「2週間の実習だけ頑張ればいい」という態度が顕著に表れる生徒もいた。普段の学校生活では、自己中心的な考えを貫き、自分の思うがままな態度をとったり、授業に参加しなかったりする。このような態度は、社会では通用しないことを在学中に学んでいなければならない。そのためには、社会生活とはどういうことか、社会に出るために必要なことは何か、などを具体的に示していく必要がある。

表1 進路学習を中心とした進路に関する年間指導計画 * 3年後を見据えた学習計画

総合（進路）	総合（性教育等）	生活単元学習	進路に関する行事等
自他の理解 人との関わり	生きる力（豊かな心・確かな学力・健やかな体）を身に付ける	●貯金学習	校内実習（1年生）
健康な生活	自分の体・清潔な体	●買い物学習	●現場実習（2・3年生）
働くこと	思春期の男女の違い	●調理実習	職場見学
●働くためには…？	思春期の心の変化	●学年農園	●福祉懇談会
●進路を考える	●異性との接し方●情報モラル教育		●夏休み体験実習（希望者）
社会人になるために	自己の将来		
まとめ（卒業したら）	性被害・加害の防止		

●印・・・2年次で取り組んだ内容

来年は最終学年になる。卒業時点で進路が決定するためには、普段の生活態度や人間関係、コミュニケーション等個々の実態と課題を明確にして、学校、家庭、寄宿舎、関係機関との連携を密に取りながら進めていく必要がある。また、生徒においては、日々の生活態度の見直しや自己判断の機会を経験するなど、いろいろな場面を想定した学習を通して、生徒自らの気づきを養っていきたいと考える。さらに、個々のキャリア発達段階の分析も行い、生徒一人ひとりの課題や特性を十分に活かしながら、自立生活や社会生活へのねらいを明確にしていくことも大切である。（表2）

生徒ひとり一人が、卒業後も生き生きと過ごせる場、力を十分に発揮できる職場を決定できるように、今後も取り組んでいきたいと考える。

表2 キャリア発達の段階における能力領域として位置づけられる項目（進路学習及び体育）

人間関係形成能力	異性との接し方と上手な付き合い方、社会的な関わりとコミュニケーション、他己理解と協調性
情報活用能力	就労への意識、公共施設の利用（マナー、社会のルール）、自己の特徴理解 情報モラル教育（犯罪・防犯・携帯電話・インターネット等）
将来設計能力	基本的な生活習慣の見直し、自立生活に必要な知識、福祉懇談、生涯スポーツ、一日の過ごし方と余暇活動
意思決定能力	生きる力、体得した能力を生かす力、自己の健康管理、自分の進路、進路先決定、卒業後の居住地、危険認知能力及び行動力

ウ 体育の取組

高等部では就労と自立に向けてキャリア発達の視点から様々な課題が挙げられ、それに対して各教科を通し、様々な取組が成されている。体育でも、進路実現をする上での体力の必要性や、卒業後の余暇活動の過ごし方、コミュニケーション能力を含めた他者との関わり方など課題を明確にしていきながら、解決に向けて取り組んできた。高等部2年生は、本年度も基礎体力の向上に向けて夏季は水泳、冬季は持久走に取り組んだ。加えて、「仲間との交流」に着目した内容として、年間を通じて「体

A	<ul style="list-style-type: none"> ・公共交通機関を一人で利用する。 ・挨拶、返事、報告ができるようになる。 ・分からないことは、自分から聞くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション能力が乏しく、新しい場所で、人間関係を築くことが苦手である。 ・分からないことがあっても、相手から声をかけられるのを待ったり、理解しないまま自分の思い込みで動いてしまうことがある。
B	<ul style="list-style-type: none"> ・忘れ物をしない。・時間を守る。 ・その場に合った言葉遣いができる。 ・挨拶・返事・報告をしっかりとる。 ・働くことの意味・重要性を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・色々な事に注意がいくってしまうということもあり、物の整理整頓が苦手 で、普段から忘れ物がある。 ・気持ちが高揚すると、自分の好きな話をずっとしゃべることがある。 ・身体を動かさずに、ひとつの場所で細かい作業を行うことは苦手である。

(イ) 生徒Aの場合

a 1学期の現場実習の様子

食品関係の仕事に携わりたいという本人、保護者の希望があったため、1学期の現場実習では、主に野菜の下処理を行っている就労移行支援B型の作業所で、実習を行うこととした。

実習では、自宅からJRによる単独通勤を行った。生徒Aは、一人で汽車に乗ったことはなく、保護者も不安を感じていたが、実際には汽車を使って問題なく通勤することができた。一人で公共交通機関を使って通勤できたことは、進路先の選択肢を広げるために重要なポイントとなり、本人の自信にもなったことだろう。実習では、野菜の下処理や計量、パック詰め、トレーのシール貼りなどを行った。この作業所では、スーパーの下請けを担っているため、決められた時間までに商品を仕上げなければならず、正確さと同時にスピードや様々な作業を次々となしていき臨機応変さが求められる職場でもあった。意欲をもって臨んだ実習であったが、初日から緊張感ある雰囲気は萎縮してしまい、返事の声も小さく、分からないことがあっても自分から積極的に質問することは難しかった。2週間実習を続けることで、挨拶、返事は言えるようになったが、それ以上に周りの人に自分から関わることはなく、表情も暗く、内にこもっているような様子だった。本来、生徒Aは、自分ができると思ったことに対しては積極的に行動できる生徒だが、1日の中でも仕事内容が次々と変わり、時間を見ながら臨機応変に判断し、スピード感をもって仕事をこなしていかなければいけない職場では、積極的に動きたい自分と、思うように動けない自分に戸惑い、自信を失っているように見えた。

b 2学期の現場実習の様子

2学期の実習先は、1学期と同じく就労移行支援作業所B型であるが、仕事の内容が明確で、動線、報告のタイミングなど、細かなことまでマニュアル化されている作業所を選んだ。また、JRを使った単独通勤を定着させるためにも、自宅から汽車を使って通勤することに継続して取り組んだ。

仕事内容は、決められた手順で不織布を折っていく個人作業と、わかめのカップ入れ、計量、袋詰めにライン作業で取り組む集団作業に分かれていた。作業場全体が静かで人との距離も適度に開いており、緊張感がある中でも、落ち着いて取り組める雰囲気であった。初日は、不織布を折っていく個人作業から取り組んだ。この作業では、不織布の折り方、できた製品を置く場所などが明確に決められており、自分のペースで取り組めるため、すぐに手順を覚え、落ち着いて取り組むことができた。実習2日目からは、集団での動き方を学ぶために、わかめのライン作業に加わった。この作業では、わかめをひとつかみ容器に入れる人、計量する人、袋詰めする人と担当が決まっており、1つの仕事を細分化していたため、個々の作業は単純であった。初めは緊張している様子が見られたが、仕事に慣れてくると、次の人が取りやすい場所にカップを置いたり、作業が遅れている人がいるとさっと手伝ったりと、周りの状況を見て配慮することができていた。実習中の表情もよく、笑顔で報告なども

できており、仕事に対する手ごたえを生徒自身も感じているようだった。しかし、細かい部分を見ていくと、周りから見ると完成度が低く感じることも、本人の中ではできていると感じており、自己評価と他者評価に開きが見られた。本人が完成のイメージを高くもち、精度を高めていけるような指導も必要であると感じた。

c キャリア発達段階表での分析

4月当初に、キャリア発達段階表で課題を検証し、2回の現場実習を終えて、キャリア発達段階表における課題の変化を検証した。Aのキャリア発達段階に変化はあったか、省みる。(表5)

表5 高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表(2016版)

		小学生		中学生	高校生	
キャリア発達の段階		生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期		職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期	
能力領域 ※1 ※2	観点	低学年で育てたい力	高学年で育てたい力	中学部で育てたい力	高等部で育てたい力	
人間関係形成能力(つながる力)	人間関係形成・社会形成能力(自己理解・自己管理能力)	人とのかかわり	認められたり、褒められたりすることにより自分の良さに気付く。	自分と相手の違いを知る。	現場実習における自分の能力や適性を知る。	
		集団参加	友達と仲良く遊ぶ。	集団の中でいろいろな友達とかかわる。	友達と協力して学習に取り組む。	いつでも、どこでも、誰とでもいろいろな活動が行える。
		意思表示	自分の意思を表現する。	日常生活に必要な意思を表現する。	集団の中で自分の意見を述べる。	自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える。
		場に応じた言動	身近な人に挨拶や返事をする。	自分から挨拶をする。	状況に応じた言動をする。	場や状況に応じた言動をする。
情報活用能力(みつける力)	課題対応能力(キャリアアプランニング能力)	様々な情報への関心	家庭の仕事に興味をもつ。	身近な仕事に興味をもつ。	情報を得るための様々な方法を知る。	図書やインターネットを活用し必要な情報を収集する。
		社会資源の活用とマナー	学校のきまりを守る。	公共施設の利用の仕方を知る。	公共の基本的なきまりを守って行動する。	社会の様々な情報やサービスを知る。
		金銭の扱い	やりとりを通してお金の扱いに慣れる。	お金の大切さに気づく。	お金の役割を知り、使い方がわかる。	生活の中のお金の使い方について理解する。
		働く喜び	大人と一緒に係の仕事をする。	自分の役割を果たす。	社会には様々な仕事があることを知る。	実習や職場見学を通して、働くことの意義を理解する。
将来設計能力(憧れてめざす力)	課題対応能力(キャリアアプランニング能力)	習慣形成	家庭や学校生活に必要な基本的な生活習慣を身につける。	職業生活に必要な基本的な習慣を身につける。	職業生活に必要な実践的な習慣を身につける。	
		夢や希望		身近な働く人に関心をもつ。	憧れとする仕事や夢をもつ。	自分が力を発揮できる仕事への関心をもつ。
		やりがい	時間いっぱい活動する。	時間やきまり、活動の手順がわかる。	好きな活動をもみ、自発的に取り組む。	余暇を含めて卒業後の生きがいを見つける。
		進路計画			将来の進路について考える。	将来の進路希望に基づいて目標を立てて努力する。
意思決定能力(かなえる力)	課題対応能力(キャリアアプランニング能力)	目標設定	自分のことは自分で行うとする。	自分のやりたいことを最後までやり遂げる。	自分で達成可能な目標を立てる。	将来の自分を考えて、卒業までの目標を立てる。
		自己選択	自分の好きな遊びや活動を選ぶ。		自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む。	実習を通して、将来やりたい仕事を選ぶ。
		自己評価	活動や一日の振り返りをする。		よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。	現場実習などでの自分を評価する。
		自己調整		嫌な気分になっても立ち直ることができる。	様々なトラブルに対する対処方法を身につける。	卒業後に想定されるトラブルや対処方法を知る。

※1＝国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」より ※2＝中央教育審議会答申(平成 23 年 1 月)より 平成 28 年度 4 月当初 →現場実習終了後

キャリア発達段階表で振り返ると、2 回の現場実習を終えて、情報活用能力の「社会には様々な仕事があることを知る」や、将来設計能力の「自分が力を発揮できる仕事への関心をもつ」、意思決定能力の「自分で達成可能な目標を立てる」「現場実習などでの自分を評価する」項目は、ステージがあがったことが分かる。特に、「自分が力を発揮できる仕事への関心をもつ」では、本人から「2 学期の仕事の方が自分には合っていると思った」との声が聞かれ、自分の力が発揮できる環境を把握し、適性を自覚できたことは、大きな成果ではないか。

また新たに身につけて欲しい能力として、人間関係形成能力の「友達と協力して学習に取り組む」「状況に応じた言動をする」、さらに意思決定能力の「実習を通して、将来やりたい仕事を選ぶ」項目が追加された。2 学期の実習終了後、作業所からの評価では、作業態度や持久力、作業遂行能力は「大変評価できる」となっていたが、作業場のコミュニケーションや職場への適応は「努力・配慮が必要」と評価されている。学校生活全体を見ても、コミュニケーション面では課題が残るため、卒業後、職場での円滑な人間関係を築くためにも取り組みたい課題として追加された。

(ウ) 生徒 B の場合

a 1 学期の現場実習の様子

1 学期の実習では、主に生姜の出荷準備を行っている一般の企業で実習を行った。通勤方法に関しては、学校から J R を利用して通勤をした。はじめての公共の交通機関を使っただけの校外での実習だったが、事前学習で J R の利用を 1 回練習すると通勤の仕方を覚え、スムーズに通勤することができた。作業内容は、出荷用の段ボールの組み立て、生姜を洗う作業、計量を行った。1 日目・2 日目は、ダンボールの組み立てを行った。作業自体は簡単であり、同じことの繰り返しなので、最後まで集中して取り組む力が必要な仕事であったが、中だるみすることなく、最後まで集中して取り組むことができていた。3 日目からはダンボールの組み立てに加えて生姜を洗う作業等を行った。作業内容が理解できない時には、自分から質問をして作業をすすめることができおり、周りの方とコミュニケーションを取りながら、新しい作業にも対応して取り組むことができていた。実習先の職員の方からは、「わからないままで作業することがなく、しっかり質問をして作業をしてくれるので助かっています。」と高い評価をもらった。2 週間を通して、新しい作業が加わっても理解できないことは、質問して理解してから作業を行っていたので、ほぼミスがなかった。挨拶、返事に関しては、1 週間目は、少し課題がみられ、挨拶・返事はできているのだが、元気がなく声が小さかった。はじめて行く場所で緊張もあったと考えられる。2 週間目からは本人が慣れたということと、中間反省会で課題を明確にし、目標を再確認することで、改善がみられた。忘れ物に関しては、実習ノート等で細かく確認を行ったが、名札を忘れる等の忘れ物があった。

最終的な評価は、実習先から大変高い評価をもらったので、本人にとって自信になったと考えられる。

b 2 学期の現場実習の様子

2 学期の実習は、病院のクリーニング業務を主に行っている一般の企業に行った。作業内容は、洗濯業務(洗い、乾燥、たたみ)、病棟への洗濯物・備品の配達準備及び配達を行った。通勤に関しては 1 学期と同様に学校から J R を利用して通勤を行った。経路は違ったが、1 学期に J R を利用しての通勤は経験しているので、スムーズに行くことができた。作業に関しても、校外の実習を 1 回経験して

いるので、実習に慣れたということもあり、作業内容をすぐに理解して、作業のひとつひとつを丁寧にすることができていた。本校の卒業生にも指導してもらったということもあり、あまり緊張することなく作業に取り組むことができた。今回の実習は、1学期と同じ一般企業での実習であったが、1学期と違い、洗濯業務、配達準備や病棟への配達など同じ作業が少なく複雑になっていたため、評価は1学期より厳しくなっていた。その評価の中で、課題も見えてきた。まず、忘れ物である。1学期と同様、実習ノート等で必要な物を確認し、さらに、その都度声かけ等の支援を行っていたが、名札を実習先にもっていつているのだが、付け忘れていた等、細かい所での忘れ物がまだみられた。挨拶、返事に関しては、挨拶はできているのだが、作業中の返事に関しては、声は出しているが、声が小さく、意欲が感じられないと評価があった。

実習先から、「自分をアピールし、周りの人に色々と気づきができる人になって下さい。」と評価があった。このことから、指示されたことに関しては、しっかりできているのだが、一緒に作業をしている人への細かい気づきがいあまりできていないことが考えられる。一般企業に就労を目指すにあたって必要な力なので、これからの学習活動の中で身につけていってほしい所である。

c キャリア発達段階表での分析

4月当初に、キャリア発達段階表で課題を検証し、2回の現場実習を終えて、キャリア発達段階表における課題の変化を検証した。Bのキャリア発達段階に変化はあったか、省みる。(表6)

表6 高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表(2016版)

キャリア発達の段階		小学生		中学生	高校生
		生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期		職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期
能力領域 ※1 ※2	観点	低学年で育てたい力	高学年で育てたい力	中学部で育てたい力	高等部で育てたい力
人間関係形成能力(つながる力)	人とかかわり	認められたり、褒められたりすることにより自分の良さに気付く。		自分と相手の違いを知る。	現場実習における自分の能力や適性を知る。
	集団参加	友達と仲良く遊ぶ。	集団の中でいろいろな友達とかかわる。	友達と協力して学習に取り組む。	いつでも、どこでも、誰でもいろいろな活動が行える。
	意思表現	自分の意思を表現する。	日常生活に必要な意思を表現する。	集団の中で自分の意見を述べる。	自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える。
	場に応じた言動	身近な人に挨拶や返事をする。	自分から挨拶をする。	状況に応じた言動をする。	場や状況に応じた言動をする。
情報活用能力(みつける力)	様々な情報への関心	家庭の仕事に興味をもつ。	身近な仕事に興味をもつ。	情報を得るための様々な方法を知る。	図書やインターネットを活用し必要な情報を収集する。
	社会資源の活用とマネー	学校のきまりを守る。	公共施設の利用の仕方を知る。	公共の基本的なきまりを守って行動する。	社会の様々な情報やサービスを知る。
	金銭の扱い	やりとりを通してお金の扱いに慣れる。	お金の大切さに気づく。	お金の役割を知り、使い方がわかる。	生活の中のお金の使い方について理解する。
	働く喜び	大人と一緒に係の仕事をする。	自分の役割を果たす。	社会には様々な仕事があることを知る。	実習や職場見学を通して、働くことの意義を理解する。

将来設計能力(憧れてめざす)	習慣形成	家庭や学校生活に必要な基本的な生活習慣を身につける。		職業生活に必要な基本的な習慣を身につける。	職業生活に必要な実践的な習慣を身につける。
	夢や希望		身近な働く人に関心をもつ。	憧れとする仕事や夢をもつ。	自分が力を発揮できる仕事への関心をもつ。
	やりがい	時間いっぱい活動する。	時間やきまり、活動の手順がわかる。	好きな活動をもち、自発的に取り組む。	余暇を含めて卒業後の生きがいを見つける。
	進路計画			将来の進路について考える。	将来の進路希望に基づいて目標を立てて努力する。
意思決定能力(かなえる)	目標設定	自分のことは自分で行うとする。	自分のやりたいことを最後までやり遂げる。	自分で達成可能な目標を立てる。	将来の自分を考えて、卒業までの目標を立てる。
	自己選択	自分の好きな遊びや活動を選ぶ。		自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む。	実習を通して、将来やりたい仕事を選ぶ。
	自己評価	活動や一日の振り返りをする。		よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。	現場実習などでの自分を評価する。
	自己調整		嫌な気分になっても立ち直ることができる。	様々なトラブルに対しての対処方法を身につける。	卒業後に想定されるトラブルや対処方法を知る。

※1＝国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」より ※2＝中央教育審議会答申(平成 23 年 1 月)より 平成 28 年度 4 月当初 →現場実習終了後

キャリア発達段階表で振り返ると、2回の現場実習を終えて、人間関係形成能力では、「自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える」「場や状況に応じた言動をする」のステージが上がっている。実習を経験することによって、生徒自体も社会人としてのコミュニケーションの取り方を学べたことは、大きな経験になった。情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力の3つに関しても、それぞれの項目でいくつか、ステージが上がっている。このことから、自身がまだ、卒業後の目標が明確ではなく、課題についてはある程度理解しているが、目標が定まっていないので、その課題にどのように取り組めばいいのかがわからない部分がある。これからの学習活動の中で、卒業後がイメージできるような活動を行い、目標を明確にし、その目標に向かって集中して取り組めるような環境作りが必要である。

オ まとめと考察

進路学習における学習内容をキャリア発達の視点から分析し、キャリア発達段階表を評価規準とし、現場実習を通して評価を行った。進路学習については1年次に立案した計画に沿って取り組み、事前学習や実習による実社会を経験したことで、生徒たちが自己の将来や適性を真剣に考える姿勢が見られだし、家族と卒業後の生活について話をするなど進路に対する関心も高まってきている。

また、本年度は卒業後の余暇活動を充実させることや就労活動を豊かにすることを目標に体育の授業で年間を通して「体づくり運動」に取り組み、進路実現に向けての体力の必要性を理解することができるようになり、友達と協調して活動することで人間関係を深めることも意識できるようになった。

さらに、2回の現場実習を通してキャリア発達段階表での評価を行い、4つの能力領域から分析し、生徒の実態と課題が具体化され教員間での相互理解が深まったと考える。現場実習の評価から見えてきた「新たに身につけてほしい能力」は学校生活全体で見ても課題となっており、教育活動全体の中で計画的に相互に関連付けながら取り組むことが必要とされる。

来年は最終学年となり、3年後を見据えた進路に関する学習も完成の年度となる。幅広い生徒の実態があり、課題に取り組む個人の成長にはそれぞれの特徴があると考えられるが、残る一年間で13人の生徒一人一人の将来の生活について「やりたい」「なりたい」という「願い」を大切にして、「将来の自立」に向けて一層の支援に取り組んでいきたいと思う。

(3) 高等部3年生における取組

「生活単元学習における仲間と協力し合い、お互いの頑張りを認め合う授業づくり

～行事に向けた取組を通して～

ア 取組にあたって

(ア) はじめに

高等部入学後の2年間は、卒業後につなげることに視点をおき、「卒業後の社会参加」をテーマに研究を行ってきた。「コミュニケーション能力の向上」「協力する態度の育成」を目指し取り組んだ結果、クラス内で友だちとコミュニケーションを図る場面が増えたり、リーダーシップを取る力の向上が見られたりするようになった。卒業を前にした3年目の今年、行事に向けた取組を通して「仲間と協力し合う」ことに視点をおいて研究を進めることとした。卒業後の社会参加においては、それぞれが何らかの形で協力し合うことは必要不可欠であり、そのためにはお互いを認め合うことが求められる。また、これまでの2年間の研究は学年での取組を主として行ってきたが、今年はより協力の場面が求められる学級という小集団に焦点をあてて取り組むこととした。取組を通して、お互いに関わり合って活動していることに気づき、友だちの頑張りと自分の頑張りにも気づかせるようにしていく。そしてお互いの存在意義を確認するとともに、卒業後の社会参加に向けて、コミュニケーション力や協調性も高めていく。

(イ) 学級の実態

高等部3年生は、本校中学部より11名、地域の中学校内の特別支援学級から12名、施設内の情緒障害特別支援学級から1名、今年度県外より転校してきた生徒1名で構成され、男子16名、女子9名の25名が在籍している。このうち、研究対象とする学級には、本校中学部より6名、地域の中学校内の特別支援学級から入学した2名で構成され、男子5名、女子3名が在籍している。

昨年度から同じ学級で学習を行っており、2名は指示理解力も高く一般就労を目指している生徒である。支援度の高い生徒をサポートする姿もよく目にする一方、少しのことで他者を拒絶し、態度に出してしまうことのある生徒もいる。又、支援度の高い2名は、ともに自閉症であり、言語コミュニケーションが難しいことが多いが、日ごろの学習活動ではモデリングや身体プロンプトを行うことで友だちと同じ活動をすることができる。また、残る4名のうち2名は自閉症であるが、自分のやるべき内容を理解し、見通しがもてると落ち着いて活動をすることができる生徒である。

これまでの生活単元学習でも行事に向けて製作活動を行うことが多かった。支援度の高い生徒であっても手先が器用で、細かなビーズを通すことができたり、布の裁断ができたりする。中程度の支援が必要な生徒においては、線やテンプレートに沿って縫製作業をすることができる。しかし、それぞれが実態に合わせて一人でできる工程を分担して仕上げているため、友だちが何を作っているか、どのような活動をしているかの関心が低くなる傾向があった。

(ウ) 対象生徒Aの実態

指示理解力が高く、一般就労を目指している生徒である。生徒会執行部としても活動するなど、リーダーシップを取ることができ、いつも笑顔で過ごしているイメージをもたれている。2年生からの現場実習でも毎回高い評価をもらうなど、一見社会性が高いようにもみられるが、学級内でのAは、意にそぐわないことがあるとすぐに不機嫌になり、表情や態度に出ている。また、自分が「嫌だ」と思っている友だちとはコミュニケーションを図ろうとせず、話しかける姿も必要最小限しか見ることができない。喧嘩をしたわけでもなく、「なんとなく」という理由や、支援度が中程度必要な生徒の独語や行動に対しても「うるさい」と拒絶することが度々見られる。Aは、小学校・中学校と人間関

係のトラブルから不登校となっていたが、友だちとのトラブルの解決方法や、気持ちの切り替え方がわからないことも不登校の一因であったと考えられる。また、飽きやすい性格で、手先は器用であるが製作活動においても1～2個仕上げると嫌になることが多い。キャリア発達段階表においては、高校生程度に該当しているが、本研究では「人間関係形成能力」や「意思決定能力」に焦点をあてて取り組む。

a 生徒Aのキャリア段階発達表

高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表 (2016版)						
※活用目的: 日々の学習や寄宿舎生活がキャリア教育のどの能力と関連しているのか確認し、系統的なつながりのある指導に活かす。						
キャリア発達の段階	小学生		中学生		高校生	
	生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期		職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期		職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期	
能力領域 ※1 ※2	観点	低学年で育てたい力	高学年で育てたい力	中学部で育てたい力	高等部で育てたい力	
人間関係形成能力(つながる力)	人間関係形成・社会形成能力・自己理解・自己管理能力	人とのかかわり	認められたり、褒められたりすることにより自分の良さ気付く。	自分と相手の違いを知る。	現場実習における自分の能力や適性を知る。	
		集団参加	友達と仲良く遊ぶ。	集団の中でいろいろな友達とかがわる。	友達と協力して学習に取り組む。	いつでも、どこでも、誰とでもいろいろな活動が行える。
		意思表示	自分の意思を表現する。	日常生活に必要な意思を表現する。	集団の中で自分の意見を述べる。	自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える。
		場に応じた言動	身近な人に挨拶や返事をする。	自分から挨拶をする。	状況に応じた言動をする。	場や状況に応じた言動をする。
情報活用能力(みつける力)	課題対応能力・キャリアプランニング能力	様々な情報への関心	家庭の仕事に興味をもつ。	身近な仕事に興味をもつ。	情報を得るための様々な方法を知る。	図書やインターネットを活用し必要な情報を収集する。
		社会資源の活用とマナー	学校のきまりを守る。	公共施設の利用の仕方を知る。	公共の基本的なきまりを守って行動する。	社会の様々な情報やサービスを知る。
		金銭の扱い	やりとりを通してお金の扱いに慣れる。	お金の大切さに気づく。	お金の役割を知り、使い方がわかる。	生活の中のお金の使い方について理解する。
		働く喜び	大人と一緒に係の仕事をする。	自分の役割を果たす。	社会には様々な仕事があることを知る。	実習や職場見学を通して、働くことの意義を理解する。
将来設計能力(憧れてめざす力)	意思決定能力(かなえる力)	習慣形成	家庭や学校生活に必要な基本的な生活習慣を身につける。	職業生活に必要な基本的な習慣を身につける。	職業生活に必要な実践的な習慣を身につける。	
		夢や希望		身近な働く人に関心をもつ。	憧れとする仕事や夢をもつ。	自分が力を発揮できる仕事への関心をもつ。
		やりがい	時間いっぱい活動する。	時間やきまり、活動の手順がわかる。	好きな活動を持ち、自発的に取り組む。	余暇を含めて卒業後の生きがいを見つける。
		進路計画			将来の進路について考える。	将来の進路希望に基づいて目標を立てて努力する。
意思決定能力(かなえる力)	意思決定能力(かなえる力)	目標設定	自分のことは自分で行うとする。	自分のやりたいことを最後までやり遂げる。	自分で達成可能な目標を立てる。	将来の自分を考えて、卒業までの目標を立てる。
		自己選択	自分の好きな遊びや活動を選ぶ。		自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む。	実習を通して、将来やりたい仕事を選ぶ。
		自己評価	活動や一日の振り返りをする。		よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。	現場実習などでの自分を評価する。
		自己調整		嫌な気分になっても立ち直ることができる。	様々なトラブルに対する対処方法を身につける。	卒業後に想定されるトラブルや対処方法を知る。

※1=国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」より ※2=中央教育審議会答申(平成23年1月)より

イ 研究計画

a なつまつりに向けての取組

学習時間	活動内容	ねらい
2 3	【なつまつりに向けて雑貨を作ろう】 ・昨年度のなつまつりの振り返り（1時間） ・今年のお店の内容決定（1時間） ・製作物の決定（1時間） ・雑貨作り（20時間）	・昨年を思い出しながら、今年の活動に興味関心をもつことができる。 ・友達と協力して活動できる。 ・時間いっぱい活動できる。 ・丁寧に作ろうとする意識をもつことができる。
1 4	【雑貨屋さんの準備をしよう】 ・これまでの準備の確認（1時間）※事例1 ・商品袋詰め、値札はり（3時間） ・看板作製（2時間） ・装飾準備および装飾（6時間） ・接客の練習（2時間）	・友達や自分の活動を知り、頑張りに気づくことができる。 ・言葉づかいに気をつけようとする意識をもつことができる。 ・友達と協力して活動できる。
4	【なつまつりを振り返ろう】 ・売上金、売上内容の確認（0.5時間） ・活動の振り返り（1.5時間）※事例2 ・打ち上げの内容確認（2時間）	・なつまつりで売れた商品がどのようなものか気づくことができる。 ・売上金の計算ができる。 ・打ち上げに向けて、意見を出し合うことができる。

b 学習発表会に向けての取組

学習時間	活動内容	ねらい
2 3	【学習発表会に向けて雑貨を作ろう】 ・なつまつりの振り返り（0.2時間） ・製作物の内容・担当決定（0.8時間） ※事例3 ・雑貨作り（22時間）	・ICT機器を活用して、情報を収集することができる。 ・友達や自分の役割を考えることができる。 ・友達と協力して活動できる。 ・時間いっぱい活動できる。 ・丁寧に作ろうとする意識をもつことができる。
5	【小物販売の準備をしよう】 ・これまでの準備の確認（1時間） ・商品袋詰め、値札はり（2時間） ・装飾準備および装飾（2時間）	・友達と協力して活動できる。 ・時間いっぱい活動できる。
1 4	【ステージ発表の練習をしよう】 ・歌唱練習（4時間） ・リズムパフォーマンス練習（5時間）	・友達と協力して活動できる。 ・自分の担当する楽器を演奏したり、演舞したりすることができる。

	・ 演舞練習（5時間）	きる。
4	【学習発表会を振り返ろう】 ・ 活動の振り返り（1時間） ・ 残っている商品の販売（1時間） ・ 売上金、売上内容の確認（1時間） ・ 打ち上げ内容の確認（1時間）	・ 学習発表会で売れた商品がどのようなものか気づくことができる。 ・ 売上金の計算ができる。 ・ 打ち上げに向けて、意見を出し合うことができる。

ウ 実践事例1「なつまつりに向けて準備をしよう」

a 仮説

友だちがどのような雑貨を作っているか、また一つのものをどのような工程で作り、どのように関わっているか具体物を見ることで、クラス全体で作りに上げていることを意識できるのではないか。

b 本時の目標

- ・ 友だちがどのような雑貨を担当して作ったか、気づくことができる。
- ・ 友だちや自分が頑張っているところを見つけることができる。

c 手立て

- ・ 製作活動を通じ、みんなで協力して雑貨屋さんをすることを確認する。
- ・ 一つの物を作る過程で、どのように自分や友だちが関わっているかを完成品と合わせて具体物で示す。また、次の工程の人に受け渡しを行う。
- ・ 打ち上げで何をしたいのか確認をし、目標をもたせる。
- ・ 友だちの様子をタブレットで撮影する係を設ける。

d 生徒Aの目標と評価規準

目 標	タブレットでの撮影者として、友だち一人ずつの頑張っていたところを発表することができる。
評価規準	友だち一人ずつの頑張っていたところを発表することができたか。

e 検証および成果と課題

生徒Aには雑貨を作る時間からタブレットで撮影する係を担当させた。タブレットは中学校まで使用していたこともあり、興味関心をもって取り組むことができた。また操作性も問題がなく、積極的に活動する様子がみられた。撮影者として友だちの様子に意図的に目を向けさせることで、それぞれが頑張っていることに気づき、発表することができた。また、ワークシートの記入では、概ね何を誰が作っているのか気づくことができていたが、細かな作業や短時間の作業であった生徒は気づくことができていない傾向がみられた。

生徒Aが撮影したものを含んだ画像や映像を使って、お互いの活動を振り返る活動では、それぞれが何の作品のどの工程を担当しているか、視覚的に分かりやすかったようである。

黒板では、名前を色別にしたカードを使用し、視覚でも判断できるようにしたことで、「同じ色ばかりではない（同じ人だけが作っているわけではない）」ということが分かった。学習活動の中では、生徒Aと指示理解力の高いHの話し合い活動の場面を設ける時間が少なかったことが課題となった。また、生徒の思考を促す時間も少なかったため、支援度が中程度の生徒にも思考を促す仕掛けをすることも課題となった。

f 生徒Aが記入したワークシートの内容

○は生徒自身が記入したもの、△は学習活動で気づき追記したもの

(現物では、A～Hは生徒の氏名が書かれたものを使用)

【誰が作ったか、考えよう!】							
1. ビーズとおし (ブレスレット、メガネストラップ)							
○A	○B	C	D	E	△F	G	H
2. ヨーヨーギルトのリース							
○A	○B	○C	○D	○E	F	△G	H
3. アイロンビーズのマグネット							
○A	B	C	D	E	○F	○G	△H
4. タイルと貝殻の写真たて							
A	B	C	D	E	○F	G	H
5. 貝殻のガーランド							
A	B	○C	○D	E	F	○G	H
6. つまみ細工のウォールポケット							
○A	B	C	○D	E	F	G	H
7. タイルのコースター							
A	B	C	D	E	○F	○G	H
8. リボンのヘアゴム							
○A	B	○C	D	E	F	G	H
9. ミサンガ							
△A	B	C	D	E	F	G	○H

エ 実践事例2 「なつまつりの振り返りをしよう」

a 仮説

映像を見ることで、活動を客観的に見ることができるのではないかと。また、友だちの活動を映像で振り返ることで、お互いがどのように関わっているか分かるのではないかと。

b 本時の目標

- ・どの製品が多く売れたか、気づくことができる。
- ・打ち上げに向けて、役割を考えることができる。

c 手立て

- ・活動をタブレットで撮影し、振り返りで見る。
- ・映像で友だちの頑張っていること、よかったことを確認する。
- ・何がどれくらい(いくら)売れたかを知り、打ち上げの計画を立てる。

d 生徒Aの目標と評価基準

目 標	<ul style="list-style-type: none"> ・売上金を計算することができる。 ・お互いの役割を考えることができる。
評価基準	<ul style="list-style-type: none"> ・売上金の計算ができたか。 ・友だちや自分の役割を、全体を考えながら発表することができたか。

e 検証および成果と課題

売上金の計算は、間違ふことなく生徒Aと生徒Hが協力して行うことができた。また、中程度の支援が必要な生徒も売れてなくなっている物を発表することができた。準備の様子や当日の様子を映像で振り返ったことで、それぞれが頑張っている姿を客観的に再確認することもでき、自分たちの活動を映像で確認することは「クラスみんなで頑張っている」ということを確認する上でとても有効であった。

打ち上げを計画する場面では、食べたいものや当初から目標としていた流しそうめんに入れる材料を、タブレットを使って検索した。どの生徒も興味関心をもって取り組むことができたが、ネットワークのトラブルがあり、1台使えず生徒が困惑していた。ICT機器を学習場面で活用する時には、ある程度の想定をして取り組む必要がある。

お互いの役割を考える場面では、どのような役割があるか他の生徒から発表されたものを、生徒Aにミニホワイトボードに書かせるようにした。ミニホワイトボードで掲示された役割を見ながら、支援度の高い生徒や中程度の支援が必要な生徒は教師が指名をして発表を促したり、挙手を促したりしてどの活動を行いたいのか発表をすることができた。生徒Aは自ら積極的に役割を考えることはなかったが、指名することで、友だちの役割や自分ができることなど、自分の考えを発表することができた。

オ 実践事例3「学習発表会で小物販売をしよう」

a 仮説

なつまつりの活動を思い出すことで、友だちの頑張りを再確認できるのではないかと。また、売り上げで何をしたいか事前に確認をすることで、クラス全体で協力して目標に向かうことができるのではないかと。

b 本時の目標

- ・なつまつりを振り返り、友だちや自分がどのように頑張っていたか思い出すことができる。
- ・タブレットを使って、自分が作りたいものを見つけることができる。
- ・お互いが担当できる工程を考えることができる。

c 手立て

- ・なつまつりで友だちが頑張ったと評価された映像を再確認する。
- ・販売したいものの検討がつかないときは、タブレットを活用して検索し、誰が作れるか、またどの作業を担当できるか、お互い考えるようにする。

d 生徒Aの目標と評価規準

目 標	・タブレットをつかって、作りたい雑貨を探すことができる。 ・製作物を見て、誰がどの工程を担当したらよいか、考えることができる。
評価規準	・タブレットで適切なキーワードを入力して検索することができたか。 ・製作物を見て、誰がどの工程を担当したらよいか、発表することができたか。

e 検証および成果と課題

なつまつりの活動を再確認する活動では、口頭では質疑に答えられない生徒も、映像を見ることで「これしたよ」と、思い出すことができ有効であった。また、打ち上げについても最初に検討しておくことは、生徒の意欲を高める手段としてとても有効であった。打ち上げ内容の検討は、教師の想定したほど活発に意見交換はなされなかったが、生徒たちで「お鍋をする」という目標を考える

ことができた。最初になつまつりの活動を再確認したことで、学習発表会に向けても「クラス全体で」頑張るという導入につながり、以後の製作活動にもつながった。

タブレットで作りたいものを検索する活動では、今回もネットワークトラブルが起こってしまった。前回あったトラブルについては事前に確認をしていたが、また別の想定外のトラブルがあり、生徒が時間を持て余してしまう場面があった。今後、ネットワークが全く使えない状況も想定しておくことが課題となった。生徒は検索するキーワードをヒントに出すことで、自分たちで検索し、作りたいものを画像から選ぶことができた。リースやブーツ型のオーナメントなど、実際に製作活動につながったものもあり、検索した生徒にとっても達成感があったのではないかと思う。生徒Aにおいては、色々迷ってしまい、授業時間内に作りたいものを見つけることができなかったが、その後の休み時間にも継続して探すことができた。自分で必要な材料や道具を考え、タブレットを見ながら作品を仕上げていくことができた。

お互いの役割を考える過程では、日頃の様子から生徒Aと生徒Hは意見交換ができると想定していたが、実際には参観されている緊張もあり、あまり意見交換ができていなかった。しかし、「切る」「貼る」など、どの作業があるかを示し、教師が生徒Aを指名することで意見を発表することができた。



図1 生徒Aが検索して製作したフェルトコサージュ



図2 協力して製作したヨーヨーキルトのリース

カ 取組を終えて

映像を使って振り返る活動は、どの場面においても有効であった。また、生徒Aに撮影者の役を与え、意図的に全体を見るよう促したことは、自分だけが頑張っているのではなく、みんながそれぞれ頑張っているという気づきにつながったのではないかと思う。実際、生徒Aにおいても友だちとのコミュニケーションに変化がみられるようになった。以前であれば必要以上に話しかけなかった友だちに自分から話しかける場面があったり、「嫌だ」とする友だちの忘れ物を快く寄宿舎まで届けに行ってくれたりするなど、最初から拒絶するということはなくなっている。また、2学期には友だちともトラブルがあったが、苛立たしさを態度に出してしまう場面も少なくなった。これは、表面上は上手に付き合うことができるという、生徒Aの特性が良い意味で活かされてきたことによるものと思われるが、一方で我慢しているストレスも相当あった。今後はそのストレスをどのように解消していくかということが課題となってくる。社会参加に向けては、この点が重要となってくることであり、トラブルが起きたときにどのように対処していくか、ストレス解消も含めて残りの学校生活で一緒に考えていきたいと思う。

本研究では、学習活動の中でタブレット端末を活用する場面が多かった。しかし、インターネットを使う場面においては、度々トラブルが起こった。想定されるものに対しては対処することがで

きるが、想定外のことが起きることを想定して事前準備する必要があると痛感した。

行事に向けての取組はこれまでも行ってきた活動であったが、実態に合わせて個別に活動していることが多く、友だちの活動まで目を向けることができていなかった。今回の取組を終えて、全体で頑張っている、その一員であるという自覚をもたせることは、生徒の意欲向上につながると感じた。

キ 終わりに

キャリア教育に視点をおいた研究の3年目である今年は、より「社会参加をするために必要な力」を意識して取り組んだ。事例として3つを発表したが、実際には日頃の学校生活からのアプローチも重要になってくると感じている。また、コミュニケーションについての取組は学級だけでなく、学年などの広い範囲での取組が大切であると考えられる。教師間で情報を共有し、意図した仕掛けを様々な角度から行うことは、よりよい社会参加を想定した取組となり、生徒にとって色々な考えや意見を聞くきっかけにもつながった。

3年間を通じて「仲間作り」から「お互いを認め合う」活動を行ったが、どの生徒も高等部入学時に比べて大きな成長を見ることができている。生徒Aは、入学時には学校外の活動には一切参加する意欲を示さなかったが、現在ではマラソン大会など、自分があまり好きではない活動にも積極的に参加するようになった。他の生徒でも、入学時には度々クールダウンを必要としていた生徒が、学級活動にもほとんど参加できるようになっていたり、気持ちの切り替えが上手くできなくて、度々一人で泣いていた生徒が、今ではほとんど泣くことがなくなっていたりする。どの生徒にも共通することは、社会参加という大きな目標を掲げて頑張ってきた成果であるということだと思う。

今後の社会参加でもお互いを尊重し合い、それぞれの場所で頑張ることを願いたい。

4 おわりに

高等部1年生は、キャリア教育の領域である人間関係形成能力に焦点をあてて仲間づくりをテーマに実践を行った。1年生の実態から、対人関係に弱さがあったり、複数の友達と関わりながら協力をすることが難しかったりする生徒がいることや、地域の学校からの生徒と本校からの生徒との初めての集団構成であること等があり、仲間づくりの難しさを感じた。課題の柱は、小集団からの仲間づくり、障害の特性や個性に合わせた生徒への支援、不登校の生徒への連携や支援、タブレットの活用である。

これらの課題に対して、クラスでの取組や、行事という生徒がなじみやすく興味や関心をもちやすい活動を通して実践を行った。活動を通して、生徒達は少しずつコミュニケーションをとることができ、仲のよい友達や、集団における存在意義をもつことができた。来年度は、進路や学部の中核を担う学年として育つために協力しあえる学年として成長できるようにしたい。

高等部2年生では、進路学習、体育、現場実習の取組から、キャリア発達を促してきた。

進路学習では、働くことのイメージをつけることから将来への前向きな意識の高まり、そして、社会での実際的な学習を行ったことで生徒達は将来について、真剣に考えることができた。体育では、進路実現をするための体力づくり等を行った。

現場実習では、生徒事例により実態と評価を行った。現場実習を経験して将来設計や意思決定等のステージが上がり、将来への展望がもてたことは、正に主体的に学んだと言えるのではないかと。そして、キャリア発達段階表を活用しながら、教員間での、授業内容や生徒理解に対する共通理解をもてたことも3年次につながる成果だと思う。

高等部3年生は、生活単元学習の行事に向けた活動から、生徒事例を通し、「コミュニケーション能力の向上」と「協力する態度の育成」を目指した取り組みである。協力や協調して物事を行うことは、就労等の社会参加にとっては、不可欠である。

手だてとして、友達の活動に気づいたり、頑張りを見つけたりすることから始め、それをワークシートによって視覚化させて、発表により、言語化させる。これらの一連の手立てにより、クラス全体で取り組んでいるという連帯意識をもたせることができ、意欲の向上につながった。また、タブレットを活用して、生徒の実態に合わせた手だてができた。

今年度は、人間関係形成能力に関する課題への取組が多かった。社会性や協調性を身につけることは、社会参加を考える上で重要になる。それらは、行事等の体験的学習から学ぶことは多いが、生徒がより主体的になるためにも、考える力やまわりの出来事に気づく力・自身の行動を振り返り次への意欲につなげること等、発達段階に応じた内面的な成長が必要なのだと改めて思った。

情報活用の点では、情報化の時代と言われて久しく、生徒の中には、スマートフォンを持ちSNSでのコミュニケーションを楽しむ生徒も増えつつある。ICTの活用ということは、生徒も興味をもちやすく、分かりやすい授業になるためにも、更に推進していく必要がある。

また最近では、労働機関、学校においてはスクールカウンセラー等、進路やその他の問題に対して多くの関係機関と連携ができるようになってきている。それらも活用していきたい。

さて、高等部では、「進路につながるキャリア教育の実践」と題してキャリア教育の充実を目指し、学年事の課題に沿って3年間の取組を行ってきた。これらの成果を踏まえて、今後も生徒の将来が一人一人の夢や希望につながるような実践を続けたいと思う。

VI 寄宿舎の研究

寄宿舎テーマ「豊かな寄宿舎生活を目指して～生活の中で育ちあう性と生～」

1 はじめに

寄宿舎では、近年の子どもたちを取り巻く環境の変化や一人一人が直面している性の問題へ適切に対応していくために、平成25年度に「性の支援部」を立ち上げて実践してきた。26年度、27年度は継続して性の支援を重点的な研究課題とし、実践をもとにした研究活動にも取り組んだ。実践研究を積み重ねるとともに、性に関する研修を毎年行っていく中で、性の支援の対象となる内容は多様であり、生活との結びつきが強いこと（性＝生）に改めて気付かされた。この2年間に実践した内容や研修内容を振り返ると、性の支援は体のしくみや性交といった限定的なものではなく、広く生活に関する正しい知識やスキルに関わるもののほか、自己理解や他者理解を深め、将来の生きる力や生き方、ライフキャリアへとつながっていくものであることがよく分かる（表1）。

性の支援がキャリア教育の上でも重要課題であるという認識のもと、ホーム実践の中に性の支援を根付かせ、寄宿舎教育の質を高めていくためにも、性の支援の位置づけを検討していくことが昨年度の課題として上がった。そこで今年度から、寄宿舎生活支援計画の中に性の支援を盛り込むとともに、ホーム年間支援計画を作成することとなった。

寄宿舎生活支援計画は個人の支援課題・内容を「生活・健康」「自治活動」「文化・余暇活動」の3領域の視点からまとめたものである。この3領域の中で性の支援と関連が深いと思われる「生活・健康」領域の中に、性の支援を位置づけることとした。

表1 昨年度までの実践内容と研修内容（抜粋）

実践内容	<p>【平成26年度】 命の誕生／相手の気持ち／コミュニケーション／人との距離感とプライベートゾーン 自分の身体／身だしなみ／デート／生理／妊娠と出産／性交（避妊）</p> <p>【平成27年度】 歯と口の健康／プライベートゾーン／ストレス発散法／おしゃれと身だしなみ</p>																
研修内容	<p>昨年度寄宿舎研修会で提起された内容 講師：鹿野佐代子先生（大阪府障害者福祉事業団：ファイナンシャルプランナー）</p> <p>【性の支援のねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・性の問題は生活と直結している。性を生活として捉える。 ・地域で暮らすことを早い時期から想定して支援していく。 ・学校教育で身に付けたことは、人生の中でほんの一部であり、社会に出たときに役立つスキルを伝える。 <p>【対象者の発達段階や生活年齢に応じた展開と内容】</p> <table border="0"> <tr> <td>①エチケット／マナー</td> <td>⑤余暇活動</td> <td>⑨ポルノグラフィティ</td> <td>⑬災害</td> </tr> <tr> <td>②お金の使い方</td> <td>⑥一人暮らし</td> <td>⑩出会い・恋愛</td> <td>⑭健康観</td> </tr> <tr> <td>③携帯電話</td> <td>⑦考え方・価値観</td> <td>⑪結婚</td> <td>⑮死生観</td> </tr> <tr> <td>④犯罪行為</td> <td>⑧異性への関心</td> <td>⑫出産・育児</td> <td></td> </tr> </table>	①エチケット／マナー	⑤余暇活動	⑨ポルノグラフィティ	⑬災害	②お金の使い方	⑥一人暮らし	⑩出会い・恋愛	⑭健康観	③携帯電話	⑦考え方・価値観	⑪結婚	⑮死生観	④犯罪行為	⑧異性への関心	⑫出産・育児	
①エチケット／マナー	⑤余暇活動	⑨ポルノグラフィティ	⑬災害														
②お金の使い方	⑥一人暮らし	⑩出会い・恋愛	⑭健康観														
③携帯電話	⑦考え方・価値観	⑪結婚	⑮死生観														
④犯罪行為	⑧異性への関心	⑫出産・育児															

ホーム年間支援計画は個人の生活支援計画の“ホーム全体版”とでもいうべきもので、生活支援計

画と同様の3領域を中心とした様式となっている(表2)。これによって、ホームの集団指導と個別支援を関連づけることができ、指導員間でホーム実践の方向性やねらいについての共通理解を深めることができるようになっている。これらの取組によって、性の支援の位置づけが明確になることはもとより、性の支援も含めて集団指導を個別支援に反映した形で生活支援計画を作成することが可能となると考えている。

性の支援を研究課題として3年という節目を迎え、これからの性の支援のあり方を方向付けていけるよう、今年度の実践をまとめていきたい。

表2 ホーム年間支援計画<試案>

日高義護学校寄宿舎 平成()年度 ()ホーム年間支援計画<試案>		
基本方針	① 寄宿舎の教育的機能を生かし、子ども達に生きる力を育てるため、学部及び家庭との連携を密にした支援の充実に努めます。 ② 家庭的雰囲気の中で、仲間と共に生きる喜びを共有し、生活・社会自立を目指す力を育てます。	
重点目標	①学部、寄宿舎、家庭との連携の強化。②自立に向けた生活支援。③健康安全指導の推進。④自治活動の充実。⑤防災教育。⑥性の支援。	
舎生の実態	・舎生の障害や特性、疾病等を含め、当該年度のホームの舎生集団の実態。 ・舎室編成するうえでの配慮事項(障害特性、歴年齢、相性、又2フロアーに分かれている場合に生活の基礎集団の捉え方等々)。	
支援方針	年間方針	
	1学期	
	2学期	・上記、基本方針と重点目標を達成するための方針の具体化。 ・寄宿舎生の実態にもとづき、ホームとして特に焦点化するべき方針。 ・下記の「生活領域」での活動を行ううえでの集団の編成や支援方針。
	3学期	
生活領域	支援内容・方法・ねらい<A表>	ホーム年間支援計画<B表> (支援内容・方法・ねらい・グループ編成・期間)
生活・健康	<p>○健康に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障害特性や疾病等への配慮、服薬(自覚、習慣化)、生活リズム(睡眠・覚醒) <p>○基本的な生活習慣の確立に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近自立に関する課題 ・日課の位置づけや見直し ・集団生活の中での舎生同士の育ち合いの保障 <p>○生活スキルに関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通院、散髪、自動車免許取得、自活訓練等 ・寄宿舎内での実践に留まらず、地域との関わりも視野に置く <p>○性の支援に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・舎生の想いや悩みを話せる関係や環境づくり ・日常生活の中での継続した支援と設定した場面での支援 ・ホームでの個別支援とグループ支援 	<p>ホーム年間支援計画は、ホームの一年間の指導の設計図となるもの。 (子どもサイドではなく、指導員の指導の視点や手だて・方法)</p>
	<p>○ホーム会・役員会に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達理解や仲間としての集団づくり、生活づくり <p>○係り活動に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・週番活動、掃除、洗濯、会食配膳 <p>○行事に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ会、舎外学習 <p>○防災係りの会に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習会 	<p><A表>の取り扱いについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A表は、各生活領域の解説と考える。 ・毎年度当初に、目標や取り組み内容について全体で確認する。 ・年度末に各ホームで総括し、次年度のA表に反映させ、目標や内容の見直しを行うことで、寄宿舎教育の中身づくりを蓄積させる。 ・また、各生活領域の項目分けが実際に合っていないなどの疑問点に対しては、意見の反映が必要。 <p><B表>の取り扱いについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・B表は、A表の「○○に関すること」全ての項目毎に支援計画を作成するのではない。 ・その年度の寄宿舎生の実態に応じて、何を大切にしたいホームづくりを行うのか、また、各ホームのカラーも含めて作成する。
自治活動		<p>A表とB表を作成し、毎年度見直しを行うことで、寄宿舎実践の構造化(体系づけ、系統立て)を図る。そして、そのことが生活支援計画作成の際、より個人の課題や目標を鮮明に捉えることにつながる。</p>
文化・余暇活動	<p>○余暇活動に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個々の舎生の意欲や興味を大事にした活動の発展 ・集団遊びや共通する文化スポーツ活動を通じた仲間づくり ・何もしないのんびりした時間を過ごすという選択肢の保障 <p>○社会資源の活用に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・舎外活動(買い物、外食、遊び、校外散歩等)地域社会との関わりを大切にする 	
と、学舎連携	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳、ホーム便り、保護者懇談 ・ケース会、学舎懇談会、3者懇談会 ・その他(関係機関との連携等) 	

2 実践事例

(1) 全体の取組

昨年度の性の支援の取組として1学期は舎生の実態把握、2学期は卒業記念品製作として「世界にひとつだけの記念品を作ろう」と題して高3生が写真撮影を自分たちで行い、それをストラップにして記念品を作った。3学期には夕食の時間に他ホームとの交流会として「夕食コンパニー」を行った。子どもたちにも好評で普段は見られない姿が見られ、楽しみながら食事できた。

今年度も昨年度の取組を継続して行うとともに、年度当初に実施した保護者アンケートを参考にし、支援が必要な項目（挨拶など）をもとにDVDを作成した。そして、子どもたちと映像を見ながらO×ゲーム形式で確認を行った。

また、夕食コンパニーでは高等部が中心の回が多いため昨年度の反省をもとに小・中学部を中心とするお楽しみ会を兼ねた「おやつコンパニー」を行った。寄宿舎の中庭で宝探しゲームをした後、おやつをみんなで一緒に食べて他ホームとの交流を行った。お天気も良くシートの上でのんびりと過ごす時間もあり、子どもたちの楽しそうな笑顔も見られた。

各ホームでもそれぞれの課題に応じた取組を行ってきた。（表3）

表3 平成28年度 性の支援年間指導計画

	月	全体	はと	つばめ	すもも
1 学期	4			友だちと仲良くするために	
	5	しゃべくりKニュース第1号発行		現場実習に向けて	
	6		(1)女性との付き合いについて話し合おう	水虫に勝つぞ	入浴指導
	7	夕食コンパニー①（七夕バージョン） しゃべくりKニュース第2号発行	(2)将来のビジョンについて考えてみよう		
	8				
2 学期	9			身体の清潔と住居の洗い方について	キッズエアすもも（3月まで）
	10	夕食コンパニー② おやつコンパニー	(3)身だしなみとおしゃれの違い (4)洗濯講座①		生理のマナー
	11	「世界にひとつだけの記念品を作ろう」 しゃべくりKニュース第3号発行	洗濯講座②	友だちとの距離感について考えよう	
	12	夕食コンパニー③（クリスマスバージョン） しゃべくりKニュース第4号発行	洗濯講座③ 洗濯講座④		ブラジャーの別定
3 学期	1				DVD鑑賞（身だしなみ、あいさつなどについて）
	2	夕食コンパニー④（卒業生バージョン）			メイクアップ講座
	3	知っておくとトクすること（卒業生説明） しゃべくりKニュース第5号発行			

(2) はとホームの取組

ア 舎生の実態と研究課題

今年度のはとホームは、新しく小学部1名、中学部2名、高等部2名の新入舎生を迎え、小学部2名、中学部7名、高等部14名の計23名でスタートした。

実態としては、活発な子どもが多く、毎日自転車や散歩、体育館でサッカーやバドミントンをして

過ごしている。また、部屋で寝転がってのんびり本を読む子やゲームをする子、CDを聴いて静かに過ごすことが好きな子もいる。

性に関する支援では、トイレの入り口でパンツを脱ぐ、おしりを出して排尿をするなど『トイレのマナー』や、破れたシャツや黄ばんだシャツを着ている、寝癖を気にしないなどの『身だしなみ』、イライラしたときに暴言を吐く、執拗に誰かに近づいていくなどの『友だちとの関わり方』、自動車免許を取りたい、一人暮らしがしたいなどの『将来のビジョン』というように、個々により様々な課題や目標がある。

そのため、『トイレのマナー』や『友だちとの関わり方』などは個別に継続した支援を行い、『将来のビジョン』や『身だしなみ』については、5人程度の小グループの会をもち、意見を出し合いながら一緒に考える機会や情報を提供する機会をつくった。その小グループでの実践について紹介したい。

イ 実践事例

(ア) 第1回『女性とお付き合いについて話し合おう』

参加した5名中3名は彼女がおり、デートでどこへ行けばいいかわからない、1日に何十回も一方的にメールを送るなどの悩みや課題がある。そのため、指導員が作成したロールプレイビデオを観ながら、①連絡先を聞く②デートに誘う③デートプランをたてる④失恋⑤親に紹介の5つのステップに分け、自分ならどうするか感想や意見を出し合った。

舎生の様子は、興味がないと言いつつ目の前で話を聞いて質問に答える子や、ノート持参でメモを取る子、目を閉じて耳を塞いで警戒態勢をとり途中退室する子もいた。

指導員からは、友だちや親、先生、指導員、職場の同僚など悩んだときに相談できる人を見つけておくこと。失恋したときは諦めることも大切で、辛い気持ちを乗り越えて大人になっていくなどの助言をした。

ロールプレイビデオの場面



第1回⑤ 両親と談笑している様子

(イ) 第2回『将来のビジョンについて考えよう』

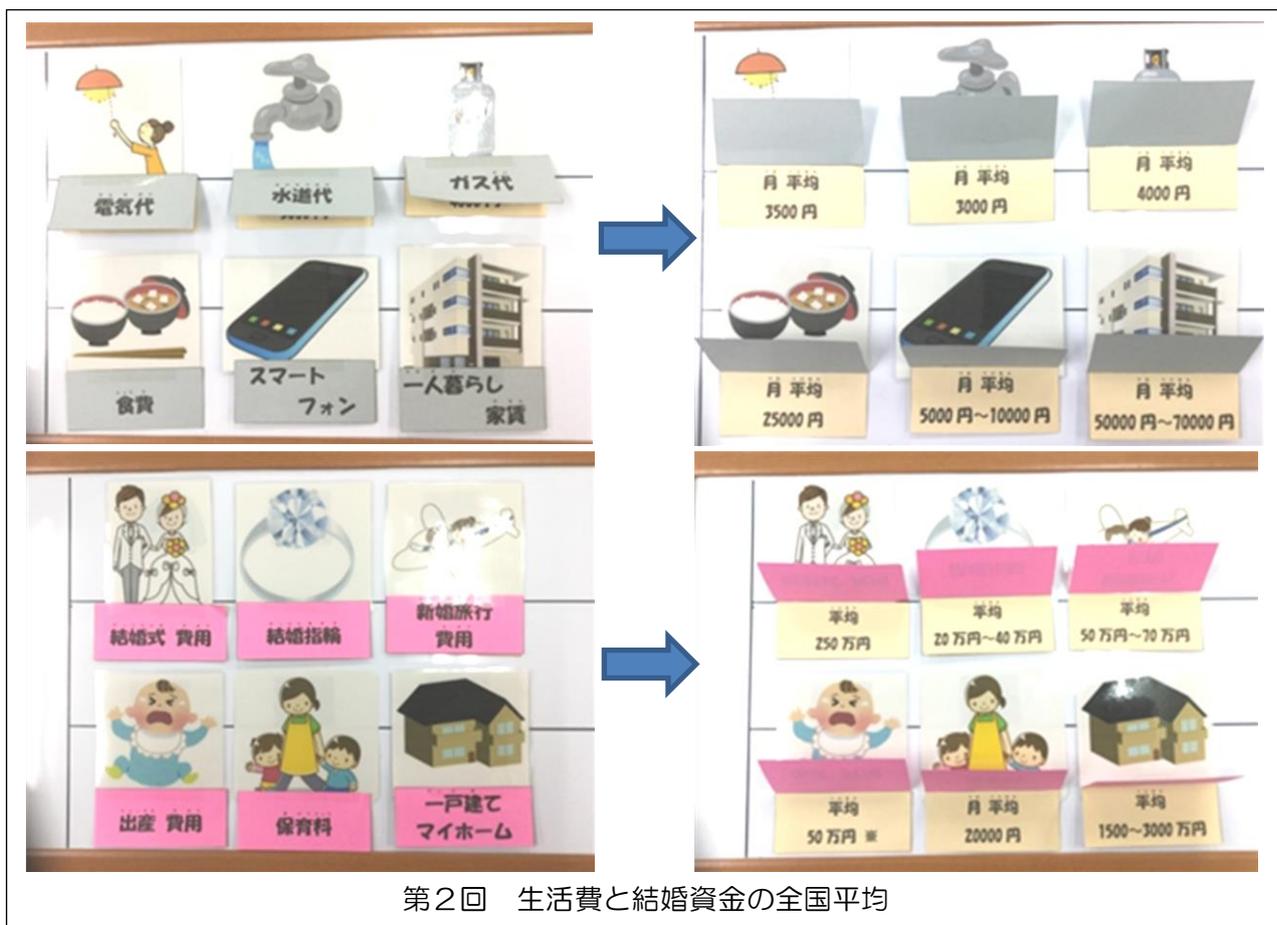
参加者は高等部2・3年生の3名で、一人暮らしや結婚に興味関心がある子どもを対象に行った。

①将来どんな仕事がしたいか?②給料は月にいくらもらいたいのか?③一人暮らしをするための資金はいくら必要か?④結婚するための資金はいくら必要か?⑤必要なお金をどのように準備するか?をクイズ形式で進めていった。

おもちゃのお金を卒業後にもらえる給料に見立て、一人暮らしや結婚、出産の費用に充てていくシミュレーションをし、次々と減っていくお金を見て、貯金をすることの大切さや計画的に使うことの必要性を感じることができたのではないかと思う。

子どもたちからは、「お金が足りん」「ちょっとでも貯金したほうがよい」などの感想が聞かれ

た。結婚・出産にはお金だけでなく、大きな責任が伴うこと、困ったとき・悩んだときは信頼できる人に相談することが大切であることを伝えた。



(ウ) 第3回『身だしなみとおしゃれの違い』

3ホーム合同しゃべくりKの『世界にひとつだけの記念品を作ろう』での撮影会の事前学習として高等部3年生の5名を対象に行った。

身だしなみは、場面によって変わるが、『清潔感』はいつも重要であること。その中でも①お風呂に入る②顔を洗う③歯を磨く④髪の毛を整える⑤髭を剃る⑥清潔な服や靴を身につけるなどを質問形式で進めていった。

現場実習で、校外に出て仕事を体験してきた後の会だったため、参加した舎生は、話が入りやすく気軽に意見や質問が出せる雰囲気になっていた。おそ松さん6人がそれぞれ違う服を着た絵に興味をもったり、清潔感について意見を言ったり、「撮影会の衣装は、おしゃれと身だしなみのどちらで行けばいい？」と質問する舎生や、後日行われた撮影会の前に、自分で選んできた衣装を指導員に見てほしいと相談にくる舎生もいた。

助言として、身だしなみは、【人のため】で努力をすれば身につくことで、おしゃれは、【自分のため】で自分のセンスで好きなものを身につけること。身だしなみが整っていないことで、相手に不快感を与えたり、常識を知らない人と思われたり、それだけで仕事を任せてもらえないことや、好き



第3回 身だしなみ

な人に嫌われることもあると清潔感の重要性を伝えた。

(エ) 第4回『洗濯講座』（全4回）

中・高等部生を対象に、発達段階によって2グループに分け、①洗濯とは②洗濯の干し方③洗濯物の乾き具合④タンスに仕分けの4回の講座をそれぞれ行い、1回参加するごとにスタンプを押すスタンプラリー形式にし、4個貯まると本人の願いが叶うという楽しみをつくり、ゲーム感覚で進めていった。

汗をかいて1週間洗っていないTシャツや、洗濯して干していないシャツを使用し、洗剤・柔軟剤・漂白剤の実物を見せて説明し、雨の日と晴れの日の洗濯物の干し方について一緒に考えた。



第4回 洗濯物の干し方

また、タンスの仕分けでは、下着・靴下・シャツなど整理されたタンスと、されていないタンスを写真で見比べながらイメージしやすいよう支援した。

10分～20分の短時間で、わかりやすい内容だったことや、スタンプラリーの効果もあり、会には消極的だった舎生も意欲的に参加することができた。会の翌週には、友だちと2人で話し合って柔軟剤をもって来る子もいた。また、「21:30までゲームがしたい」「好きな女性指導員と10分間話したい」「別の部屋の友だちや男性指導員と一緒に寝たい」などの願いも叶えられた。

ウ まとめ

第1回から第3回の会は、性の支援部が中心となって実施し、第4回の洗濯講座は、自治部の指導員が中心となり計画を立てて実施した。また、個別の支援については、生活支援計画から中心目標を1つ～2つ抜き出し、A4用紙1枚にまとめて引継ぎ簿に綴じた。そうすることで、舎生23名の中心目標をいつでも確認できるようにし、引継ぎやホーム会で経過や支援内容について話し合った。

小グループの会では、指導員が役割分担をしながら、個別では指導員全員で行うことで、幅広い支援ができるようになった。

また、こうした会をきっかけに、日常生活のなかで子どもから指導員に相談してくる場面が出てきた。第1回の会で途中退出した子も、今では複数の指導員に恋愛話をしてくれるようになり、他にも異性のことや自動車免許のこと、友だち関係で困っていることなどを相談してくる子どもが増えてきた。一人で悩み、相談しにくいことも、みんなで集まり意見を出し合うことで、日ごろの生活の中でも気軽に話せるきっかけになったのではないかと考える。

舎生たちの相談内容で、友だちとの関わりや将来の悩みなどについては、個別に時間をとって話を聞くようにし、寄宿舎生活に関係することについては、ホーム会に提案してみんなで考えるように支援を行った。それにより、「朝、走りたい」「つばめホームの子と一緒に風呂に入りたい」「僕もやりたい」など、今までホーム会で発言をしなかった子どもが自分の意見をみんなの前で伝える場面も見られるようになった。そのため、ルールを決めてできる限り希望を叶えられるようにし、子どもたちが安心して楽しく生活しながら、主体性が伸びていくよう努めている。

今後の課題としては、話し合いの会では一方的に指導員が話をすることもあり、子どもたち同士が意見を出し合える工夫や、会の中で内容を充分理解できずに意見を言えなかった子どもへの個別の支

援、専門性の向上などたくさんある。日常生活の中で子どものサインに気づき、気持ちに寄り添えるように指導員間での話し合いや細かな引継ぎを大切にしていきたい。

(3) つばめホームの取組

ア はじめに

今年度のつばめホームの舎生数は小学部2名、中学部5名、高等部11名の計18名である。昨年度に引き続き、子どもたちが安心して過ごせる居場所となるような雰囲気づくりをホーム運営の重点とし、子どもたち一人一人の実態に応じた指導・支援を行っている。生活グループも引き続きハート、スペード、ダイヤ、クローバの4つとなっている。

グループごとの実態

ハート	基本的な生活習慣がほぼ自立しており、ホーム行事の計画・進行や当番活動などを仲間と協力して取り組んでいるリーダー的存在のグループ。
スペード	基本的な生活習慣はほぼ自立しているが、生活態度や言動が自己中心的な傾向が強く、集団生活の中で友だちを思いやる気持ちを育てている最中のグループ。
ダイヤ	人と関わることは好きだが、コミュニケーションが上手に取れないために支援や配慮が必要なグループ。
クローバ	危険認知が難しいなど、安全面を含めて生活全般に支援の必要なグループ。

4月初めのホーム会で、新年度になったこともあり、自治部から寄宿舎での生活やきまりについてのオリエンテーションを丁寧に行なった。そのこともあり、新入舎生をはじめ、みんなが新しい生活を楽しくスタートすることができた。もともとハート・スペードグループは係や当番活動などの生活の様々な場面でリーダーシップを発揮してくれる高等部生を中心に編成されていたが、高3生が抜けた穴を埋める形でそれぞれが以前よりも自覚をもって、気持ちよく新しい係や当番活動に取り組む姿に頼もしさが感じられた。4名の新入舎生を迎え、そのうち中学部生2名と高等部生1名は本校通学生だったこともあり、在舎生の中には「〇〇くんが来たの～!？」と喜ぶ様子が見られた。また、今年度から本校へ入学し、入舎したもう1名の高等部生も、緊張した様子であったが、友だちや先輩たちが温かく楽しく接してくれる中で、すぐに周囲と打ち解けることができた。新しい仲間を気持ちよく迎え、全体的に楽しく和気あいあいとした日々を過ごすことができている。

こうしたホームのよい雰囲気を保つとともに、集団生活での個々の成長へとつなげていくため、仲間の大切さとお互いを思いやる気持ちの大切さを理解する力をつけることを目標とし、年間を通じたホーム全体の性の支援として取り組むように指導員間で確認した。昨年度実践事例として就寝前に振り返りの時間を設定して支援を行っていた子どもについても、引き続き継続的な支援を行い、子どもたち一人一人の心の安定を図り、前向きに学校生活を送られるような支援に努めている。

イ 全体的な舎生の実態と課題（一学期を中心に）

新入舎生の高等部生2人は、兄弟がいないこともあってか、4月当初から小学部生を弟のようにかわいがり、相手をしてほしそうなときには「おいで」と声をかけ、テレビを見るときも膝の上に乗せて一緒に見るなどしていた。また、新入舎生を中心とした中学部・高等部生の遊びには昨年度とは違った様子が見られるようになった。特撮やアニメのヒーローが好きなメンバーがテレビ室に集まると、誰ともなしに戦いごっこが始まり、その様子を見ていた周囲の子どもたちも自然と遊びの輪の中へと入っていくことが多かった。

小さい子に対して優しく接してくれ、楽しく活発に遊ぶ姿が見られるとともに、気になるところも徐々に見えてくるようになった。一見、小学部生の面倒を見ているようで、必要以上に身体を触って

その感触を楽しんでいる。そっとしておいた方がよいときにしつこく関わろうとするなど関わり方が一方的で不適切なところがあった。戦いごっこについても、夢中になりすぎて興奮して終わることができず、延々と続けたり、力加減ができなかったり、明らかに痛い思いをしているのにやめると言えない、言われてもすぐにやめられない、といった場面が多く見られるようになった。

こうした人との関わり方についての問題は新入舎生以外にも日々散見され、例えば相手の機嫌や場面も気にせずしつこく付きまとう、自分がされたら嫌なことを相手にする、相手が嫌がることを分かっているということが多かった。とくにハート・スピードグループのメンバー内でこのような傾向をもつ者が多く、基本的に仲が良い者同士でもトラブルになることがしばしばあった。指導員が間に入り、した方への指導を行うとともに、された方の気持ちが落ち着くように話を聞くことで支援を行った。そうすることですぐに謝ることができ、お互いにどうすればよかったのかを考えることはできていた。それでもまた同じようなトラブルが起こることから、いけないことと分かっている、その時々相手の様子や状況に合わせて行動することが苦手なために、些細なことからトラブルに発展しているように思われた。

その都度繰り返し指導を行うことで、大きな問題が起こることもなく一学期が終わろうとしていたころ、余暇時間に戦いごっこの中で高等部生が中学部生をふざけて投げ飛ばし、危うく机の角に頭をぶつけてしまいそうになることがあった。また、高等部生が就寝時間になって部屋へ戻るときに、ふざけて興奮したある子が、近くにいた子の手を引っ張り自分のプライベートゾーンを触らせることもあった。ふざけていたとはいえ、大きなケガにつながる可能性があったことや、自分勝手に思いやりのない行動を目にする事態が重なったため、ホーム会を開き、危険な行為やプライベートゾーンに関して厳しく全体指導を行った。

以上のように、基本的には仲がよいながらも、ホーム全体的に人との関わり方に関する課題や困難を有する子どもが多く、生活の中で問題が起こった際の日々の対応以外にも、特別な場面や時間を設けて人との関わり方について考え、なぜそうしないといけないのか学ぶ機会が必要と思われた。一学期に行った性の支援に関する保護者アンケートでも、ホーム全体のこうした傾向を象徴するかのようになり、人との関わり方に関する項目への記入が多かった。

そこで、こうした舎生の実態とアンケート結果をふまえ、かつ一学期の指導と継続性のある取組を二学期中に実践することとした。

ウ 研究課題

つばめホームでは以前、性的な関心に起因した問題があったことをきっかけに、自分と他者のプライベートゾーンを大切にすることを一貫して子どもたちに伝え続けている。しかし、先に述べたようなことから、改めてその大切さについても理解させる必要があると考えられた。小学部生との関わりや戦いごっこの場面では当然身体の接触があり、プライベートゾーンに触れていないにせよ、相手の状態や反応に注意を向けられず、ケガにつながりそうな場面もあった。また、ハート・スピードグループのメンバー間に見られるしつこい関わり方などについてもそうだが、周りが見えておらず自分本位で相手に合わせて行動することが困難なことから、総じて人との距離感の理解とそれを意識した行動に課題があると考えられた。

そこで、プライベートゾーンとも関連性があり、自分と他者の適切な距離を保つ上で大切なことから、パーソナルスペースを題材にして取組を行うこととした。パーソナルスペースは単に自分と他者の物理的な距離を表しているだけではなく、それをどう感じるかという心理的な要素があり、相手の立場や気持ちを考えることへもつながるのではないかと考えられる。取組の対象は、特に人との距離

感について気がかりなメンバーの多い中学部生のグループとハート・スペードグループとした。

エ 実践事例

(ア) 中学部生への実践

a 実践内容

中学部生の実践内容は以下通りである。

中学部の舎生の実態と実践内容のまとめ

テーマ	友だちとの距離感について考えよう	
目的	他者との距離を知り、ふさわしい態度・感情・行動がとれるようになる。	
日時	平成 28 年 11 月 24 日 (木) 19 : 00~19 : 30	
対象者	中学部 5 名全員	
内容	<p>※スライドをもとに以下の内容について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パーソナルスペースとは ・実際に保つべき距離を知る ・相手のスペースに入ると起こりうる事例 ・どうしても距離が近づく場面と対処を考える ・プライベートゾーンの確認 ・守らなくてはいけないルールの確認 ・まとめ 	<p>スライドの一例</p>
	舎生の実態	実践の様子
A君 (中 2)	興奮すると言葉がけが入りにくい。ふざけて相手に手を出すことがあるが、力加減ができない。自分がやられたときにやめると言えない。	真剣に話を聞き、距離が近くなったときの危険性や対処について意見を言うことができていた。適切なスペースの幅を両手で示し、見当をつけることができた。
B君 (中 2)	人との距離感に課題があり、体が接触するくらい友だちに近づいて話すことや、ボディタッチもある。A君同様にやめると言えない。	周囲のことに意識が向いてこちらの話を集中して聞くことができていない様子だった。短くまとめた説明でも理解が難しいようで、何度も質問をしてきた。
C君 (中 3)	戦いごっこの中心メンバーで、興奮すると言葉がけが入りにくい。指導員が用事をしていても遊びの延長で手刀を打ち続けてくることがある。	A君同様に話をよく聞き、距離が近くなったときの危険性や対処について意見を言うことができていた。戦いごっこで気を付けたらよい点を自分から述べた。
D君 (中 3)	距離感の理解がやや困難で相手や場面に合わせて距離を保つことが難しい。自分のやりたいことやペースを乱されると不安定になりやすい。	指導員の質問にA君とC君の様子を窺いながら答えていたが、相手と距離が近くなったら離れたらよいと答えられていた。最後まで落ち着いて参加できた。
E君 (中 3)	言葉でのコミュニケーションが困難。C君とは小学部のころから一緒に常に付き添ってもらったほどの親しい間柄である。	話の様子を後方から画像撮影していた指導員の iPad に反応して立ち上がっていた。話の理解は困難なので、同じ中学部の仲間として参加する形となった。

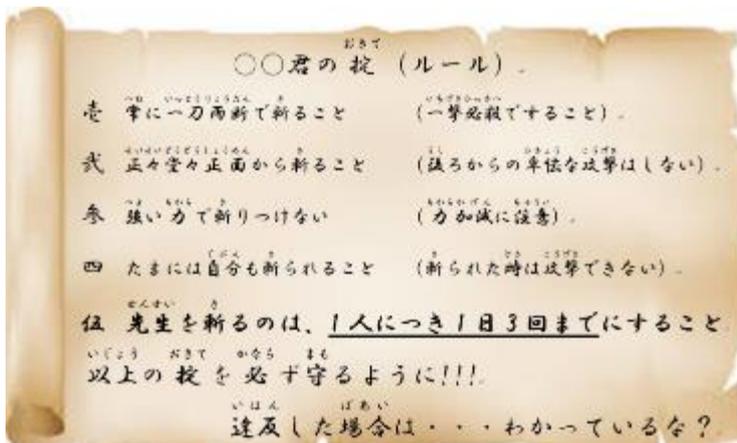
b 考察 (中学部生)

中学部は話をしたときの様子から、A君とC君についてはおおよそ理解ができたのではないと思われる。相手のスペースに入りすぎた場合に考えられる反応や危険性についても自分で考えた意見を述べることができていた。寄宿舎生活の中での相手と距離が近くなる場面やそのときの対処もよく分

かっていた。2人とも余暇時間の遊びの場面などでは、楽しくてやや興奮気味になると周りが見えず、指導員の言葉がけに反応しにくいところがあるが、今回のように落ち着いて集中できる時間と環境の中では、しっかりとこちらの話に耳を傾け、真剣な態度を示すことができていた。D君はA君とC君に同調するような形でこちらの質問に答えていたが、もともと人との距離感の理解に困難を有するので、話の内容が難しかったかもしれない。しかし、離席することもなく最後まで落ち着いて話を聞くことができた。この3名については、大切なことを伝え、理解させる上で、今回のような場面設定が有効であると思われる。

E君は言葉でのコミュニケーションが困難なので、本人に理解させるというよりも、同じ中学部の仲間として周囲に配慮してもらうためという意味合いが強い結果となった。B君は当日体調不良で欠席だったため、後日個別に時間を設けて話をしたが、説明を短くしても理解がしにくいような反応が見受けられた。自分の身の回りのことなら何をすべきか分かりやすいようで、一度伝えるとできるようになることもあるが、今回のような本人にとって難しい内容については、端的に何がいけないのか示すとともに、実際の場面でその都度自分や他者の行動について考えさせることを重ねて、知識と経験が結びついていくような指導・支援が必要と思われる。B君は理解の難しさからそのような方法がよいと思われるが、他の子ども自分で気をつけて行動でき、かつプライベートゾーンと同じように大切なことと意識していけるよう、生活を通じての継続的な指導・支援が必要である。

また、戦いごっこの中心メンバーであるC君については、遊びの延長で指導員が用事をしていようと何度も手刀を打ち続けるので、相手の気持ちや状況の理解が苦手なところが一学期を通じて気がかりな点であった。そこで、グループの取組とは別に限度が分かるように、担当指導員が中心となってルールを決め、二学期から一日3回までならいいよと個別に話をしている。ルールの文言は「〇〇君の掟」と名付けて紙にまとめ、保護者にも連絡帳を通じて紹介したところ、面白いですねと返事を頂いている。本人の遊び心に共感しつつ、楽しみながら指導している様子が保護者にも伝わっているようである。それ以降C君は「まだ〇回目！」と言いながら、そうしたやりとりも楽しみつつ行動をコントロールするようになっていく。



(イ) ハート・スペードグループへの実践

a 実践内容

ハート・スペードグループの実践内容は以下の通りである。

ハート・スペードグループの舎生の実態と実践内容のまとめ

テーマ	友だちとの距離感について考えよう
目的	他者との距離を知り、ふさわしい態度・感情・行動が取れるようになる。 プライベートゾーンを確認し、お互いが気をつけあえる関係になる。
日時	平成28年11月29日(火) 19:10~19:50
対象者	ハート・スペードグループ8名
内容	※中学部とほぼ同様。

	舎生の実態	実践の様子
F君 (高1)	小学部生に一方的な関わりをすることがある。自分の言動がどういう結果につながるのかという見通しに課題がある。指導員に甘えて抱きついてくる。	距離が近づく場面について意見が言えた。また、プライベートゾーンの具体的な場所言うことができた。
G君 (高1)	しっかり者だが、思い込みやそのときの気分が行動面に表れやすい。力加減が分からず、ふざけて相手にケガをさせそうになったこともある。	発言することはなかったが、話が聞けていた。
H君 (高1)	一人で余暇時間を過ごすことが苦手で、常に自分の気持ちがよくなる相手に付きまとう傾向が強い。その時々での気持ちや内面が行動面に表れやすい。	話は聞けていたが、どこまで理解ができているかは分からない。自分に関する事例の内容は話を真剣に聞き、意見も言っていた。
I君 (高2)	根は優しいが、思ったことがすぐに言動に出てしまう。力加減ができず、友だちや指導員に飛び付いてくるなど、自他ともにケガをしそうな場面もある。	距離が近づく場面や対処について意見することができた。時間を気にしていたが最後まで話を聞くことができた。
J君 (高2)	趣味に強いこだわりがあり、周囲の関心や状況とは無関係に話す事がある。興奮すると口調が荒くなるので、言い方がトラブルの元になることもある。	距離が近くなった時の危険性について意見を言うことができた。私語をしている人に強い口調で注意し険悪なムードになりかける。
K君 (高3)	優しく面倒見が良い。嫌なときには相手に言えるが、強く言えないときは自分から距離を取ることができる。	真剣に話を聞けていた。距離が近づく場面について意見する。
L君 (高3)	優しく面倒見が良い。後輩に優しく接し相談相手になる場面も見られる。	意見をすることはなかったが、最後まで真剣に話を聞けていた。
M君 (高3)	好きな友だちにしつこく付きまとい、一方的に話しかけることがある。戦いごっこにもよく参加する。力加減ができていない。	プライベートゾーンは、日ごろの振り返りで理解をしており、知っていると言ひ話をうなずいて聞く。

b 考察 (ハート・スペードグループ)



ハート・スペードグループについては二学期以降、小・中学部生が就寝してからの過ごし方がやや騒々しい場面が見受けられるようになっていた。二学期は全体的に行事が多く、その前後での高揚感や解放感もあってのこととは思いますが、静かに過ごしたくて距離をとっている者のところへ付きまとい、就寝時間になっても友だちの部屋の前に居座るなど、仲間のプライベートな時間や空間への配慮においてメリハリに欠けるところがあった。そうした様子もふまえて話を進めることにした。

対象者全員が高等部生ということもあり、ある程度理解できた人が多かったと手応えを感じている。相手のスペースに入ってしまったときにどのような危険性があるのか、数人が自分の意見を述べることができた。パーソナルスペースはお互いが身を守るための距離である説明をする中で、日ごろ指導員に飛び付いて抱き付く姿を例に挙げると、ハッと表情が変わる者が何人かいた。自分は楽しくても相手は嫌がっているかもしれない、楽しいことに夢中になって相手に接近しすぎているといった、日ごろの自分たちの行動を振り返る必要性を伝えた。相手から離れてと言われてしまったときは、自分が近づきすぎている、相手が嫌がっていることに気づかなくてはいけないし、自分が楽しいことを優先して相手に対して怒ったりすることは、自分本位な行動で間違っていることを強調した。

寄宿舎において距離が近づく場面や対処についてはそれぞれが意見を述べることはできたが、寄宿舎以外での場面では意見が出てこなかった。身近な場面以外の生活経験の不足と、それを背景とした想像力に課題があると考えられる。

プライベートゾーンについては、学校でも学習していることから、具体的な場所についてすぐに意見が出た。その中で、友だちの部屋の前で居座ることも相手のプライベートゾーンへ立ち入っていることを夜間の過ごし方に照らして具体的に説明を行った。全体的に自分のこととして受け止め、一定の理解を示していたように思われる。話の内容をよく理解しているようだが、このような人との関わり方についての知識をふまえて実際に行動するという、知識と経験の結びつきにやはり課題があると考えられた。また、指導員に対して抱き付いてくることを例に挙げたところで、ハッとした表情になったことから、自分の行動が適切かどうかを客観的に見つめることに困難があるように思われる。

そのことに関して、取組の直後、J君は共通の趣味の事で高3生をしつこく追いかけて話しかけ、部屋の入り口に立って話を続けていた。相手のスペースに入りすぎているよと注意しても、そんなことは関係ないと強く反発し、火が点いたように怒り出すことがあった。J君に個別に話を聞くと、相手の持ち物に強い関心があり、我慢できずにしつこくしてしまっただった。指導員の注意の意図は伝わらず、行動を制止されたという印象だけが伝わり、我慢の上に我慢を強いるように受け止められたのだろう。怒りの感情とともに家庭や学校であったトラブルの記憶が想起され、自分でもどうしたらいいのか分からないほどの興奮状態になったようである。

H君も一人で余暇時間を過ごすことができず、人間関係でのトラブルや本人の思い込みを引きずり、愚痴を聞いてくれそうな人や自分の味方になってくれそうな人に手当たり次第に付きまとうことが度々ある。相手の状況や時間に関わらず、一緒にいてほしい人の部屋に立ち入ろうとする傾向が強い。J君やH君のように、パーソナルスペースを含めた人との関わり方とは別に、個人的に解決できていない悩みなどの心理面と、周囲と折り合いをつける力に困難を有することを背景として、関わり方に問題がでてくるケースについても、取組や支援の工夫が必要だと感じている。

オ 全体的な考察とまとめ

(ア) 継続的な取組の重要性について

4月初めのホーム会で自治部が主導して寄宿舎生活のオリエンテーションを行なったことは冒頭でも述べた。その中で、これから一緒に生活する仲間を大切にしてほしいという願いから、ポカポカタッチとトゲトゲタッチと称して、いろいろな場面の絵を示しながら、人との関わり方の良し悪しについての判断をさせる時間を短いながらも設けた。その後日、指導員に対してふざけて嫌なことを言ってしまった子どもがおり、注意をしていると、「あ、トゲトゲやったね…」とホーム会で話した内容をふまえて自分のしたことを振り返ることができていた。短い時間でも、指導員が真剣に話した内容はそれなりに残っていると感じた瞬間であった。それでも年度を通して同じような人との関わりに関するトラブルが繰り返し起こることが多かった。

やっつけいけないことへの認識がまだまだ未熟なためとも思われるが、指導員側としても、目標や取組に沿った日々の対応に不十分な点があったのかもしれない。個別であろうと、グループであろうと、話した内容を一度きりのものとせず、指導員としても、子どもたちと一緒に取り組んだことを継続していく姿勢が弱かったのかもしれない。プライベートゾーンと同様に、今回取り組んだパーソナルスペースについても、その文言をこちらが日々の生活の中で意識して使い続けていかなければ、子どもたちの心の中には残っていかないだろうし、人との関わり方について考える要素として機能していらず、同じことが繰り返されていくことになるだろう。そう考えると、4月に行ったポカポカタッ

チとトゲトゲタッチの取組は、継続性が弱かったと反省している。

一方で、小学部生への一方的な関わり方が気がかりな子に対しては、指導員のホーム会で対応を検討し、「上手に遊んでくれているね、ありがとう！」「嫌がっているからやめてあげて！」といった言葉がけをその都度行い、その関わり方が適切かどうか分かるようにフィードバックしていくことに努めた。また、小学部生が喜ぶような遊びの中にも、例えば肩車のようにお互いのケガにつながる危険があるという注意喚起をホーム会で行った。こうした日々の積み重ねによって、小学部生への一方的な関わりはかなり減少しており、不安定なときには「〇〇くんは何かあったが？」と気にかける姿も見られるようになった。戦いごっこについても同様で、以前に比べて力加減ができるようになり、指導員の言葉がけにすぐに応えられるようになってきている。関わり方が適切かどうかをその都度示していくことはハート・スピードグループの取組の様子からもその重要性が窺えることから、仲間への配慮の大切さを認識するためにも、継続していく必要があると思われる。

加えて、中学部生やハート・スピードグループのメンバーの中には、自分の気持ちや思いをしっかりと主張することが苦手で、嫌なことをされても「やめて」と上手に言えない子もいる。こうした子どもたちに対しては、嫌な関わり方をされた際の具体的な対処について、声に出して練習するなどのロールプレイの場面も必要ではないかと考えている。

(イ) 今後の性の支援の充実に向けて

J君やH君のように表面的な問題とは別に背景となる要因がある場合には、その背景を読み解いた上での対応が必要なため、日々の対応や取組を継続していく上でも、指導員間での共通理解が一層重要である。問題があっても不安定になっても、冷静になれば自身の行動を振り返り、前向きに物事を考えることができるので、そのために思いや気持ちを十分に聞いた上で、関わり方について指導するという丁寧な対応が望ましいだろう。

しかし、人との関わり方も含めて、子どもの問題行動の背景に生育環境が大きく影響していると思われるケースについては、ホームの指導員全員が日々の対応に苦慮している。二学期に入ってから、家庭の問題が色濃く顕在化してきた子どももおり、日常的な学校・寄宿舎の連携に加え、スクールソーシャルワーカーを交えた相談の場を設けた。

家庭の問題が考えられるケースについては、得てして本人の障害特性に加え、二次障害的特性が自己防衛反応のように行動や情緒に強く表れやすいように思う。叱られることが多かったことによる大人への不信感、認められる場面が少なかったことによる自己肯定感の低さ、自分に向けられた言葉に過剰に被害意識を持ちやすいこと、些細なことでフラッシュバックが起りやすいことなど、子どもの言動から二次障害の困難さを感じる場面が少なからずある。そうした特性が人との関わりを通じた社会性の獲得に著しく影響していることも考えられる。

人との関わり方も含めた自分のことや約束事について、指導員と一緒に振り返る時間が必要な子どもに対しては、昨年度の取組を継続して行っている。そのこともあって不安定になっても落ち着くまでの時間が少しずつ短縮され、不安や悩みを引きずって大きく生活態度が崩れるということも少なくなってきた。家庭の問題が子どもの問題行動に影響している場合には、こうしたカウンセリング的な対応が、思春期という成長の大きな局面にあることも含めて、その子らしさを認め、自己肯定感を回復し成長へとつなげていくための性の支援として、今後はより一層重要になってくるのではないかと感じている。

(4) すももホームの取組

ア 舎生の実態と研究課題

今年度のすももホームは、中学部3名、高等部1名の新入舎生と高等部1名の転校生を新しく迎え、小学部2名、中学部6名、高等部13名の計21名でスタートした。1学期末に中学部生1名が転校し、2学期からは20名の舎生がともに生活をしている。

昨年度は自分の気持ちを上手く伝えることができず、自傷行為をしてしまう子どもたちに少しでも寄宿舎の生活が楽しく送れるように、また卒業後に余暇時間を有意義に過ごせるよう指導員が得意分野を活かして、2学期から文化教室としてカラオケやヘアメイク教室、ミサンガ作りなど様々な教室を行った。それぞれ希望者も多く好評であったので、今年度も引き続き不定期に文化教室を行うことにした。

また卒業後を想定し働くことの大切さや喜びを疑似体験するため、すももホームで日常行っている係り活動や掃除などを「仕事」として位置づけし、合わせてすももホームの通貨「TURU」を作り月毎に給料（歩合制）がもらえることにした。

子どもたちはその「TURU」を使って文化教室やホームのお楽しみ会、フリーマーケットなどの参加を楽しんだ。今回の実践集録ではこれらの取組についてまとめてみた。

イ 実践事例

(ア) キッザニアすもも

目的・・・係り活動などの自治活動に対するやる気を育てる。

仕事の疑似体験をする。

内容・・・①「掃除」②「係り活動」③「お手伝い」④「個人ミッション」

給料・・・歩合制（がんばった分、支給される）

期間・・・9月1日（木）～フリーマーケットまでの約21週

その他・・・すももホーム内通貨を「TURU」とする。

準備物・・・TURU紙幣 TURUチェック表（個別） すもも銀行通帳（個別）
個人ミッション表（各部屋）

日程	内容	開催時間	備考
9/13	桃鶴百貨店（駄菓子屋）	15:00～	多目的ホール
10/4	桃鶴百貨店	15:00～	多目的ホール
11/29	桃鶴百貨店（プチ・フリーマーケット）	15:00～	行事室
2月予定	桃鶴百貨店（フリーマーケット）		多目的ホール

すももホームでのみ通用する仮想通貨「TURU」紙幣を作成した。毎日活動表にその日にできたことを指導員がチェックし、達成した○の数により「TURU」紙幣を給料として配布し（○ひとつにつき100TURU）、実際どれだけ「TURU」がたまったかを各自が確認するようにした。仮想通貨や通帳を使用することは難しいのではないかと思っただが、ゲームの世界には仮想通貨があり、寄宿舎内でフリーマーケットを体験したことのある舎生にとって「TURU」通貨は理解しやすかったようである。ホーム会のときに支払われる「TURU」紙幣の給料と通帳をいくらたまったか友だちと確認しあったりする姿がみられた。

活動表の中に、各自の年間支援計画から短期目標の中で今一番身につけさせたい目標を個人ミッションとして取り上げることにし、子どもの細かい部分にも気を配ることができた。表を各部屋に掲示したことで舎生同士の意識づけになった。

舎生の中には当番活動をしていない舎生もあり、毎日のチェックの○の数に差ができる。指導員各自にそれぞれ「TURU」を割り当て、各指導員個人が日常生活の中でどの舎生にも「TURU」を加算することができるようにし、このことで当番活動している舎生としていない舎生との差が開き過ぎないように配慮した。



写真1 桃鶴百貨店・くじ引きの様子



写真2 「TURU」給料日の様子



写真3 プチフリマーケット



写真4 プチフリマーケット

参加したい文化教室や欲しい物のために目的を持って「TURU」をためる舎生もいれば文化教室にも「TURU」にも関心のない舎生もいる。それでも自分の活動表に毎日○がもらえるのがうれしくて「今日はできたかな」とチェックをしてくれるのを心待ちにしていた。

毎日の「TURU」チェックは自習の時間に各室で指導員と一緒にしているが、同室の舎生もいるため評価も気になり真面目に取り組む姿が見られ、周りにもよい刺激になっているのか「○○ちゃん掃除してたよ」と子どもたちからの報告があることもある。日課の中に組み込むことで定着してきつつある。

(イ) すもも文化教室

目的・・・余暇活動の充実。友だちと楽しい時間を過ごす。自己決定能力を育てる。

その他・・・参加料として「TURU」を支払う。

文化教室一覧

日程	内容	開催時間	備考
9/13	桃鶴百貨店(駄菓子屋)	15:00～	多目的ホール・風呂場
	駄菓子屋(風呂場) ダイソーにてお菓子、シャボン玉、消しゴム、鉛筆、パズルなどを買って棚に陳		

	列した。(100、200、300TURU) フリーマーケットに出す靴や帽子をディスプレイして、事前に商品を見られるようにした。カラオケ(多目的室) 1曲 100TURU		
9/15	すもも美容室	17:00～	行事部屋
	参加者4名。参加料300TURU ポスターを掲示。ヘアアレンジをして行事に参加しようと呼びかける。 ヘアゴム、ヘアピン、スプレー、リボン、カチューシャなどを準備する。		
10/4	桃鶴百貨店	15:00～	多目的ホール
	くじ引き 番号くじ ・紐くじ ・ドリンクバー 参加料各100TURU		
	すももの湯	16:30～	風呂場
	人数制限あり。入浴剤。参加料100TURU 前半の入浴者は敏感肌及びすももの湯に入らない子の入浴時間とし、後半に入浴剤を入れてすももの湯を行う。参加者にはチケットを配布し、入場の際持参する。 またBGMを流し雰囲気作りを行った。		
	健康オタククラブ	19:00～	1Fテレビ室
	参加者7名 参加無料 ・「ヨガ」整腸作用があるポーズをレクチャーする。 基本呼吸法は鼻から吸って口で吐く。各5呼吸。 *夜「猫のポーズ」「バッタのポーズ」 *朝「人魚のポーズ(左右)」「ヨットのポーズ(左右)」 ・「ストレッチ」下肢をメインに行う。 ・「フットマッサージ」普段職員が行っているマッサージを自分で行えるようレクチャーする。		
10/12	修学旅行前のTDR講座	19:00～	行事部屋
	高2生と希望者。参加無料 東京ディズニーランドのパンフレット。パレードのDVD。		
11/15	カラオケ	19:10～	1Fテレビ室
	参加者9名 参加料300TURU 30分歌い放題		
12/2	止血法	19:00～	1Fテレビ室
	参加者6名 参加無料 血液は身体の中にどれくらいあり、どういう役割をしているのか、血液を失うということは身体の中でどういうことが起るのかの話から出血を止める必要性を話す。止血については患部の拳上と、主に行われている直接圧迫法のやり方と、留意点を話した。		
通年	川柳クラブ 手芸クラブ	余暇の時間に不定期に行っている	

多岐にわたる文化教室は主に夜の自習時間を利用して行った。参加者は早めにポスターで希望を募った。子どもたちはポスターが貼られると興味のあるものに友だちと誘い合って名前を記入していた。また「TURU」の残高を気にしている子どももいた。

健康オタククラブは、参加人数が多く2人一組で行った。「痛い」がメインにならないように「力」を自分の体で確認しながら行った。その後は指導員が「ストレッチ一緒にせんかね。」と声をかけると自習時間に宿題が終わった後、「先生ストレッチせんが？」と言って同室の子どもたちと一緒にストレッチをしながらリラックスし、日常の何気ない会話を楽しんでゆっくりとした時間を過ごしていた。

止血法は自傷している舎生たちへ自分の身体を大切にすることはどういうことかを知らせる機会となった。興味のなさそうな表情で聞いている舎生も、その目はそらすことなく講師の寄宿舍指導員を見ていた。いろいろとよく知っている舎生は講座の後「生理を止める方法は？」と質問してきた。生理の経血は怪我の出血とは違う話、生理のしくみの話を付け加えた。出血の量の話ではペットボトルに血液量分の水を入れて分かりやすく説明すると食い入るように前に出て聞く姿も見られた。

手芸や川柳では舎生同士刺激しあって、やりたい気持ちが広がっていった。編み物も一人が始めたらそれを見てやりたくなり何人も編み始めた。川柳は隔月に作品を募り、廊下にある「すももの広場」に掲示して披露した後、大賞を決定し賞金の「TURU」を贈呈した。カラオケは歌うことが好きな舎生が多いので参加者も多く、皆楽しんでいた。



写真1 止血法



写真2 止血法

ウ まとめ

キッズニアすももで3学期に行われる最後のフリーマーケットを舎生はとても楽しみにしている。

その中で“「TURU」報酬がほしいから～します”とそのことばかりに一生懸命になる舎生がいる。報酬を得ようと努力する姿はキッズニアすももの目的に沿っているが、そのために自分のしなくてはいけないことがおろそかになって自分中心に行動することがある。また、毎日の掃除や係活動をしたら〇がもらえるが、やれば貰えるということから、どのようにすれば「TURU」が貰えるのかという、人から評価してもらえるような工夫や努力ができるようにつなげていけたらよいと感じた。

また、「TURU」の使いみちについてフリーマーケットの存在は大きい。3年続けて行ったフリーマーケットは今まで着た事のない衣類の組み合わせに挑戦したり、おもちゃなどの小物を選んだりする楽しみがあり毎回好評であるけれど、今後マンネリ化しないような工夫や取組が必要である。

文化教室に参加するにはそれぞれの教室によって参加料も異なる。興味のある舎生は高い参加費を支払っても文化教室に参加していた。関心がない内容などは、誘われても参加しないなどそれぞれ選択の自由があり、自己決定ができる機会にもなった。舎生のほうからも何か興味を持てることはないかと期待感があるようで、これやりたい、まだ？という声が舎生から出てきている。楽しいことの窓口になっているように思う。誰もが楽しめる歌声喫茶は参加者も多く「1番だけだよ」と制限をかけ

る必要があるくらいであった。今後不定期ではなく計画的に行えたらもっと楽しめるのではないだろうか。

卒業後の生活において余暇の充実は自分らしく楽しい生活を送る上で大切なことである。自由な時間をどのように過ごすかは一人ひとりの自由な選択によるもので、その選択肢が増えていくことが生活の豊かさにも繋がっていくのではないだろうか。子どもたちが様々な体験をしていくことで豊かさの選択肢が増えていき「その人らしい生活」へと更につながっていくのだと思う。

3 おわりに

寄宿舎での性の支援の取組も4年目となり、実践集録としても3年取り上げてきた。まだまだ、子どもたちが興味をもって気軽に参加できるような工夫やテーマの設定、専門性の向上、学校、各ホーム間での実践内容の共有など課題はたくさんある。そのため、1回のしゃべくりKの話し合いで成果を求めるのではなく、そこから日々の生活の中での支援につなげ、子どもたちが安心して生活できる環境をつくっていくことが重要である。必要な情報を提供し、意見を出し合って、最終的に子どもたち自身が決断できるように支援すること、子どもが悩んでいるときにその気持ちに寄り添って相談にのることが指導員にできることではないかと考える。

保護者に対しては定期的にお便りを発行して、保護者アンケートの協力やしゃべくりKの様子を紹介することで、寄宿舎での性の支援の取組を伝えている。保護者アンケートでは、自由記述からチェック式に変更したことにより、回答が前年度の1割弱から半数以上に増えた。そのアンケートをきっかけに担当と保護者が支援方法などの話をすることで情報共有につながった。

また、授業見学やケース会を開くなど、少しずつではあるが学校とも連携を進めている。今年度より「性に関する教育」として校務分掌に位置づけられ、養護教諭、学校栄養士、寄宿舎指導員を含め学校全体で推進していくようになり、来年度以降も連携した取組を目指していきたい。

指導員の間でも、性に対する考え方は多様である。それぞれの意見や考えを尊重した上で、いま子どもにとって何が大切かを考え、一貫した支援をしていくことが大切である。そのため、指導員間で十分に議論したうえで、今できることから少しずつ実践を重ね記録を集積していくことで、性の支援部だけでなく寄宿舎全体で性の支援に取り組んでいけるのではないだろうか。

次年度に向けては、ホーム年間支援計画の具体的な運用や活用方法について検討し、自治・行事・防災・性の支援など子どもたちの生活に直結した分野の支援の方向性について、共通認識を深められるようにしていきたい。

Ⅶ 本年度の研究のまとめ

本年度の校内研究は、研究テーマ「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実」（第Ⅱ期：3年計画）の最終年次の取組となった。3年間の研究目的は、次の2点であった。

- ①キャリア教育の視点を取り入れた授業研究を通して、児童生徒のキャリア発達を支援する。
- ②キャリア発達段階表を活用した実践を進め、小・中・高・寄宿舎の指導の連携を図る。

この目的を達成するために、教材教具の工夫、授業力の向上、キャリア発達段階表の活用促進などの中期目標を設定して全校で取り組み、本年度は研究の節目を迎えた。ここでは、Ⅱ期、3年間にわたる研究のもたらした成果と今後の課題について整理してみたい。



写真 第2回校内研修会

1 中期目標Ⅰ：教材教具の工夫

本年度3年目を迎えたICT研修会は、昨年度も好評であった校内教職員による教材教具の発表会と外部講師を招聘したiPad活用研修会を継続して実施した。まず第1回校内研修会では、各学部と寄宿舎で普段活用しているタブレット端末のアプリや教材などを発表し合った。短時間ではあったが、身近な実践が多数紹介されて参考になり、他学部や寄宿舎の様子を知るよい機会となった。

続いて夏期休業中の第2回校内研修会は、NPO法人支援機器普及促進協会理事長の高松崇氏を講師に迎えて開催した。「知的障害教育におけるタブレット端末を活用した指導」という演題で事例を交えてご講演をいただいた後、いろいろなアプリを活用して演習を行った。この研修会は、昨年度までの短時間の研修と異なり、一日日程でiPad初級コースを研修することができて大変好評であった。研修成果として、カメラアプリの基本操作や編集機能などを身につけた教職員が増え、タブレット端末を活用して児童生徒に分かりやすい教材教具を工夫した指導の展開につながったと考えられる。

2 中期目標Ⅰ：授業力の向上（学部研究）

授業力を向上させるためには、日々の授業改善に努めるとともに、年次研修者が年間1回以上のビデオ録画を活用した研究授業を行い、学部あるいは学年単位で研究協議を行った。研究授業の際は、本校のキャリア発達段階表(2016)との関連付けを明確にした学習指導案を作成し、児童生徒のキャリア発達を支援する授業づくりを進めた。これらの取組により、「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実」という共通のテーマに沿った授業研究を進めることができたと考えている。

小学部では、APDCAサイクルによる授業づくりを継続して、「キャリア発達を促す生活単元学習～教材教具の工夫を通して～」というテーマで5年目の研究に取り組んだ。その結果、Q&Aとキャリア発達段階表を活用した児童のアセスメントをした上で、授業全体のスケジュールの提示や、作業場面で児童に応じた手順表を準備するなどの教材教具の工夫に努め、児童のキャリア発達を促す授業を全学級で展開することができた。また、発達段階に応じたキャリア発達を促すという視点から、低学年・中学年・高学年に応じたテーマを設定して生活単元学習の研究授業を行い、ビデオ録画を活用して学部全体で研究協議を行ったことが授業改善につながり、研究成果を挙げることができた。

中学部では、「キャリア発達段階表を活用した授業改善」を研究テーマとし、作業学習に焦点を当てて研究を行った。この取組は平成27年度から継続してきた作業学習改善検討委員会や植草学園大

学発達教育学部の田所明房教授を招いた作業学習研修会を基にしており、新たなキャリア発達段階表を活用して生徒のキャリア発達の確認と課題の設定、支援の在り方を検討し、作業学習のさらなる充実を図るというものであった。4つの作業種ごとの成果と課題については、「中学部の研究」の章に詳細にまとめられている通りである。そして、学部合同で各作業の報告会や第3回校内研修会に向けての話し合いにより教師間の共通理解を図ることができ、次年度につながる研究ができた。

高等部では、「進路につながるキャリア教育の実践とまとめ」というテーマを設定して、昨年度までの成果を土台にして学年ごとに授業研究を進めた。この取組は、教育活動をキャリア教育の視点で再構築し、めざす生徒像を「自らの力を発揮することによって自己実現を図り、社会的自立につながる力を身につけた生徒」とする実践であった。「高等部の研究」の章には、学年ごとの実態と課題に応じて、生活単元学習、体育、学校行事、現場実習などを対象にして研究を進め、次年度につながる研究ができたことがまとめられた。

寄宿舎では、「豊かな寄宿舎生活を目指して～生活の中で育ち合う性と生～」というテーマを設定して4年目の研究を進めた。この研究は、性の支援がキャリア教育の上でも重要課題であるという認識のもと、平成25年度から「性の支援部」を立ち上げて継続されてきたものである。「寄宿舎の研究」の章には、本年度から寄宿舎生活支援計画の中に性の支援を位置づけることにより、各ホームの実践の中に性の支援を根付かせ、寄宿舎教育の質を高めていくことができたことがまとめられた。

3 中期目標Ⅱ：キャリア発達段階表の活用促進

キャリア教育に視点を当てた研究に取り組み始めてから、本校独自のキャリア発達段階表の作成と改善を進め、昨年度は2016版を作成した。そのキャリア発達段階表は、小・中・高・寄宿舎の連携のためのツールとして、次の3つの場面で活用する仕組みを整えた。

時期：7月	年度初めの児童生徒のキャリア発達を確認するために、パソコン内の個人資料にチェックを入れる。
時期：随時	研究授業の学習指導案を作成する際、その単元（題材）において育てたいキャリア発達の力を明確にするために活用する。（指導案の一部に挿入する）
時期：3月	年度末の児童生徒の引き継ぎ資料として、パソコン上の7月の個人資料に上書き保存する。

各学部の本年度の実践の中には、キャリア発達段階表を積極的に活用することが重要と考えるようになった傾向がみられた。特に、授業づくりにおける教師間の共通のツールとして、「学習がキャリア教育のどの能力と関連しているのか確認し、系統的な指導の在り方についてより具体的に検討を進めるツールとして、また評価のツールとしても活用していくこととした。（高等部より引用）」などである。児童生徒のキャリア発達は、今後も支援し続けていくものであり、「授業力の向上」を目指し取組と合わせて、小・中・高・寄宿舎の指導における一層の連携のため、キャリア発達段階表の活用が定着しつつあることは大きな成果である。本年度末には2017改訂版（巻末資料を参照）として改善したキャリア発達段階表を作成することもできた。

キャリア教育の充実を目指した校内研究は、本年度で一つの節目を迎えるが、キャリア教育は「教育の質」「授業の質」を高める上で有効な視点であったと考える。来年度以降も、児童生徒一人一人の卒業後の自立に向けて、本年度に残された課題に取り組むことが求められる。また、次期学習指導要領に示された「アクティブ・ラーニング」の視点などの新たな教育課題の在り方についても検討し、教育の質を高める取組をしていきたい。

【巻末資料】

高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表（2017改訂版）

※活用目的：日々の学習や寄宿舎生活がキャリア教育のどの能力と関連しているのか確認し、系統的なつながりのある指導に活かす。

		小学生		中学生	高校生	
キャリア発達の段階		生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期		職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期	
能力領域 ※1 ※2	観点	低学年で育てたい力	高学年で育てたい力	中学部で育てたい力	高等部で育てたい力	
人間関係形成能力（つながる力）	人間関係形成能力（つながる力）	人のかかわり	認められたり、褒められたりすることにより自分の良さに気付く。	自分と相手の違いを知る。	現場実習における自分の能力や適性を知る。	
		集団参加	友達と仲良く遊ぶ。	集団の中でいろいろな友達とかかわる。	友達と協力して学習に取り組む。	いつでも、どこでも、誰とでもいろいろな活動が行える。
		意思表現	自分の意思を表現する。	日常生活に必要な意思を表現する。	集団の中で自分の意見を述べる。	自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える。
		場に応じた言動	身近な人に挨拶や返事をする。	自分から挨拶をする。	状況に応じた言動をする。	場や状況に応じた言動をする。
情報活用能力（みつける力）	情報活用能力（みつける力）	様々な情報への関心	家庭の仕事に興味をもつ。	身近な仕事に興味をもつ。	情報を得るための様々な方法を知る。	図書やインターネットを活用し必要な情報を収集する。
		社会資源の活用とマナー	学校のきまりを守る。	公共施設の利用の仕方を知る。	公共の基本的なきまりを守って行動する。	社会の様々な情報やサービスを知る。
		金銭の扱い	やりとりを通してお金の扱いに慣れる。	お金の大切さに気づく。	お金の役割を知り、使い方がわかる。	生活の中のお金の使い方について理解する。
		働く喜び	大人と一緒に係の仕事をする。	自分の役割を果たす。	社会には様々な仕事があることを知る。	実習や職場見学を通して、働くことの意義を理解する。
将来設計能力（憧れてめざす力）	将来設計能力（憧れてめざす力）	習慣形成	家庭や学校生活に必要な基本的な生活習慣を身につける。		職業生活に必要な基本的な習慣を身につける。	職業生活に必要な実践的な習慣を身につける。
		夢や希望		身近な働く人に関心をもつ。	憧れとする仕事や夢をもつ。	自分が力を発揮できる仕事への関心をもつ。
		やりがい	時間いっぱい活動する。	時間やきまり、活動の手順がわかる。	好きな活動をもち、自発的に取り組む。	余暇を含めて卒業後の生きがいを見つける。
		進路計画			将来の進路について考える。	将来の進路希望に基づいて目標を立てて努力する。
意思決定能力（かなえる力）	意思決定能力（かなえる力）	目標設定	自分のことは自分で行おうとする。	自分のやりたいことを最後までやり遂げる。	自分で達成可能な目標を立てる。	将来の自分を考えて、卒業までの目標を立てる。
		自己選択	自分の好きな遊びや活動を選ぶ。		自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む。	実習を通して、将来やりたい仕事を選ぶ。
		自己評価	活動や一日の振り返りをする。		よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。	現場実習などでの自分を評価する。
		自己調整		嫌な気分になっても立ち直ることができる。	様々なトラブルに対する対処方法を身につける。	卒業後に想定されるトラブルや対処方法を知る。

※1＝国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」より ※2＝中央教育審議会答申（平成23年1月）より

平成29（2017）年2月 発行

高知県立日高養護学校

〒781-2151 高知県高岡郡日高村下分 60 番地

T E L 0889 - 24 - 5306

F A X 0889 - 24 - 5308

E-mail hidaka-s@kochinet.ed.jp

<http://www.kochinet.ed.jp/hidaka-s/>